

ひとつ屋根の下



Yuiko Mizuhara
瑞原唯子

第1話 今日からここで

「ようこそ橘邸へ。今日からここで一緒に暮らすんだ」

車の後部座席から降りた遥たちの正面には、白亜の洋館がそびえている。

隣を見ると、七海がイルカのぬいぐるみを抱きしめて、不安そうに屋敷を仰ぎ見ている。その小さな手に力がこもる。すこし前まで泣いていたせいか目元が赤く、いつもの元気もない。

だが、いつまでもここで立ちつくしているわけにはいかない。このあと面会の予定があるのだ。こちらの都合で急かしてしまうことを申し訳なく思いつつ、優しく肩を押して玄関へと促した。

坂崎七海と初めて会ったのは、一年半ほど前、彼女が十歳のときだった。

父親を殺した男の手がかりを求めて橘邸に不法侵入したのである。それも本物の拳銃を持って。六歳のときからずっと父の敵を取るためだけに生きてきたというが、小さな子供がひとりではできないことではない。

そそのかして手を貸していたのは父親の同僚で親友だった男だ。孤児となった彼女を戸籍上死亡にしたうえで引き取り、銃の扱いを教えていた。しかも手を下した真犯人は彼自身だったというからタチが悪い。

その事件には遥の家族も大きく関係していた。直接の原因となったのは遥の血縁で、大本の原因を作ったのが遥の両親だ。そのことを知り、遥は責任を感じて彼女を引き取れないかと考えたのだ。

祖父の剛三に相談したところ、自分が里親になっても構わないと言ってくれた。ただし遥が一切の面倒を見るという条件で。金銭面については十分な個人資産があるし、できなくはないだろうと了承した。

しかしながら肝心の七海本人に激しく拒絶された。知らない人ばかりで嫌だと。遥が怖いと。学校にも行きたくないと。そんな状態にもかかわらず強引に事を運ぼうとして、ひどく追いつめてしまった。

マンションの一室に閉じ込められて、ろくな食事も与えられず、ひたすら人殺しの訓練をさせられていた——その彼女を真っ当に生きていけるようにしなければという使命感に囚われすぎていたのだ。

ひとまず彼女が懐いていた男に預け、一年半をかけてすこしずつ外の世界に触れさせていった。橘邸にも何度か連れてきた。そうやって幾度となく顔を合わせていくうちに、親しく話をしてくれるようにもなった。

だが、ここで暮らすことにはまだ抵抗があるらしい。

それでも腹を括るしかなかったのだろう。イルカのぬいぐるみを抱きしめたままではあるが、しっかりと前を見据えて入っていく。懐いていた男はひとりで遠い故郷に帰ってしまい、もうほかに行くあてはないのだから——。

「おなか为空いてるだろうけど、先にじいさんのところへ挨拶に行こう。一応、七海のお父さんになる人だからね」

絨毯の引かれた大階段をのぼりながら、隣の七海に告げる。

名前だけとはいえ、里親になってくれた剛三には挨拶をしておく必要がある。顔を合わせるのは初めてだが、たとえ彼に気に入られなかったとしても、いまさら反対などという事態にはならないはずだ。

「そんなに緊張しなくても大丈夫だよ。僕がついてるから」

「うん……」

さきほどまで抱きしめていたイルカのぬいぐるみは、執事の櫻井に預けたので手元にない。そのこともあってかひどく不安そうにしていたが、こくりと頷くと、気を取り直したように表情を引きしめた。

「掛けなさい」

剛三の執務室を訪ねると、待ち構えていた彼に応接用のソファを勧められた。遥は七海とともに並んで腰を下ろす。その正面に剛三が腰掛け、奥底まで探るようにじっと七海の瞳を見つめた。

「私が里親として君を迎え入れた橘剛三だ」

「よろしく申し上げます、坂崎七海です」

七海は背筋を伸ばしたまま、多少ぎこちなくはあるが怯むことなく返事をした。めずらしく丁寧な言葉遣いだ。普段は目上の人に対してもぞんざいな話し方なので、彼女なりに気を使っているのだろう。

剛三はゆったりとソファに身を預けて、満足げに頷いた。

「よく食べて、よく遊んで、しっかりと勉学に励みなさい。遥の言うことをよく聞くようにな。困ったことがあれば、学校のことも、勉強のことも、家のことも、何でも遠慮なく遥に言うといい」

「はい……？」

七海はそう返事をしながらも、混乱したような怪訝な面持ちになっている。だが機会が掴めなかったのか、雰囲気飲まれたのか、その場で尋ねることはなかった。

「ねえ、遥の言うことを聞けてどういうこと？」

執務室を辞した途端、七海は眉をひそめて遥に疑問をぶつけてきた。

事情を知らなければ、剛三が無責任に丸投げしたようにしか聞こえないだろう。おそらく彼はあえてそう聞こえるような言い方をしたのだ。単に面白がっているだけかもしれないが、もしかすると保護者としての遥を試しているのかもしれない。

「じいさんが橘財閥会長ってことは知ってる？」

「うん、大きい会社のいちばん偉い人って聞いた」

「そう、だから家のほうまで手がまわらないんだ」

「……それで僕のことを遥に押しつけたって？」

「押しつけられたんじゃないなくて任されたの」

正確ではないが、そういうことにしておいたほうがいだろうと判断した。遥自身が責任を感じて引き取らせてもらったなど、ましてや金銭面まですべて面倒を見ているなど、わざわざ告げる必要はない。

それでも七海は負い目を感じたらしく、神妙な顔でうつむいた。

「なんか……いろいろごめん……」

「七海が謝ることはないよ。そもそも嫌がる七海を連れてきたのはこっちなんだから。じいさんに言われたとおり、遠慮せずにここで楽しく暮らして、ちゃんと勉学に励んでくれればいい」

彼女に望むのはそれだけだ。感謝してほしいわけでも恐縮してほしいわけでもない。憂いなくあたりまえの生活をしてもらうために引き取ったのに、萎縮などされては本末転倒である。

「わかった。勉強は好きじゃないけど頑張るよ」

彼女はしばらく無言で目を伏せていたが、やがてしっかりと遥を見ながら頷き、かすかに笑みを浮かべてそう答えてくれた。

「じゃあ、挨拶も済んだしごはんにしよう」

「うん、おなかすいた！」

食事の話をするとうるさくなるのはいつものことだ。思わずくすりと笑い、はしゃぐ七海とともに一階のダイニングへ足を進める。きっとここでの食事も気に入ってもらえるだろう。

「あ、七海の部屋はここだよ。僕の部屋は隣」

ふいに長い廊下の途中で扉を示しながら言う。本当は食事のあとで案内するつもりだったが、通りかかったついでだ。七海はきょとんとして不思議そうに尋ねる。

「僕の部屋があるの？」

「もちろん」

もともとは双子の妹である滯の部屋だったが、結婚して家を出たので、代わりに七海の部屋にしたのである。他にも空き部屋はあるが、遥の部屋に近いほうが便利だろうと考えてのことだ。

扉を開けると、執事の櫻井に預けておいたイルカのぬいぐるみが、空っぽの本棚の上にちょこんと置かれているのが見えた。彼女にとっては父親の形見である。自分のもとに戻ったことで安堵しているようだった。

クローゼットには少ないながらも衣類が用意してあるし、ベッドと学習机もあるので、とりあえずはそれなりに暮らしていけるはずだ。もちろん足りないものがあることは十分承知している。

「学校関係のものとか、必要なものは追々そろえていこう」

「うん」

七海にもいろいろと欲しいものがあるだろうし、中学入学のための準備も必要だ。まずは制服と学生鞆、靴、それから——遥はちらりと隣に目を向け、彼女が中学生になった姿を想像した。

「七海ちゃん！」

鈴を転がすような声が聞こえて振り向くと、ひとりの少女が嬉しそうに甘い笑顔で駆け寄ってきた。ゆるいウェーブを描いた腰近くまであるピンクアッシュの髪が、ふわふわと揺れている。

彼女の名はメルローズ。遥の両親に実験体として拉致監禁されていた過去を持つ。わけあって故郷に帰ることができず、遥とは血縁上いところになるということもあり、剛三が養女として引き取ったのだ。

彼女がここに来て一年半以上になる。最初はしゃべることさえまならなかったが、いまでは小学校に通い、友達にも恵まれて楽しく過ごしているようだ。七海が来ることも無邪気に喜んでくれた。

「今日から七海ちゃんが私のお姉ちゃんになるんだね。早く一緒に暮らしたいなって思ってたからうれしい。仲良くしてね」

「うん……」

対照的に、七海は困惑ぎみに顔を曇らせている。

メルローズに対してはいつもだいたいこんな反応だ。嫌っているのではなく苦手なだけというのが本人の弁である。それなら無理に仲良くする必要はない。適度に距離をとっておけばいいと彼女には言っている。

しかしメルローズはそのことに気付いていないようで、仲良くなろうとしてぐいぐいと間合いを詰める。これでは逆効果でしかない。遥はさりげなく彼女の意識をそらそうと横から話しかける。

「メル、もう夜ごはん食べた？」

「うん、ひとりでさみしかった」

「ごめんね」

彼女はこくりと頷き、ほんのりと頬を染めて甘えるように抱きついてきた。すこし潤んだような鳶色の瞳でじっと見つめ、小首を傾げて尋ねる。

「あとでお部屋に行ってもいい？」

「構わないよ」

その頭にぽんと手を置くと、彼女は花が咲くように可憐に顔をほころばせる。鳶色の瞳にはもう遥しか映っていなかった。

「もしかして、メルも遥が面倒見てるのか？」

メルローズがひらりと身を翻して戻っていくのを見送ると、七海はちらりと横目を流して尋ねてきた。その表情から隠しきれない不安が垣間見える。

「いや、メルには専任の世話役がいるよ」

「雇ってるってこと？」

目をぱちくりさせて確認する彼女に、そうだよと首肯する。

メルローズに護衛を兼ねた世話役をつけたのは剛三だ。さすがに自分で引き取っておきながら遥に押しついたりはない。遥は血縁として彼女に寄り添うようにはしているが、面倒を見るの

は七海だけである。だから心配などしなくていいのだが――。

「なに考え込んでるの？」

「ん……やっぱり養子と里子は違うんだなって。別にひがんでるとかじゃないんだ。違ってあたりまえだし納得しただけ」

養子のメルローズには世話役をつけて、里子の七海にはつけない。

実際には経緯が違うので単純に比べられるものではないが、この事実だけを見れば差別と思うのも仕方がないかもしれない。すべてを飲み込むかのように表情を消した七海を見つめ、淡々と言う。

「世話役より僕のほうが贅沢だと思うけど」

「……………」

何を言いたいのかわからなかったらしく、七海はきょとんとして振り向いた。しばらく無言で見つめ合っていたかと思うと、急にブハッと吹き出し、おかしように肩を震わせて笑い出す。

「贅沢ってなんだよ。そういうこと自分で言うかな」

「事実だからね」

遥はわずかに口もとを上げた。

雇われの世話役より彼女のことを親身に考えられる自信はある。世話役がつかなかったことを嘆かせたりしない。そう決意を新たに、いまだに笑い続けている彼女の肩に手をまわした。

第2話 二人きりの朝

「七海、もう起きる時間だよ」

遥はベッドの端に腰掛けてそっと声をかけた。スヤスヤと心地よさそうに眠っていた彼女は、かすかに眉を寄せながらこちらに寝返りを打ち、ぼんやりと半目を開く。

「ん……武蔵……？」

武蔵というのは、昨日まで一年半ほど七海を預かっていた男である。しかしながらいまはもう遠い故郷に帰ってしまい、ここにはいない。遥は微妙なところもちになり苦笑を浮かべた。

「寝ぼけてる？」

「……そっか」

七海はゆるりとあたりを見まわして現状を思い出したようだ。枕元の目覚まし時計に眠そうな目を向ける。目覚ましは七時にセットされていたが、いまは六時すぎである。

「早いね」

「朝練するから六時起きって言ったでしょ」

「あ……ごめん、いままで七時だったから」

彼女は目をこすりながらもぞりと体を起こした。まだぼうっとしていて半分寝ているようだ。髪もあちこち寝癖でびよんぴよんはねていて、いかにも寝起きといった風情である。

遥はくすりと笑い、クローゼットから取ってきたジャージを差し出した。

「これに着替えて」

「うん……」

七海はうつらうつらしたまま、おぼつかない手つきで着ていたパジャマのボタンを外し始めた。

「ふわぁ」

ジャージに着替えた七海は、遥と並んで廊下を歩きながら盛大に欠伸をした。目尻には涙がにじんでいる。冷たい水で顔を洗ったはずだが、それでも完全には目が覚めていないようだ。

「眠れなかった？」

「ん……寝たけど眠い」

「疲れてたんだね」

それまで暮らしていた人と別れたり、新しい家に連れてこられたりと、きのうは精神的に疲弊する出来事が多かった。早起きさせるのは酷だったかもしれない。今日は案内くらいにしておこうかと考える。

「……あのさ」

七海はうつむき加減でちらりこちらに視線を流し、ためらいがちに切り出した。

「遥って、いつもメルと寝てるのか？」

「いつもじゃないけどわりと多いかな」

メルローズはひとりだと寂しくて寝られないと言って、遥のところへやってくる。昔は一緒

にベッドに入って寝かしつけていたが、いまはそこまでしていない。彼女が寝つくまで、勉強や仕事をしながら話し相手になるくらいだ。

「もしかして話し声がうるさかった？」

「うるさいってほどじゃないけど……」

そんなに騒いでいなかったはずだが、たまにはしゃぎ声を上げていたので隣の部屋まで響いていたかもしれない。メルローズを引き取ったときは両隣とも空いていたこともあり、気にしたことはなかった。

「わかった、メルにはなるべく声を抑えるようにしておく。そろそろちゃんと自分の部屋で寝させようと思ってるけど、急には無理だから、もうしばらくはこういう状態が続くかな」

もともと中学生になるまでにはやめさせるつもりでいた。あと一年とすこしだ。寂しがりで甘えたところがあるので、突き放すのではなく、すこしずつ慣れさせていこうと考えている。

「うるさかったら我慢しないで言いに来て」

「……わかった」

七海はそう答えつつも、下を向いてひそかに口をとがらせている。

気持ちはわかるが、彼女の望みばかりを優先するわけにはいかない。ごめんね、と言いながら隣でうつむいている頭にぽんと手をのせる。そのとき小さな耳がほんのすこし上気するのがわかった。

「わあ……！」

地下へ続く階段を下り、重みのある扉を開けて蛍光灯をつけると、七海が感嘆の声を上げた。さきほどまでの眠気はどこへいったのか、きらきらと顔をかがやかせながら駆け込んでいく。

そこは数か月前にできたばかりの真新しいジムである。エアロバイクやランニングマシン、トレーニングマシンなどが並び、奥には格闘術の訓練ができるよう広いスペースがとってある。

「テレビで見たスポーツジムみたい！」

「七海はこっち」

いそいそとトレーニングマシンに跨がろうとしていた彼女を手招きで呼び寄せると、広い訓練場のほうへ向かう。彼女は並んで歩きながら、さきほどのマシンが並んでいるあたりを指さして尋ねた。

「あれは使わないの？」

「子供にはまだ早いから」

「そうなんだ……」

しょんぼりとするが、素直に聞き入れてくれたようで駄々はこねなかった。

遥は訓練場の前でポケットから紙を取り出して広げる。何の変哲もないレポート用紙に書いたメモのようなものだ。その内容を確認していると、彼女がひょこりと首を伸ばして覗き込んできた。

「あ、これ僕のトレーニングメニュー？」

「そう、きのう考えてみたんだ。どうかな？」

「うん……これなら余裕だよ」

筋力トレーニングではなく体力づくりを目指しているので、ランニングや腕立て伏せ、腹筋、背筋などで軽く汗を流す程度にしてある。余力があれば体幹トレーニングを入れてもいいだろう。

七海からトレーニングをしたいと言ってきただけに意欲は高いが、その分オーバーワークには気をつけなければならない。体が出来上がっていない子供なのでなおさらだ。メニューを作ったのもそのあたりを警戒してのことである。

「腕立てとか腹筋とかこの五倍でもできるよ」

「やりすぎはかえって体に悪いんだ」

「でもいままでそのくらい平気でやってたし」

「メニューは様子を見ながら調整するよ」

「……わかった」

メニューを作っても守ってくれなければ意味がない。彼女の納得していなさそうな様子からすると、勝手に回数を増やしかねないので、きちんと見守っておく必要があるだろう。

「あとトレーニングとは別に護身術もやろう」

「えっ？」

これは武蔵に頼まれたことだ。彼は七海に簡単な格闘術を教えていたのだが、筋は悪くないので継続して教えてやってほしいと。遥としてはまず護身術を身に付けさせたいと考えている。

「土日の時間に余裕があるときに教えるから」

「えー……遥に教えてもらうのってなんか怖い」

「まあ、武蔵ほど甘くはないかもね」

思いきり嫌そうに顔をしかめた七海を見て、遥はくすりと笑う。彼女にはいまだに若干怖がられているようだ。それに関しては身に覚えがあるので仕方がない。実際、指導においては甘やかさないつもりでいる。

「でも、護身術は身に付けておいて損はないよ」

「どうせなら射撃やりたいんだけどなあ」

七海は口をとがらせた。

その瞬間——遥は冷たい手で心臓を鷲掴みにされたかのように感じた。我知らずこぶしを握りしめる。彼女としては何も考えず軽い気持ちで言ったのだろうが、聞き流せるものではない。

「もう人殺しの練習はさせない」

真剣なまなざしで強く見つめながら、そう告げる。

彼女は幼いころから復讐のために射撃を教え込まれてきた。犯人を殺すことだけを頭に思い描きながら。だから、勝手かもしれないがもう二度と銃を持たせたくない。たとえ合法であったとしても。

「うん……ごめん……」

彼女は最初こそ目をぱちくりさせて驚いていたが、すぐに真意を察したらしい。神妙な面持ちで謝罪の言葉を口にする。それを見て、遥はだいぶ頭に血が上っていたことを自覚した。いつの

まにか強く握りしめていたこぶしを緩める。

「僕のほうこそきつい言い方をして悪かった」

「うん」

七海はほっと息をつきながらそう返事をすると、気を取り直したようにエヘへとはにかみ、軽やかな足取りで訓練場に入っていく。

「じゃあ、ランニング始めるね！」

「疲れてるみたいだし今日は休んだら？」

「平気、体を動かしたい気分なんだ」

「わかった」

遥も付き合い、二人でメニューをこなした。

その時間が思いのほか楽しかったのは、誰かと一緒にトレーニングが久しぶりだったからか、あるいは他の誰でもない七海と一緒にだったからか、このときの遥にはまだわかっていなかった。

第3話 偽装恋人

「遥、おまえ眠そうだけど大丈夫か？」

経済学の講義が終わり、遥が教科書やノートを片付けていると、隣に座っている富田拓哉（とみだたくや）が心配そうに尋ねてきた。

確かに、土日はあちこち駆けずりまわったうえ、片付けることも多くてあまり寝ていない。眠いといえば眠いが、講義は最前列で居眠りもせず真面目に受けていたし、そういう素振りは見せないよう気をつけていたつもりなのに。

「そんなに眠そうにしてた？」

「いや……何となくだけど」

富田は小学から高校までずっと同じクラスの幼なじみで、大学の学部学科も同じである。それゆえ遥のことをよくわかっているのだろう。彼になら見抜かれても仕方がないかもしれない。

「いつも本当によく見てるよね」

「まあ、そりゃあ……」

「そんなに僕のこと好きなんだ」

にっこりと笑い、額が触れ合わんばかりにずいっと顔を近づける。富田は耳まで真っ赤になりながらわずかにのけぞった。大講義室の後ろのほうから、キャーと歓喜まじりの悲鳴が上がる。

「近すぎるだろっ！」

「そう？」

周囲に聞こえないよう声をひそめて言い合う。

ふいに富田はよろけそうになり慌てて長机に左手を置いた。その薬指にはシンプルなプラチナの指輪がかがやいている。遥はそこに同じ指輪をはめた自分の左手を重ね、微笑を浮かべた。

富田はただの親友だ。

友情にしては高価すぎるペアリングも、過剰なスキンシップも、近づく女子を退けるための偽装でしかない。多数の女子からうんざりするくらい声をかけられ、また男子からもひっきりなしに合コンに誘われ、辟易していたのだ。

思わせぶりなだけで付き合っていると公言したわけではないが、それでも一定の効果はあった。最初は気にせず突進してきた人や、偽装ではないかと疑っていた人も、一年が過ぎるころにはほとんど脱落していった。

当然だろう。同性愛者であればいくら努力したところで望みはないのだ。早々に見切りをつけて他のターゲットを探すほうが賢明である。どうセルックスやステータスしか見ていないのだから。

「心臓がもたねえ」

二人は大学から数駅離れた静かな雰囲気のカフェに移動した。人目を避けたいときに利用している隠れ家的なところだ。いつものように奥の目立たない席に座ると、富田はぐったりとテーブル

ルに突っ伏してそうつぶやく。さきほどの大講義室でのことを言っているのだろう。

「約束どおりキスはしてないよ」

「いつか事故るぞ」

そう口をとがらせる彼に、頬杖をついてにっこりと笑いかける。

付き合っていると公言せずそう匂わせるだけ、キスもしない、富田に好きな子ができたら終わりにする——そういう約束で彼の協力を取り付けたのだ。いまのところ約束は守っているつもりである。

ただ、限界ギリギリを狙っている部分はあるかもしれない。まとわりつく女子の幻滅や動揺が楽しくてつい悪乗りしてしまう。もっとも、最近はどういうわけか歓喜の声がよく上がっているのだが。

「いらっしゃいませ、ご注文はお決まりですか？」

「フルーツパフェとストレートティ、ホットで」

「あ……俺はホットコーヒー」

水とおしぼりを持ってきた壮年の男性店員に、それぞれ注文する。

富田はさっそくグラスの水に口をつけて一息ついた。そしてちらりと物言いたげな目を遥に向け、戸惑いがちに切り出す。

「おまえさ、目的のためとはいえ嫌じゃないのか？ 俺と……みんなの見てるところで手を握り合ったり、顔を近づけたりとか」

「全然」

遥は即答したが、富田は何ともいえない複雑な表情になった。

遥としては嫌だと思ったことは本当に一度もない。幼いころは一緒にお風呂に入ったこともある仲だ。いまさらそのくらいでどうこう感じたりしないし、他人に眉をひそめられても気にしない。けれど——。

「富田が嫌なら終わりにするけど」

「いやいや、大丈夫だ！」

左手薬指のペアリングを抜くポーズを見せると、彼は慌てて押しとどめた。遥はその勢いに啞然として目をぱちくりさせる。

「これやめても友達まではやめないよ？」

「あ、いや……嫌じゃないから続けようぜ」

「そう？」

スキンシップをするとき、富田はよく真っ赤になってうろたえている。

おそらく遥の顔立ちが滯と似ているからだろう。富田は幼いころからずっと遥の双子の妹である滯に片思いしていた。彼女は結婚してしまったのもう望みはないが、未練はあるらしい。

もしかしたらそれですら感じていたのかもしれない。だが富田自身がそれを否定して続けることを望んでくれるのなら、断る理由はない。あまり無理をしていなければいいのだが——。

「それより話があるんじゃないのかよ」

「ああ……きのう七海を引き取ったんだ」

「そういや、そろそろって言ってたな」

富田には七海のことをおおまかにだが話してあるし、紹介もした。幼なじみで親友だからというもあるにはあるが、偽装恋人という関係が続けるうえで、そのくらいは知っておいてほしいと考えてのことだ。

「あ、それでさっき眠そうにしてたのか」

「まあね」

肩をすくめると、富田が同情的な目を向けてきた。

「大変だな、まだ大学生なのに」

「そうでもないよ。家でのことは使用人に頼めばいいから、僕は主に学校関係のことくらいかな。だから大学の講義もいままでどおり出るし、富田とお茶する時間だつてとれるよ」

「ん、ああ……」

食事の用意や洗濯までしなければならないのなら無理だが、幸い使用人がいる。小さな子供ではないのでずっとついていする必要もない。しばらくは学校関係の手続きや入学準備などで忙しいだろうが、中学生になってしまえば落ち着くだろう。

「それでさ、これ」

ペアリングをはめた左手を軽く掲げてそう切り出すと、富田は飲みかけのグラスを置いてきょんとした。こういう表情を見るとついからかいたくなるが、いまは真面目に話を進める。

「七海にきちんと説明しておこうと思って」

「え、きちんとって……どう説明するんだ？」

「もちろん正直に本当のことを話すつもり」

「女よけの偽装だつて？」

「そう」

噂という形で彼女の耳に入るよりは、先に真相を知らせておいた方がいいと考えてのことだ。こんなくだらないことで悩ませてしまうような事態は避けたい。

「それ子供に理解できるのか？」

「七海なら大丈夫だと思う」

「その子からバレるってことは」

「もちろん口止めしておくよ」

「でも子供だからなあ」

富田は腕を組んで渋い顔をする。

今のところ、真相を話したのは祖父とその秘書と妹夫婦くらいである。確かに知る人物が増えるだけ露見する可能性は高まるし、それが子供となればなおさらだろう。わかってはいるが、それでもやはり自分から話しておきたいのだ。

「駄目？」

遥は瞬ぎもせずまっすぐに富田を見つめて尋ねる。彼は腕を組んだまま伏し目がちに考え込んだかと思うと、急に顔をしかめてガシガシと自分の頭をかき、ふうと大きく息をついた。

「俺と違って、おまえはいつもリスクを考えたうえで決めてるもんな。だったらもう止められな

いдар。そもそもおまえのためにやってることだし、バレたところで俺が困るわけじゃないし」
「ありがとう」

ふっと微笑んだところで、注文したものが運ばれてきた。

遥がフルーツパフェを食べ始めると、富田もコーヒーにたっぷりのミルクを入れて口に運んだ。そのあいだずっと視線を落として何か考え込んでいたが、やがて背もたれに身を預けると、ちらりと物言いたげな視線を上げておもむろに口を開く。

「なあ、もしバレたら他のヤツに頼むのか？」

「頼める人なんて富田以外にいないよ」

遥はパフェを食べる手を止めずにさらりと答えた。

そもそも露見してから他の人に頼むなど意味のないことだ。また偽装と思われるだけである。さまざまな意味でまわりが騒がしくなるかもしれないが、どうにかやり過ごすしかないだろう。

「そうか……そうだよな……」

新たな犠牲者が出ることを懸念していたのか、あるいは遥のことを心配してくれていたのか——富田はほっとしたように小さく息をついて表情を緩めると、再びコーヒーカップに手を伸ばした。

第4話 彼女と暮らした男

「自分が死んだあとのことなんかどうでもよかった」

警察庁長官の執務室にある応接ソファで、七海と約二年ぶりの再会を果たした真壁拓海は、彼女の質問に対して眉ひとつ動かさずにそう答えた。すこしの希望も抱かせない冷めた口調で。

七海はいまにも泣きそうになりながら深くうつむいた。

真実を知ってもずっと心のどこかで信じていたようだが、こうなってはもう認めざるを得ないだろう。彼にとって自分は復讐の道具でしかなかったということ——。

それは散り始めた桜の花びらが吹雪のように舞う、ある春の日のことだった。

遙は七海が通うことになった私立中学校の入学式に保護者として出席し、その帰りに、真新しいセーラー服に身を包んだままの彼女を連れて警察庁に向かった。真壁拓海と面会させるためである。

彼は、七海の父親である坂崎俊輔を殺した男だ。

ともに公安で最重要機密に関わる職務に就いていた同僚で、親友だった。あるとき俊輔が国家を危険にさらしかねない反逆行為を犯し、処刑を免れない状況に陥ったため、拓海が自らの手で葬ったというのが真相のようだ。

しかし、彼は自分を許せなかった。

俊輔の娘を戸籍上死亡にしたうえでひそかに引き取り、復讐をそそのかして銃の扱いを教え、最終的に自分が敵だと明かして殺させる計画を立てた。それがどれほど身勝手に残酷なことか考えもせずに。

幼い七海にとって彼はひとりぼっちの自分に手を差し伸べてくれた恩人だった。四年半も一緒に暮らしたのだ。ささやかながらもたくさんの思い出があっただろうし、慕う気持ちもあっただろう。

それゆえ父親を殺したのは自分だと彼に明かされても、引き金を引けなかった。計画は失敗に終わったのだ。彼は自分で始末をつけるべく自害しようとしたが、それも彼女に止められた。

その後、彼がどういう状況を経てきたのかはわからないが、現在は以前と同じように公安で任務をこなしているらしい。

その情報は、公安職員をしているひとまわり年上の義弟から得たものである。任務の内容以外であればと教えてくれた。その彼に頼み、拓海と面会できるよう取りはからってもらったのだ。

七海はずっと彼のことを気にしているようだった。気持ちの整理がつかないまま別れたのだから仕方がない。未練を断ち切らせるためにも、中学生になったら一度だけ会わせようと考えていた。

もちろん強制はせずどうするかは彼女に委ねた。突然のことでさすがに戸惑っていたようだが

、それでもすぐに意志の強さを感じさせる面持ちになり、まっすぐ遥を見つめて答えた。会わせて——と。

面会場所は警察庁長官の執務室だった。

これは楠長官の意向である。拓海の状態を心配しているのかもしれないし、遥に対する牽制の意味もあるのかもしれない。ただし、面会の内容については一切口を出さないと約束してくれた。

コンコン——。

扉が開くとスーツを身に付けた真壁拓海その人が姿を現した。

七海ははじめたように立ち上がり、拓海もそれを目にして動きを止めた。互いに無言のまま、息をすることさえ忘れてじっと見つめ合った。まるでそこだけ時間が止まったかのように。

「七海……元気そうでよかった。大きくなったな」

「拓海は変わらないね」

そこには多少ぎこちないながらも心を許しあったような空気が流れた。

四年半も一緒に暮らしてきたのだから仕方がないが、いまさら拓海のほうへ気持ちが傾くのは危険だし、何より面白くない。ここで遥にできることといえば無言の牽制くらいだった。

攻撃的な気をぶつけていれば遥の存在を無視できなくなる。その目論見は成功したとっていい。彼は近況報告のような他愛のない会話を続けながらも、ひそかに遥を意識していた。

「橘家で暮らしていると聞いたが」

「うん、良くしてもらってるよ」

「学校にも行ってんだな」

「今日が中学の入学式だったんだ」

七海のセーラー服を見ながら曖昧な笑みを浮かべた彼は、何を思ったのだろう。学校へ行かせなかったことを、すこしは申し訳なく感じたのだろうか。だとしてもいまさら遅い。

拓海が七海から奪い去ったものや与えなかったものは、すべて遥が与えるつもりである。拓海には何も望んでいない。七海に爪痕を残さず消えてくれればそれでよかった。なのに。

彼は七海の求めに応じて、俊輔を手を掛けるに至るまでの状況や心情を語った。七海が本当のことを知りたいというなら止められない。気持ちに区切りをつけるために必要なのだろう。しかし——。

「七海が許せないなら、死んで償う」

この期に及んでまだそんなことを言うなんて。

七海のためといつつ彼自身がそうしたいだけだ。あいかわらず自分のことしか考えていない。どうせならいっそ無関係の事故で死んでくれればいいのに——遥は冷たく拓海を見据えた。

ただ七海は、すくなくとも表面上はあまり深刻にならず、死なれたら寝覚めが悪いよと受け流して苦笑した。しかしそれも束の間。ふいに表情を消すと、緊張した様子を見せながら別の話題を切り出した。

「お父さんの敵を取ったあとのことは、何か考えてた？」

それが彼女のいちばん聞きたかったことだろう。

復讐を完遂すると七海はひとりぼっちになってしまう。死んだことになっているので誰にも存在さえ知られていない。せめて生きていけるよう、何かしら取りはからってくれていたのではないかと。

彼女は信じたかったのだ。復讐のために引き取られたのは事実だとしても、四年半の同居で情が移り、それなりに大切に思われていたということ。しかし、拓海は冷ややかに言い放った。

「自分が死んだあとのことなんかどうでもよかった」

——と。

「もう聞きたいことは聞いたから、帰ろう？」

かすかに涙のまじった声。

振り向くと、七海は顔を隠すように肩をすくめてうつむいていた。遙はわかったと端的に答えてソファから立ち上がり、奥の執務机で書類を広げていた楠長官に告げる。

「私たちはこれで失礼します」

「ああ、楠会長によろしくな」

「伝えておきます」

一礼すると、七海も立ち上がりぺこりと頭を下げた。

すぐに退出しようとしたが、扉を開こうとする手を彼女が無言で押しとどめた。やけに思い詰めた顔をしていたかと思うと、そっと振り返り、ソファでうつむく拓海の後ろ姿を見つめる。

「じゃあね……もう会うことはないと思う」

「ああ……七海、おまえは真っ当に生きろ」

「勝手だね」

かすかに震えた声でそう言い捨てた。そして前に向きなおりグッと奥歯を食いしばると、勢いよく扉を開け放ち、今度は振り返ることなく執務室をあとにした。

「よく我慢したね」

エレベーターの前まで来ると、そう七海に声を掛けてハンカチを差し出した。

瞬間、潤んだ目からぶわっと決壊したように涙があふれた。彼女はあわててそのハンカチを目元に押し当てる。しかしおさまる気配はなく、それどころか嗚咽の声までもらし始めた。

「あんなやつに涙を見せずにすんでよかったよ。もったいないし」

「うっ……もったいないって何だよ……っ……意味不明すぎ……」

泣きながらもいつもと変わらない彼女を見て、遙はふっと笑う。人通りのないひっそりとしたエレベーターホールで、そのままボタンを押さずにただそっと寄り添い、彼女が泣き止むのを待った。

二人は警察庁をあとにする。

泣くだけ泣いてすっきりしたのか七海の足取りは軽い。うららかな春の陽射しを顔いっぱい
浴びながら大きく伸びをすると、膝丈のプリーツスカートをひらめかせて遙に振り向く。

「連れてきてくれてありがとう。おかげでふっきれたや」

「そう」

ふっきれたというにはまだいささか早いかもしれないが、それもまもなくだろう。彼女は強い。
。下手な慰めの言葉などなくても、自分で気持ちに折り合いをつけられるはずだ。

ぐううう——。

鳴ったのは七海のおなかだ。

真っ赤になってあたふたとうろたえる彼女を見て、遙は思わず笑った。今日だけでなく何度か
こういうことがあったなと思い出す。彼女は恨めしげに横目で睨んで口をとがらせた。

「お昼の時間だいぶ過ぎたからね。どこかで食べて帰ろう」

「うん、パフェも食べたい！」

食べると聞いて、頬を染めたままパッと顔をかがやかせてはしゃぎだした。食事の話になると
機嫌が良くなるのはいつものことだ。待ちきれないとばかりに身を翻して階段を駆け下りていく

。

その後ろ姿を眺めながら、遙は口もとを上げてゆったりとあとに続いた。

第5話 井の中の蛙

「いじめ？」

それは、梅雨入りしてまもないある日のことだった。

遙が大学から帰ると、玄関で待ち構えていた執事の櫻井から、内密で話したいことがあると切り出された。彼はこの家に長年仕えている信頼のおける人物だ。すぐ空き部屋に連れて行き、ガラスの応接テーブルを挟んで向かい合った。

そこで聞いたのが、七海がいじめを受けているらしいという話だ。毎日元気でそんな様子はまったくなかったもので、にわかに信じられず聞き返すと、彼は遙を見つめたまま顔を曇らせて首肯した。

「体操服が何度か泥水で汚れていまして」

「七海に話は聞いたのか？」

「学校にいじわるな人がいるのだと」

我知らず眉が寄る。一度ならず何度もとなると、彼の言うようにいじめである可能性が高いが、それだけで安易に決めつけるわけにもいかない。

「わかった。僕から七海に聞いてみるよ」

「よろしくお願いします」

櫻井が頭を下げる。

しかし保護者であれば対処するのは当然のことだ。彼に頼まれるまでもないし頼まれるいわれもない。遙は表情を動かさず、口を結んだまま小さく頷いて立ち上がった。

「七海、ちょっと話があるんだけどいい？」

「いいけど、何？」

櫻井と別れてすぐに七海の部屋を訪ねた。

彼女は真面目に勉強していたようで、学習机の上には開いた教科書やノート、辞書などが乱雑に置かれている。中断させてしまうことを申し訳なく思うが、こちらも大事な話だ。部屋に入らせてもらいベッドに腰掛けた。

「櫻井さんから体操服のことを聞いた」

「ああ」

七海は軽く頷いて椅子に腰を下ろし、口をとがらせる。

「なんかさ、教室を離れたときに校庭に捨てられたりしてさ。授業前なのにドロドロになって困るんだよな。さすがにあんな状態じゃ着られないし」

着ているときに暴行を受けたのではないかと心配したが、そうではなかったようでほっとした。しかしながら安心はできない。いじめらしき事実があったことには違いないのだから。

「じゃあ、体育の授業はどうしたの？」

「予備のを持ってる人が貸してくれた」

「そう」

どうやら少なくともひとりには七海の味方がいるようだ。この様子からしても孤立はしていないのだろう。

「体操服を汚した人は誰かわかってる？」

「それがさあ」

七海は思いきり眉をひそめる。

「たぶんそうだろうなって思う人はいるんだけど、証拠がないんだ。こんな卑怯なマネやめろよって言っても、証拠もないのに犯人扱いするなって言い返されて。でも薄笑いしてるし間違いのないと思うんだよなあ」

「誰？」

「綾辻瑠璃子、あと手下の三船百合奈と三枝琴音。こいつら何か知らないけど僕を目の敵にしててさ、くっだらな嫌味や悪口を言うてるんだ。あんまり相手にしないでほっといたけど」

その対処は間違っていないと思うが、七海を泣かせたいのにまったく相手にされず、ムキになってエスカレートしたとも考えられる。このまま放置していたらどうなるかわからない。

「よし、まずは証拠を集めよう」

「え、だから証拠はないって……」

「今度そういうことをされたら、なるべくそのままの状態であって。指紋とか、分泌物とか、犯人の痕跡が残っている可能性があるから。目には見えなくても警察で調べればいろいろとわかるんだよ」

そう告げると、彼女は微妙に顔を曇らせながら、言いづらそうに切り出す。

「あの、僕、警察とかあんまりオオゴトにしたくないんだけど」

「警察はあくまで最後の手段。証拠となるものを握っているという事実が大切なんだ。彼女たちも言い逃れがしづらくなるからね。戦うための武器ってこと」

「そっか……うん、わかった」

彼女は真面目に頷くと、ほっとしたように表情を緩めて笑顔になる。こういうのなんかちょっとワクワクするね、などと無邪気にはしゃぐのを見て、遥もつられてくすりと笑った。

「いろいろ集まったね」

切り裂かれた体操服、らくがきされたノート、破かれた教科書——あれからたった数日で証拠となりそうなものがこれだけ集まった。ビニール袋に入れて床に並べたそれらのものを眺め、遥はわずかに眉を寄せる。

正直、ここまで一気にエスカレートするとは思っていなかった。体操服を何度も踏みつけてずたずたに切り裂くなど、かなりまずい状況だ。教科書の破り方にもただならぬものを感じる。

しかしながら七海はケロッとしていた。発見したときにどう感じたかまではわからないが、少なくとも今現在ショックを受けている様子はない。それどころか期待に満ちた目で遥を見つめている。

「どうかな、証拠になりそう？」

「十分だよ」

体操服だけでは突きつける証拠として微妙なところだが、ノートは思わぬ収穫だった。これだけわかりやすいものがあれば中学生相手に戦いやすい。それを聞いた七海はすっかりやる気になっているが――。

「七海、ここから先は僕に任せてくれないかな」

「そんな、僕のことなんだから僕がやるよ！」

こればかりはいくら懇願されても聞き入れられない。真剣に彼女を見つめ返して言い聞かせる。

「七海が大丈夫だと言うなら出張る気はなかったけど、さすがに度が過ぎてる。悪いようにはしないから僕を信じて任せてほしい」

「……わかった」

不満はあるのだろうが、それを飲み込んで遥の願いを聞き入れてくれた。そんな彼女の信頼を裏切るわけにはいかない。遥は神妙に頷き、必ず結果を出そうとひそかに気合いを入れた。

「綾辻瑠璃子さん」

放課後、校門からすこし離れたところで例の三人組に声をかけた。

瑠璃子は怪訝に振り返ったが、すぐに誰だかわかったようでハッと息を飲んだ。入学式の時に見て知っていたのだろう。なのに、逃げるどころか嫣然と微笑みながら近寄ってきた。

「坂崎さんの保護者の方ですね」

艶のある声で、中学一年生とは思えない大人びた受け答えをする。

彼女は大手製薬会社の創業家一族の娘だ。四人きょうだいの末娘ということもあり、ずいぶん甘やかされて育ったらしい。それゆえわがままで、小学生のときから女王様気取りだったという。

実際、腰近くまである艶やかな黒髪や、美人になるであろう整った顔、物怖じしない堂々とした態度からも、そういう雰囲気かにじみ出ている。もちろんそれ自体は決して悪いことではないのだが。

「すこし話をさせてもらえませんか。三船さんと三枝さんも一緒に」

「ええ、構いません。それでは……あちらの喫茶店でいかがですか？」

「綾辻さんさえ良ければ」

話をするなら人目のあるところでなければと考えていたので、喫茶店なら問題はない。後ろの二人は勝手に話が進んでとまどっているようだが、瑠璃子は気にもせず、当然のように遥と並んで喫茶店に向かい始めた。

「綾辻さん、あなたは七海の何が気に入らないんですか？」

広くはない喫茶店で、遥は二人掛けソファに並んで座る瑠璃子にそう切り出した。彼女は予想していたのだろう。焦る様子もなく、うっすらと思わせぶりの笑みをたたえて聞き返す。

「坂崎さんの言うことを信じてらっしゃるの？」

「心当たりはないと？」

「言いがかりをつけられて困っているわ。ね？」

向かいの二人は請われるまま頷き、ひどく落ち着かない様子でオレンジジュースに手を伸ばした。一方、瑠璃子はストローをつまんで悠然とアイスレモンティを飲み、話を続ける。

「坂崎さんってもらわれっ子でしょう？ 育ちがよくないせいか平気で嘘をつくの。本当に困った人だわ。本来なら東陵に来られる身分じゃないのに、そのことをわかってらっしゃらないみたいだし」

その発言から、七海をいじめる理由が透けて見えた。

くだらない選民思想だが、彼女がそういう思想を持つことを咎めるつもりはない。それに基づく七海への不当な行動を止めたいだけだ。遥はビニール袋に入った証拠品を鞆から取り出した。

「これ、覚えはありますよね」

「さあ、証拠はあるのかしら」

瑠璃子とはぼけるが、向かいの二人が表情をこわばらせている。大変なことになったという心の声がダダ漏れだ。七海の読みどおり彼女たちの仕業で間違いない。遥は冷静に観察したのち溜息をついてみせた。

「こちらとしては二度としないでほしいだけなんですけど……そちらが認めないのであれば警察に被害届を出します。器物破損はれっきとした犯罪ですから。指紋照合や筆跡鑑定をすれば、犯人が誰かは容易に突き止められるでしょう」

そう告げると、瑠璃子の顔色が変わった。

「警察なんて……そんなことパパがさせないわ」

気付いているのかいないのか認めたも同然の物言いだ。さきほどまでのお嬢様然とした表情はどこへやら、眉を吊り上げながら苛立ったように睨みつける。それでも遥はすこしも動じない。

「へえ、君のパパに何ができるっていうの？」

「パパは綾辻製菓の社長よ。何だってできるわ！」

彼女は安い挑発に乗って声を荒げた。何だってできる——製菓会社の社長にできることなどたかが知れているが、彼女は本気で信じているのだろう。大人ぶっていてもまだ子供である。

遥は名刺を一枚取り出してすっと彼女の前に置いた。大学生ではあるが、祖父の仕事を手伝うために会社の名刺を作っているのだ。普段は当然ながら仕事相手にしか出さないけれど。

「パパに伝えてくれる？ 売られた喧嘩は買うって」

うっすらと唇に笑みをのせ、名刺に手をそえたまま身を乗り出して覗き込む。彼女が耳まで真っ赤にしてのけぞったのを見ると、すぐに表情を消し、テーブルに置いた証拠品を手早くしまっ

て立ち上がった。

「今週中には警察に届けを出そうと思ってるから、そのつもりで」

「イケメンだからっていい気になってると痛い目見るわよ」

彼女は顔を火照らせたまま恨めしげに睨み、捨て台詞を吐いた。

遥は目を細めてふっと思わせぶりの笑みを浮かべると、伝票を取ってレジに向かう。背後から、こんな会社パパにつぶしてもらおうわ、あとで泣きついても知らないんだから、覚えてらっしゃい、などと喚く瑠璃子の声が聞こえてきた。

青ざめて冷や汗をだらだら流した瑠璃子の父親が、地面に頭をこすりつけんばかりの勢いで謝罪に来たのは、その日の夜のことだった。

七海へのいじめはピタリとやんだ。

瑠璃子は前にもまして憎々しげに睨んでくるものの、あからさまな暴言を吐いたり物を壊したりということはなくなっただけらしい。二度としないよう父親に強く言いつけられているのだろう。

一部のクラスメイトは巻き込まれるのを怖れてか七海を避けていたが、いじめがやんでからは普通に接してくれるようになったと聞いた。ただ、校外で会うほどの友達はまだいないようだ。

それもあってか休日にはあまり外に出ようとしなかった。遥が声を掛けられないかぎり、宿題や勉強をしているか、小説などの本を読んでいるか、ジムで体を動かしているかのどれかである。

かつて何年も軟禁状態だったことも影響しているのかもしれない。彼女にとっては家から出ない生活があたりまえだったのだ。おまけにひとりにも慣れていたので寂しがることもない。

それゆえ時間を見つけてはこまめに買い物や美術館、映画館、夏祭りなどに連れ出すようにしていた。外出が嫌いなわけではないので誘えばたいてい来てくれるし、楽しんでくれる。

もちろん勉学も疎かにはさせない。好きじゃないなどと言っていたわりには真面目に取り組んでいるようだ。成績も悪くない。定期テストで十位以内をキープしているのだから上出来といえるだろう。

夏休みが過ぎて二学期になっても、そんな平穏な日々が続いていたが――。

「野球？」

それは、秋めいてきた涼しい夜のことだった。

次の土曜日に映画を観に行こうと七海を誘ったのだが、野球を見に行くからと断られた。これまで野球なんて興味を示したこともなかったのに。怪訝に聞き返すと、彼女は屈託のない笑みを浮かべながら答えてくれた。

「野球部が準決勝に進んだんだって」

「友達と応援に行くってこと？」

「ううん、僕はひとりで行くつもり」

強豪校でもないのに準決勝まで進んだのなら快挙だろう。そんな野球部を応援しに行くというのはわからないでもないが、七海が自主的に思い立ったとは考えられない。

「学校から応援に行くように言われた？」

「そうじゃなくて……クラスメイトが試合に出るみたいでさ、応援に来てほしいって頼まれたんだ。そいつ、僕の体操服が汚されて使えなくなったとき、何度も予備のを貸してくれたから恩もあるし」

事も無げにそう言うが。

女子野球部がない以上、そのクラスメイトは必然的に男子ということになる。いじめがあったときにも話は聞いていたが、まさか借りた相手が男子だとは思いつかなかった。確かに体操服は男女とも同じなのだが――。

「行ったらダメ？」

いつのまにか真顔で深く考え込んでいたが、その声で現実に戻された。安心させるように優しく微笑みかけて答える。

「ダメじゃないよ。気をつけて行っておいで」

「うん」

七海がほっとしたように頷いたのを見て、部屋をあとにした。

彼女が休日に出かけるのも、クラスメイトと仲良くするのも、歓迎すべきことだ。なのに——無意識に眉を寄せてしまう。自室に戻って法社会学のレポートを書き始めても、心にかかる霽は晴れなかった。

「いってきまーす」

土曜日はすがすがしい秋晴れだった。

七海はショートパンツにパーカー、キャップといったいつもの格好をしている。しかし、もう昔のように男の子と間違えられたりはしない。ボーイッシュな格好だがどこをどう見ても女の子である。

背中には黒のリュックを背負っている。重量感があるのは二人分の弁当を入れているからだ。体操服のお礼として野球部のクラスメイトに差し入れるらしい。といっても七海の手作りではないのだが。

バタン、と扉の閉まる音で我にかえった。

誰もいない玄関ホールで溜息をついて部屋に戻る。先日買ったミステリを読もうとしたが、文字を目で追うだけでまるで頭に入ってこない。苛立ちまぎれに本を閉じて机に突っ伏す。

いっそ、見に行くか——。

我ながらどうかしていると思うが、何も手がかかず悶々としているくらいなら、とりあえず状況を確認してきたほうがいだろう。そう自分に言い聞かせるとすぐに立ち上がり、クローゼットへ足を進めた。

カキーン——。

澄みわたった秋空に、金属バットの甲高い打球音が響く。

遥が球場に着いたときにはもう試合は始まっていた。スタンドに入ってぐるりとあたりを見まわす。応援団はおらず、制服や私服の中学生らしき子たちや、選手の親と思われる人たちがまばらに座っている。

七海は最前列のベンチにひとりぽつんと腰掛けて、試合に見入っていた。もとより彼女に声をかけるつもりはない。遥は迷わず最後列に座り、斜め後方から見下ろす形でひそかに様子を覗う。

「二階堂！ 行っけー！！ 打てー！！」

それまでおとなしくしていた彼女が急に立ち上がり、こぶしを突き上げながら絶叫ともいえる声援を送り始めた。バッターボックスに入った選手が例のクラスメイトなのだろう。遠目だが一年生にしては体が大きいようだ。

カーン——。

軽めの音がして白球が飛んだ。ヒットになるか微妙な当たりだったものの、俊足でセーフになった。やった、と七海は何度も跳びはねながら全身で喜びを表し、彼もスタンドの七海に振り向いてはにかんだ——ように見えた。

ただ、残念ながら得点には繋がらなかった。続く打者が凡打に終わり、一塁に彼を残したままスリーアウトチェンジとなる。彼も力みすぎたのかその後の打席では精彩を欠き、チームは完封負けを喫した。

観客たちが次々と席を立つ中、七海はじっと座ったまま動こうとしなかった。しばらくすると制服に着替えた彼がスタンドに姿を現し、七海の持ってきた弁当と一緒に食べ始める。

野球部といえば坊主頭というイメージだが、彼は清潔感のあるスポーツ刈りだった。若干の幼さを残しつつも精悍で男性的な顔立ちで、体つきもがっちりとしている。遥とは正反対のタイプだ。

七海はその大きくも丸まった背中をぽんぽんとたたき、笑顔で何かを言っている。だいぶ離れているため声までは聞こえないが、落ち込んでいる彼を明るく励ましているのだろう。その様子はまるで——遥は立ち上がり、がらんとしたスタンドに背を向けて球場をあとにした。

「ただいまー」

廊下から足音が聞こえた気がして部屋の扉を開けると、リュックを背負った七海が帰ってきたところだった。遥が帰宅してから一時間もたっていないので、弁当を食べたあと寄り道しないで帰ってきたのだろう。そのことにひそかに安堵する。

「野球、どうだった？」

「負けちゃった」

七海は肩をすくめる。

「僕、野球のルールとかあんまりわかんなくてさ。でも一点差だったし惜しかったんじゃないかなあ。あいつも頑張ってたし……そうだ、来週の土曜日に残念会やろうって話になったんだけどいい？ どこか近くのお店へお昼ごはんを食べに行くみたい」

「野球部のクラスメイトと二人で？」

「うん……ダメかな？」

「お昼ごはんだけなら構わないよ」

「ありがと！」

軽い足取りで自分の部屋へ入っていく七海を見送り、遥も部屋に戻る。

球場での様子からしても、二人が互いに憎からず思っているのは間違いない。それなら言うことは何もない。友人ができるのも、世界が広がるのも、彼女の保護者として歓迎すべきだろう。

もし付き合うとしても——思春期ならそういうことがあってもおかしくはない。交際禁止の校則がない以上、中学生なりの節度を守るのであれば反対はできない。彼に問題がないかぎり。

遥は扉を背にして立ちつくしたまま考え込む。自分がどんな顔をしているかなど気付きもしないで。

第7話 自覚

「ただいま」

ノックが聞こえて扉を開けると、そこにはニコニコと笑みを浮かべた七海が立っていた。クラスメイトの二階堂と残念会をするために昼前に出かけて、いまは午後二時である。言いつけどおり昼食だけで帰ってきたのだろう。

「おかえり、楽しかった？」

「うん、もうおなかパンパン」

七海はおなかをさすりながら満足そうにエヘへと笑う。しかしすぐに思い出したようにショートパンツのポケットを探り、そこから折りたたまれた千円札三枚を取り出して、遙に差し出した。

「これ使わなかったから返すね。僕がおごるって言ったんだけど、逆にあいつがおごるって譲らなくてさ。結局おごってもらっちゃった」

「……そう」

一瞬、躊躇したが受け取る。

中学校の近くにあるイタリアンでランチbuffetを頼むと聞き、念のため二人分の金額を渡しておいたのだ。試合に負けた彼を元気づけると言っていたので、七海がおごってあげられるようにである。

もちろん彼がおごる可能性もあるだろうとは思っていた。女の子におごられるのを良しとせず、むしろ男の自分がおごらなければと考える人もいる。気のある相手であればなおさら――。

先週、球場で見てから彼のことを調べた。

父方の祖父は地方銀行の頭取で、父親は外資系企業に勤めている。なかなかのエリート家系だが、瑠璃子のように鼻にかけることもなく、いたって真面目で自己主張の薄い性格のようだ。

小学生のときはリトルリーグでそこそこ活躍していた。中学でも野球部で頑張っており、秋季大会の準々決勝では負傷した先輩の代わりに出場を果たした。一年生では彼だけである。

学業のほうも悪くない。成績は七海と同じくらいようだ。試験の順位も抜きつ抜かれつといった感じで、いいライバル関係だといえる。そういった意味でも話が合うのかもしれない。

口数は少ないが暗いわけではない。軽薄なところがなく実直な人柄。おまけに文武両道で見目も悪くない。それゆえ同性からも異性からも人気があるようだ。ただし告白はすべて断っている。

彼を排除すべき理由はどこにも見当たらない。もし二人が本当に想い合っているのであれば、付き合うことになっても反対はできないだろう。もちろん節度は守ってもらわなければならないが。

「じゃあね」

「ねえ」

軽く片手を上げて自分の部屋に戻ろうとした七海を、間髪入れずに呼び止める。もやもやした気持ちのまま過ごすくらいなら、いっそはっきりさせたほうがいいだろう。

「七海はさ、彼のことが好きなの？」

「えっ、まあ嫌いじゃないけど……」

「別に反対するつもりはないから」

「そんなんじゃないよ！」

七海は目を見張り、ふるふると両手を振って否定した。

「あいつはただのクラスメイト。学校では普通に仲良くしてるけど、付き合うとかそんなつもりは全然ない。だって僕が好きなのは……」

そこで言葉が途切れる。

彼女は口を半開きにしたまま顔を紅潮させると、狼狽あらわに身を翻して逃げようとするが、とっさに遥はその手首を掴んで止めた。息が詰まりそうになりながら後ろ姿を見つめ、問いかける。

「七海が好きなのは、誰？」

「誰でもいいだろ……」

「教えて。知りたいんだ」

細い手首を掴む力が無意識に強くなる。

七海は頬を上気させたまま困惑ぎみに眉を寄せた。だが、もう逃げることはできないと悟ったのだろう。バツと勢いよく振り向き、覚悟を決めたようにまっすぐ強気に見据えて答える。

「武蔵だよ！」

「……えっ？」

思わず手が緩んだ。七海はすかさず振りほどいて自分の部屋に駆け込んでいく。何の反応もできず呆然と立ちつくす遥をその場に残して――。

その夜は、ほとんど眠ることができなかった。

夕食のときは互いに何事もなかったかのように振る舞っていたが、少なくとも遥のほうはそういうふりをしていたにすぎない。本当は頭を鈍器で殴られたようなショックから立ち直れていなかった。

僕が好きなのは――。

彼女が口をすべらせたあの瞬間、なぜだかわからないがとっさに自分だと思った。息もできないくらい胸を高鳴らせてしまった。そう、他の誰でもなく自分であってほしかったのだ。

なのに。

まさか武蔵だなんて。彼女がここに来る前に一年半ほど一緒に暮らした男だ。確かによく懐いていたが、亡くなった父親と同じ年頃ということもあり、家族のように甘えているとばかり思っていた。

しかしながら彼はもう遠い故郷に帰ってしまった。二度と会うことは叶わないかもしれない。それを承知でなお思い続けているのだろうか。あきらめきれないほど好きなのだろうか。

ひどく打ちのめされた気分だった。これまで他人にどう思われようが気にしたことはなかった。むしろ恋愛感情は煩わしいものとしか考えていなかった。なのに、彼女にはそれを求めてい

る——。

遥はベッドから体を起こし、大きく溜息をつきながら自らの額を掴んだ。

「あれ、早いね」

翌朝、いつもの時間に地下のジムにやってきた七海は、すでに汗だくでエアロバイクをこいでいた遥を見て、不思議そうに目をぱちくりさせながら駆け寄ってきた。

「体を動かしたい気分だったから」

「嫌なことでもあった？」

「別にそういうわけじゃないよ」

遥はエアロバイクから降りて、タオルで汗を拭きながら訓練場へ向かう。

その隣に七海も並んだ。あんなことがあったばかりなのに自然体の彼女を見てみると、自分のことなどすこしも意識していないのだと実感させられ、胸の内に黒いものが渦巻く。

しかしそんな素振りは見せず、いつものように彼女のトレーニングに付き合った。メニューを一通りこなしたあと、仰向けに寝てストレッチをしながら、ちらりと隣に目を向けて尋ねる。

「いつから好きだったの、武蔵のこと」

七海は驚いたように目を見開いて振り向いたが、反発はせず、どこか曖昧に視線をさまよわせながら静かに答える。

「よくわからない。好きだって気付いたのは離ればなれになってからなんだ。もしかしたら最初に会ったときから好きだったのかなあ。まだ子供だったからわかってなかっただけで」

「……そう」

いまでも子供だが、二年以上前なら精神的にもっと幼かっただろう。特に彼女は同年代の子とまったく交流がなかったので、そういう方面に疎くても仕方がない。しかし、いまになって気付いたところで——。

「武蔵はもう帰ってこないけど」

「そんなのわかってるよ」

七海は拗ねたように口をとがらせて言い返した。小さく息をつき、まっすぐに白い天井を見つめながら目を細める。

「待たないし期待もしない。そう決めてる」

「不毛だね」

遥は苛立ち、冷ややかに吐き捨てて立ち上がった。

七海もすぐにぴよんと跳ねるように立った。組んだ手を上に向け、その場で大きく伸びをしながら言う。

「しょうがないじゃん……僕だって会えないってわかってる人を好きになんてなりたくなかった。でも自分の気持ちなのに自分で思いどおりにならないんだもん。どうしようもないよ」

言葉が突き刺さる。

まるで自分のことを言われているかのようなようだった。返す言葉を見つけられず、それでも無表情を崩すことなく立ちつくしていると、七海が興味津々に目をくりっとさせて覗き込んできた。

「ね、遥は好きなひといる？」

「さあね」

一瞬ドキリとしたが、わずかに目をそらただけで表情には出さず、どうでもいいことのように素気なく受け流した。えー、と七海は眉をひそめながら不満を露わにする。

「自分だけ秘密だなんてずるい、教えてよ」

「いつかね」

これまで生きてきて誰も好きにならなかった。これからも誰も好きにならないと思っていた。橘の後継者として結婚しないわけにはいかないが、見合いをすればいいと考えていた。けれど――。

遥はうっすらと微笑むと、すこしも納得していない七海とともにジムをあとにした。

第8話 僕で試せばいい

「ぜんぶ七海ちゃんのせいなんだから！」

クリスマス間近の雪がちらついていたある日、遥が帰宅して自分の部屋に向かっていると、ふとそんな叫び声が聞こえた。おそらくすぐ先にある七海の部屋からだろう。そして叫んだのは――。

バン、と勢いよく扉が開いてメルローズが飛び出してきた。鳶色の瞳からぽろぽろと涙の粒をこぼしている。遥に気付くとハッと息を飲んでうろたえたが、すぐに身を翻して走り去った。

「あれ、遥……」

開いたままの扉から姿を現した七海が、そこにいた遥を目にしてきまり悪そうにうつむいた。コートを着たまま鞆を持ったままのこの姿を見れば、帰ったばかりということはわかるだろう。

「メルと何かあった？」

「あー……まあ……」

彼女にしてはめずらしく歯切れが悪いうえ、目も泳いでいる。詳しく話を聞こうとしたが、そのときワゴンを押してきた使用人が足を止めた。

「お茶をお持ちしました」

「どうしよう、メルと飲むつもりで頼んだけど……」

「代わりに僕が飲むよ。そのときに話を聞かせて」

そう告げると、彼女は困惑したように顔を曇らせて目を伏せる。それでも逃れられないことはわかっているのだろう。小さく吐息を落とし、渋々といった様子ながらもわかったと答えた。

自分の部屋でコートを脱いですぐに、彼女の部屋へ向かった。

そのときにはすっかりお茶の準備が整えられていた。窓際に置かれた白いティーテーブルに、ティーポット、ティーカップ、クッキーが所狭しと並べられている。窓の外ではちらちらと雪が舞っていた。

「座ってよ」

「ああ」

二人は向かい合って座り、七海がティーポットの紅茶をおぼつかない手つきで注いだ。差し出されたそのティーカップに遥はさっそく口をつける。真冬の外気で冷えた体にじわりと温もりが広がった。

「それで、メルと何があった？」

「うん……」

七海はそっとティーカップを戻して息をついた。わずかに揺らぐ紅茶の水面を見つめながら、すこしだけ考え込むような表情を見せたあと、ぽつりと言葉を継ぐ。

「遥が構ってくれなくなったって」

「えっ？」

「メルが言うんだ……前みたいにおでかけしてくれなくなったし、部屋にもあんまり入れてくれ

なくなったし、とうとう一緒に寝てくれなくなった。それもこれも僕が橘に来たせいだって」
そういうことか——。

昨晚、これからはひとりで寝るようにとメルローズに告げた。もうすぐ中学生になるので年齢的にそうすべきと考えてのことだ。きちんと説明してわかってもらえたと思っていたのに、と苦い気持ちになる。

ただ、それ以外についてはメルローズの言うことも一理ある。七海の面倒を見るようになり、その分だけメルローズにかかる時間が少なくなった。だからといって七海を責めるのはお門違いでしかないが。

責めるのなら遥だろう。しかしメルローズの面倒を見る義務がない以上、七海を優先するのは致し方のないことだ。望みどおりにはできない。寂しくても悲しくてもあきらめてもらうしかない。

本来なら事前にこのあたりを察して、説得なり懐柔なりの対処をしておくべきだったのかもしれない。遥が至らないがゆえに、七海にもメルローズにも嫌な思いをさせる結果となってしまった。

「七海が責任を感じることはないから」

「ん……でもメルの気持ちもわかるんだ。僕のせいで遥をひとりじめできなくなったのは事実だしさ。遥が責任感から僕にかかりきりになってるのはわかってるけど、もうちょっとメルにも構ってあげてよ」

七海は気丈にもそんなことを言い、曖昧に微笑んだ。

こんな顔はさせたくなかった——負い目など感じなくてもいいと言い聞かせてきたし、彼女もそういう素振りは見せなくなっていたが、直接的に責められれば平気ではいられないのだろう。

しかしながら同時にチャンスだとも思う。彼女への想いに気付いた日からひそかに思案をめぐらせ、機会を窺ってきたのだ。まだ十分にあたたかい紅茶を飲んで小さく息をつくとき、彼女を見つめる。

「七海、僕は責任感だけで君と過ごしているわけじゃない」

「どういうこと？」

その言葉とともに問いかけるようなまなざしが向けられた。遥は急に緊張が高まるのを感じながら、気持ちを落ち着けるように小さく呼吸をして、ゆるぎのない確かな声音で答えを返す。

「七海のことを好きだから一緒に過ごしたいと思ってるんだ。七海が好きなのは武蔵だってことはわかってるけど、今はそれでも構わない。僕のことを嫌いじゃないなら付き合ってほしい」

「ちょ……ちょっと待って！」

七海は思いきり混乱した顔をしていた。あたふたとしながらも、必死に考えたであろう正論を口にする。

「両思いじゃないのに付き合うなんておかしいじゃん」

「でも武蔵とは会えないんだから両思いになれないよ」

「それは、そうだけど……」

その瞳が不安定に揺らぐのを見て、遥は畳みかける。

「会えない人のことをいつまでも好きでいてもつらいだけ。待たないし期待もしないって言ったのは七海自身だよ。だったら僕で試せばいい。僕と付き合うことで武蔵をあきらめられるかどうかを」

七海はハッと息を飲み、顔をこわばらせて戸惑いがちに目を伏せた。二度と会えない人を好きでいることがいかに不毛か、望みのない恋愛感情を持ち続けることがどれだけつらいか、彼女自身わかっているのだろう。

「遥は……それでいいの？」

「心配しなくても慈善行為ってわけじゃない。七海のことを好きだって言っただろう。武蔵より僕を好きになってもらえるよう頑張ろうとすると、付き合っていたほうが何かとやりやすい。下心はあるってこと」

そう答えてかすかに口もとを上げる。

七海は再び視線を落とした。その表情からだいぶ悩んでいることが窺える。重い沈黙が続き、遥がすこし緊張して唾を飲んだそのとき——彼女は決意を固めたように強いまなざしを返してきた。

「わかった。遥と付き合ってみることにする」

「その決断が正しかったと証明してみせるよ」

「うわ、すごい自信だね」

張りつめていた気持ちが苦笑とともに緩んだようだ。あらためてふうっと息をつく、ほとんど湯気の立たなくなった紅茶を一口だけ飲み、籠のクッキーに手を伸ばしてもぐもぐと食べ始める。

「でも遥が僕のことを好きだなんて本当かなあ。思い返してみても全然そんな感じがしないし、いまいち信じられないんだけど。やっぱり同情してるだけなんじゃない？」

「そんなにお人好しじゃないよ」

いままでは態度に出していなかったのが仕方がない。しかし——遥は彼女の口もとに手を伸ばしてクッキーの屑を拭くと、そのまま視線を外すことなく、うっすらと思わせぶりの笑みを浮かべて尋ねる。

「どうしたら信じてくれる？」

「……そんなのわかんないよ」

七海は頬を紅潮させ、消え入るような声で答えて口をとがらせる。

その様子を見て、遥はこれまでにないほど気持ちが高揚するのを感じた。きっと何もかもうまくいく。このときはすこしも疑うことなくそう信じきっていた。

第9話 恋人らしいこと

七海が僕のことを好きになりますように——。

遥は五円玉を賽銭箱に入れ、二礼二拍手し、手を合わせたまま祈念する。

その右隣では七海が、左隣ではメルローズが、同じように手を合わせて祈っていた。七海はどういうわけか眉を寄せて必死な顔をしている。よくばってあれもこれもとお願いしているのかもしれない。遥は横目で見ながらひそかにくすりと笑った。

元日の朝、三人は初詣のためにこの神社に来た。

近所のさほど大きくない神社で、普段は参拝客もほとんどなくひっそりとしているが、さすがに正月ということでそこそこの賑わいを見せている。七海たちのような着物の女性もちらほらといた。

遥は神仏を信じていないうえ年中行事にも興味がない。だからといって七海たちにその考えを押しつけるつもりはない。初詣を楽しむ権利はある。二人とも行きたいというので連れていくことにしたのだ。

七海とメルローズにはこの日のために着物一式を用意した。行きつけの美容室で着付けとヘアメイクをしてもらい、いつもよりずっと華やかになった自分の姿に、二人ともおおいに喜んでいた。

ただ、遥が和服でなかったことには口々に文句を言われた。遥の着物姿も見たかった、おそろいがよかった、と七海に言われてはすこし心が揺らぐ。来年は和服を用意してもいいかもしれない。

「遥は何をお願いしたの？」

帰り道、興味津々に目を輝かせたメルローズにそう尋ねられた。

彼女にはまだ七海と付き合い始めたことを知らせていないし、そうでなくてもあんな乙女のような願いなど言えるはずがない。そんなことを思いつつも表情には出さず、淡々と諭す。

「願いごとは人に話すと叶わないんだよ」

「そうなの？」

もちろん言いたくないがための方便である。

無神論者なので神様に叶えてもらおうとは思っていないし、そもそも神様をお願いしたつもりもない。自分自身がいま何を望んでいるかを確認しただけだ。決意を新たにするという意味では悪くない機会だと思っている。

「教えてもらおうと思ったのに、残念」

メルローズは不満を口にしながらもあきらめたようだった。

一方、半歩後ろを歩く七海はあからさまにほっとしていた。彼女も言えないような願いごとをしたのだろうか。気になったがいまさら訊くわけにはいかないし、訊いても答えてくれないだろう。

「今日は疲れたあ」

気の抜けた声でそう言いながらベッドに倒れ込む七海を見て、遥はくすりと笑った。

初詣のあと、祖父や親戚に挨拶をしたり、遊びにきた妹夫婦と話をしたり、みんなで一緒にごはんを食べたり、結局夜まで着物のまま過ごした。さきほどようやく着替えて遥の部屋へ来たところだ。

「着物はきれいだけど疲れるよ。歩きにくいし」

「だろうね」

普段、活動的に大股で駆け回っている七海からすれば、足が開かないことはかなりのストレスだろう。何度も大きく足を踏み出して転けそうになっていた。

「まあ、すこしずつ慣れていけばいいよ」

「慣れるほど着ないと思うけど」

「お正月以外にも着る機会はあるから」

その気になれば機会などいくらでも作れる。お堅い行事やパーティはもとより、花見、観劇、音楽会、あるいはちょっとしたおでかけに着てもいい。いや、着物だけでなくドレスやワンピースというのもいいだろう。

七海にはいろいろなことを経験させてやりたいし、その様子をそばで見たい。それは保護者としての責務であり、恋人としての願いである。今日も二人きりならよかったのだが――。

「ごめんね、今日はメルに構ってばかりで」

「ううん、全然」

七海は寝そべったまま、椅子に座っている遥に目を向けて微笑する。

先日の件はメルローズにきちんと理解してもらった。だが、彼女を寂しくさせるとまた七海に八つ当たりしかねないので、三人で出かけるときくらいはメルローズを優先しようと考えたのだ。

七海はあらかじめ了承したうえ、遥とメルローズの邪魔にならないよう協力もしてくれた。それでも不満そうな素振りのひとつも見せない。いっそこちらが不安になるくらいに。

「そうはいつでもやっぱり寂しかったんじゃない？」

「まあ……でも、いま一緒にいるんだしさ」

その反応に安堵して遥がわずかに微笑むと同時に、彼女はハッとして勢いよくベッドから跳ね起きた。不安そうな面持ちで遥を窺いながら尋ねる。

「まさか今日は勉強しろとか言わないよね？」

「さすがに正月までは言わないよ」

遥が苦笑して答えると、彼女はほっとして再びベッドに顔をうずめた。

冬休みに入ってから、年内に宿題を終わらせるようにと勉強ばかりさせていたのだ。互いの部屋を行き来することはあったが、勉強の進捗を確認したり、わからない問題を教えたりするくらいだった。

「何かさ、付き合うっていてもいままでと何にも変わらないよね。遥は彼氏っていうより小う

るさいお兄さんか家庭教師って感じだし。ちょっと拍子抜けだなあ」

七海はごろりと仰向けになりながら言う。

責めているつもりはないのだろうが、拍子抜けとまで言われては不本意である。恋人になっても保護者としての役割は疎かにできないので、ひとまずそちらを優先していただけたこと。ずっとこのままでいたいとは思っていない。

遥は音もなく椅子から立った。ベッドに片膝をついて微かにスプリングをきしませながら、不思議そうに目をぱちくりさせる彼女を真上から覗き込み、うっすらと唇に笑みをのせる。

「じゃあ、恋人らしいことをしようか」

「別に無理しなくていいよ」

彼女はムツとしたように言い返した。

しかし裏腹に頬はじわじわと熱を帯びて赤くなる。瞳もわずかに潤んできた。それでも遥を見つめ返したまま目をそらさない。そんな強気な彼女を愛おしく思いながら、ゆっくりと唇を重ねた。

やわらかい――。

胸がじわりと熱くなり、鼓動が次第に速く強くなっていくのを感じる。これまでの経験では何の感情も持てなかったのに、好きな相手だとここまで違うのか。ひどく高揚しながらも頭のどこかで冷静に考える。

唇をそっと離し、至近距離で七海を見つめる。

「好きだって言っただろう？」

そう告げると、彼女は唇を半開きにしたままこくりと頷いた。遥は誘われるように再び唇を重ねる。今度は触れ合わせるだけでなく、もっと深く――彼女はビクリとしたが、ぎこちないながらも遥の動きに応えてくれた。

やがて切羽詰まった様子で袖を掴まれたので唇を離した。彼女は息を詰めていたらしく大きく胸を上下させて呼吸をする。そのときにはすでに裾から遥の手が入り込んでいた。彼女のなめらかな肌をすべり柔らかなふくらみにたどりつく。

「嫌ならやめるけど」

「.....嫌じゃない」

濡れた唇からはっきりと紡がれた答え。

もう止められないし止めるつもりもない。かつてない緊張と興奮で頭の中がまっしろになりながら、それでもできるだけ彼女を怯えさせないようにしなければと、遥は最低限の理性を必死に繋ぎ止めた。

「なぜ呼ばれたかはわかっているな？」

「はい」

七海と体を重ねた翌日、遙は橘財閥会長である祖父の剛三に呼び出された。

ベッドに残る痕跡に使用人が気付かないはずもなく、剛三に報告する旨を執事の櫻井からあらかじめ伝えられていたため、心の準備はできていた。もとより隠すつもりはなかったので手間が省けたともいえる。

たじろぐことなくまっすぐ背筋を伸ばして立ったまま、冷静に見つめ返す。剛三は執務机で両手を組み合わせて難しい顔をしていたかと思うと、疲れたように溜息をついて口を開いた。

「おまえを信頼していたのだがな」

「七海とは双方合意の上で付き合っています」

「保護者の立場で許されると思っているのか」

「役目は疎かにしませんし、誰にも譲りません」

恋人として付き合うことも、保護者として面倒を見ることも、どちらもあきらめる気はない。相手が誰であっても絶対に譲らない。いっそう表情を引きしめて自らの覚悟を伝える。

「僕は七海と結婚するつもりでいます」

「本人は了承しているのか」

「そこまではまだ話していません」

さすがに結婚のことを考えさせるには年齢的にも心情的にも早いだろう。しかしいづれ了承してもらうために努力を続けていくつもりだ。そしてありとあらゆる障害は取り除く心構えでいる。

「認めない、なんて言いませんよね」

言外に含ませたのは遙の父親のことだ。天涯孤独となった十歳くらいの少女に一目惚れし、いづれ妻にするつもりで、しかしそのことを隠したまま引き取って手なずけた。剛三も共犯である。

それが許されるなら、七海との結婚も許されてしかるべきではないか。保護者の役割を任されているだけで父親ではないし、年齢はあと何年か待てばいいだけのこと。反対する理由はどこにもない。

言わんとすることを察したらしく、剛三は渋い顔になった。

「自分にも他人にも興味を持てなかったおまえが、誰かを好きになったことは素直に嬉しく思う。七海さえ了承すれば結婚に反対するつもりもない。保護者の立場を悪用したのでなければ、付き合うことには目をつむってもいい。ただな、十三歳の子に手を出すのは早すぎるだろう。何を焦っておるのだ」

「問題があるとは思いません」

遙は強気に言いきる。年齢的に早すぎるというのは正論だろうし、指摘されたとおりに焦る気持ちも確かにある。それでも彼の前で認めるわけにはいかない。付け入る隙を与えてしまう。

一歩も引かない姿勢に、剛三は困惑したように眉をひそめた。

「何を言っても無駄か……どうもおまえの執着には狂気じみたものを感じるな。大地と血の繋がりは無いのに、どうしてこう似なくていいところが似てしまったのか……」

「僕は父さんのようにはならない。絶対に」

父親と血の繋がりが無いことを知ったのは数年前である。赤の他人だったことにせいせいしているのに、似ているなどと言われては不本意きわまりない。あの男は唾棄すべきクズなのだ。

彼は異常な手段で妻を手に入れ、そのくせ生体実験として他の男性の子供を産ませ、あげく妻が亡くなると面影を求めて娘を犯した。遥にも執着はあるが、彼のように歪んだものではないと断言できる。

揺るぎない強い意志を伝えるように視線を送ると、剛三は奥底まで探るようにつめ返してきた。互いに無言のまま身じろぎもせず対峙していたが、やがて剛三が大きく息を吐いた。

「まあよかろう。反対したら家を出て行きかねんからな」

「……ありがとうございます」

祖父としてはたったひとりの後継者を失うわけにはいかない。戯れに手を出したのならさすがに許さなかったと思うが、遥が真剣で、七海との合意もあるということで譲歩したのだろう。

「ただし家の外では自重するのだぞ」

気が緩んだところでさらりと釘を刺された。

もとより言い訳のつかないところに連れ込むつもりはない。失礼しますと素知らぬ顔で一礼して執務室を辞そうとした、そのとき——ドンドンとひどく慌てたように扉が叩かれた。

「七海です！」

向こう側から切羽詰まった声が聞こえる。

遥は思わずハッと息を飲んでその扉を見つめた。一方、剛三は面白がるように口もとを上げ、入りなさいと張りのある声で応じる。すぐに扉が開き、七海が上気した必死な顔で飛び込んできた。

「ごめんなさい！」

遥の前に立ち、執務机の剛三に向かって勢いよく頭を下げる。

「その、いけないことだなんて知らなくて……もう二度としないって約束するし、出ていけって言うなら出ていくから、遥は勘当しないで！」

「ほう」

剛三は意味深長な声で相槌を打ち、ニヤリとした。

遥もすでにだいたいの状況は掴んでいる。このまま剛三を放っておくと何を言い出すかわからない。冷やかに牽制の一瞥を送ると、いまだ深々と頭を下げたままの七海に後ろから声を掛けた。

「勘当なんて話はないよ」

「えっ？」

「それ、誰に聞いたの？」

「櫻井さん」

予想どおりの答えである。勘当されてしまうかもしれないと純粹に心配していたのか、七海を焚きつけるために大仰に言ったのかはわからないが、どちらにしても彼に悪意はないはずだ。

「じいさんに呼び出されはしたけど、七海と付き合うことにしたってきちんと報告しただけだよ。もう認めてくれてるし、そもそも七海は何も悪いことをしてないんだから謝らなくていい」

「……本当？」

彼女は半信半疑でおずおずと剛三を窺う。

彼も心得ているようで、今度はからかうような素振りもなくしっかりと頷いてくれた。ほんの数分前まで反対していたことなどおくびにも出さずに。

「よかったあ」

七海はへにやりと膝から崩れてその場に座りこんだ。

遥のことにここまで必死になってくれた彼女を見ていると、つい頬が緩みそうになる。だが剛三の前でそんな顔をさらすわけにはいかない。取り澄ました表情で手を差し伸べて彼女を立たせる。

「それでは、失礼します」

「末永く仲良くな」

思わせぶりの笑みを浮かべる剛三を見て、七海はきょとんとした。

余計なことを——遥は苦々しく思いながらも無表情のまま一礼し、やわらかい手を引いて執務室をあとにする。ようやく二人だけになり、ほっと安堵の息をついて隣に目を向けると、彼女もこちらに目を向けてほっとしたようにはにかんだ。

第11話 本物と偽物

冬休み最後の日、遥は友人の富田を自宅に呼んだ。

子供のころにも何度か呼んだことがあるが、彼はいつもそわそわと落ち着きのない様子を見せていた。それは大人になったいまでもあまり変わらないようだ。背筋を伸ばして応接ソファにおさまりながらも目は泳いでいる。

「そんなに緊張しないでよ」

「そう言われてもな」

富田は困ったように苦笑した。

アンティークな調度品が並んだ重厚感あふれる応接室は、確かに普通の大学生には馴染みのない空間だろう。真面目な話がしたかったので応接室に通したのだが、遥の自室にしたほうがよかったかもしれない。

ほどなくして執事の櫻井がコーヒーを運んできた。ほかの使用人は近づけないよう申しつけてあるので、彼自ら運んできたのだ。手慣れた所作でコーヒーカップやミルクを並べ、一礼して退出する。

遥が勧めると、富田はブラックのまま口をつけてほっと息を吐いた。それで幾分か緊張もほぐれたようだ。ソファの背もたれに軽く身を預け、物言いたげなまなざしを遥に向けておもむろに切り出す。

「で、何か話があるんだろう？」

「まあね」

冬休み最後の日にわざわざ家に呼んだのは、外ではできない話があるからだ。富田もそのくらいは察しているのだろうが、内容までは見当がつかないようで、不安そうな顔をしていた。

遥はそんな彼を見ながらゆったりとコーヒーを飲み、本題に入る。

「彼女ができた」

「誰に？」

「僕に」

「……………」

富田はぼかんと口を半開きにして固まった。

好きなひとなんていない、恋愛なんかどうでもいい、女子が寄ってきてても煩わしいとしか思わない——そういう遥の様子を幼いころからずっと見てきたのだから、驚くのも無理はない。

「マジで？」

「マジで」

そう返してクスッと笑う。

富田は細く息を吐き、ようやくすこし冷静さを取り戻したようだが、それでもやはりすぐには信じがたいのだろう。神妙な顔で何か葛藤するような様子を見せていた。

「その彼女って俺の知ってる子なのか？」

「七海だよ。富田も一度会ってるよね」

「……ちょっと待て」

開いた左手を遥に向けて、思いきり難儀そうな顔をしながらゆっくりとうつむいた。そのまま気持ちを落ち着けるように小さく呼吸をしたあと、そろりと視線を上げて尋ねる。

「七海って、おまえが面倒見てるあのちっちゃい子？」

「そう、もう中学生だしだいぶ大きくなってるけど」

「いやいやいや」

中学生でも十分まずいと思っていることは明らかである。だが言葉にはせず、ただ困惑と動揺が入りまじったような微妙な顔をしていた。そのまましばらくじっと動きを止めていたが、ふいにハッとして言葉を継ぐ。

「いくらなんでもまだ手は出してないよな？」

「……合意の上でならそういう行為はしたけど」

「マジか……」

彼は常識人なのだ。にわかには受け入れてくれないだろうとは思っていた。だからといってむやみに否定しないだろうとも思っていた。現時点ではそれ以上のことを望むつもりはない。

空調のかすかな音だけが聞こえる。

遥は富田の様子を眺めながらコーヒーに手を伸ばした。彼もつられるようにコーヒーに手を伸ばす。互いに無言のままカップに口をつけていると、カチャリと扉の開く音が響いた。

「櫻井さんに言われて来たんだけど」

「うん、入って」

姿を現したのは七海である。

もともと富田が来たときに連れて行くつもりだったが、部屋にいなかった。しかしながら家のどこかにいることはわかっていたので、見つけたら連れてくるよう執事の櫻井に頼んでおいたのだ。

彼女は股下くらいまであるVネックの白いニットに、デニムのショートパンツ、短いルームソックスという格好をしていた。当然ながら脚は露わになっている。おまけにシャワーを浴びていたのか髪が生乾きだ。

その無防備な姿を自分以外の男にさらしているという現状に、ひどく落ち着かない気持ちになる。こんなことなら身なりを整えてくるよう言っておけばよかった。いまさらではどうしようもない。

「七海ちゃん……なのか……？」

駆けてきた七海をまじまじと見つめながら、富田は啞然とつぶやいた。

七海は観察するようまなざしを向けて軽く会釈する。

「えっと、遥のお友達の富田さんですよ」

「ああ……本当に大きくなったな……」

富田の視線は、無遠慮にも七海の胸元に注がれていた。

脛を蹴りつきたい衝動に駆られたものの、残念ながらテーブルが邪魔で物理的に不可能だった。代わりにじとりと冷ややかな視線を送る。それに気付くと富田はきまり悪そうに目を伏せた。

彼が驚いたのも無理からぬことだとは思ふ。前に会ったのは二年以上前で、そのときから身長は二十センチほど伸びているし、平らだった胸も成長している。ニットを着ていてもはっきりとわかるくらいには。

「七海、座って」

「うん」

七海は促されるまま遥の隣に腰を下ろした。

なぜこの場に呼ばれたのかももう察しがついているのだろう。斜め向かいの富田の手元をちらちらと窺い見ていた。その薬指には遥とのペアリングがはめられている。

「あ……そうか、もうコレいらななんだな」

「待って」

七海の視線でペアリングの存在を思い出した富田が、こころなしか寂しげにつぶやいて外そうとしたが、遥がそれを止めた。

「できれば継続してほしいんだけど」

「いや、でも七海ちゃんがいるのに」

「まだ公表するつもりはないからさ」

「ああ、そういうことか……」

遥の考えは富田にも伝わったようだ。

年齢的に批判的な目で見られることは十分自覚している。遥は何を言われても動じないが、攻撃の矛先が七海に向くことだけは阻止したい。そのためにはこの関係を秘密にしておくしかないのだ。

「俺のところにもいまだに来るもんな。あなたじゃ橘くんを幸せにできない、別れて、っていうようなのが……男の俺だからこのくらいですんでるけど、女で年下の七海ちゃんならもっとひどいことをされるかもしれない」

淡々と語られたその話を聞いて遥は驚いた。まさか富田がいまだにそんな目に遭っていたとは——最初のころはそういう話も何度か聞いたが、もうなくなったものとはばかり思っていた。

「前から言ってるけど、富田が嫌なら終わりにするよ。無理はしなくていい」

「いや、聞き流せばいいだけだからな。本当に付き合ってるわけじゃないし」

そう言いつつも、彼の表情はどこかぎこちなかった。

彼が本当に無理をしていないのかはわからない。いや、やはり多少は無理をしていると見るのが自然だろう。それでも継続してくれるというのであれば、遥としてはそれに甘えたい。

「わかった。またごはんでも食べに行こう」

「おう」

富田は白い歯を見せて応じてくれた。

彼には報酬を払っていない。一緒にお茶や食事をするときにおごるくらいである。何年も偽装恋人として縛っているのに、それに見合う報酬を払いたいと思っているが、いらないとと言われてしまうのだ。

金銭以外で何か礼ができればいいが思いつかない。彼が何を求めているのかがわからない、と

いうより見返りを求めている気がする。そういう彼だからこそ友人でいられるのかもしれない。

じっと見つめていると、彼はかすかに頬を赤くしてふいと目をそらしたが、直後にハッと何かを思い出したように真顔になった。ペアリングに触れながら窺うような視線を七海に向ける。

「七海ちゃんは、遥と俺が付き合うふりを続けてもいいのか？」

「うん、全然構わないよ」

七海は即答した。

二人の関係を秘密にするために富田と偽装恋人を続けたい——その意向はあらかじめ彼女に伝えてあった。もっともそのときもすぐに賛成してくれたので、説得の必要はなかったのだが。

「もともと僕も学校では秘密にしようと思ってたからさ。遥と付き合ってるなんて知られたら、いろいろ面倒なことになりそうもんだ。富田さんに押しつけるみたいで申し訳ないけど」

「いや、たいしたことじゃないから」

富田は左手を軽く上げて恐縮したように応じた。そしてふと思い出したように自身の腕時計を確認すると、おずおずと遥に切り出す。

「悪い、そろそろ帰らないと……」

家族で出かける用事があるので、あまり時間がとれないということは聞いていた。それでもいいからと出かける前に来てもらったのである。話すべきことは話したのでちょうどいいタイミングだろう。

「うん、忙しいのに無理言ってごめん」

「こっちこそ慌ただしくて悪いな」

「車で送らせようか？」

「いや、今日は自転車であって来てるんだ」

富田は残りのコーヒーを飲み干して立ち上がった。急いでいることはその様子から見てとれる。遥はできるかぎりの早足で玄関まで案内すると、扉を開けて見送る。

「じゃ、あした学校でね」

「ああ……よかったな」

富田はうっすらと笑みを浮かべてそう言うと、返事を待たずに身を翻し、軽く左手を上げて軽やかに走り去っていく。その薬指のペアリングが、降りそそぐ陽射しを受けてきらりと白く輝いた。

第12話 墓参り

「お墓参り？」

冬休みが終わってまもない金曜日の夜。

遥は自分の部屋に七海を呼び、紅茶を飲みながら学校の話を一通り聞いたあと、明日お父さんのお墓参りに行こうと切り出した。彼女はティーカップを持ったまま不思議そうな顔になる。

「別にいいけど……命日でもお彼岸でもお盆でもないのに、なんで？」

「お父さんに報告することがあるからね。七海もあるんじゃないの？」

「ああ……うん……」

遥の言わんとすることを理解したのだろう。七海は曖昧に頷いてティーカップをそっと戻した。あまり気が進まないように見えるのは、まだ武蔵のことをあきらめていないからかもしれない。

「無理強いはしないけど」

「ううん、行くよ」

彼女は気を取り直したように笑顔になった。

いまのように武蔵に思いを馳せているのが見え隠れするとき、胸が痛まないといえは嘘になる。それでもいちいち落ち込んでなどいられない。武蔵のことが過去になるよう努力するしかないのだから。

翌日、七海の部屋をノックすると、待ち構えていたかのように扉が開いた。

彼女はざっくりとしたセーターに、デニムのショートパンツ、黒のオーバーニーソックスという、普段と変わらないカジュアルな格好をしている。小脇に抱えているのはダッフルコートだろう。

執事の櫻井に見送られながら二人で玄関を出た。ときどき強く吹きつける風は冷たいものの、水色の空は穏やかに晴れわたっており、墓参りには悪くない天候だ。のんびりとした足取りで車庫に向かう。

「あれ、こんな車あったっけ？」

シャッターが開くと、七海はそこにあった赤いスポーツセダンを目にして声を上げた。ぐるりとまわってあちらこちらから眺めたり、窓越しに運転席や助手席を覗き込んだり、興味津々の様子である。

「気に入った？」

「うん、何かかっこいいね」

橘が所有している乗用車はどれも乗り心地重視である。すくなくとも若者受けするデザインとはいえない。色もほとんどが黒か白という地味なものだ。それゆえ赤というだけでもかなり新鮮に映るのだろう。

「これどうしたの？」

「僕が買ったんだ」

「へえ」

きのう納車されたばかりの新車である。七海と二人で出かけたがために買ったようなものだ。橘所有の車はいつでも運転手付きで出してもらえるが、遥が運転することは許されていない。

「乗って」

そう言いながら助手席側の扉を開いて促すと、七海はきょとんとした。いつもは二人で後部座席に座っているからだろう。白い手袋をした運転手がないということには、おそらくまだ気付いていない。

「助手席に座るの？」

「そう、僕は運転席」

それでようやく理解したようだが、にわかには信じられなかったのか、大きな目をぱちくりとさせて疑問を口にする。

「遥、運転できたの？」

「免許は持ってるよ」

「えー……なんか怖い」

七海は疑わしげな顔になる。

遥に運転しているイメージがないからだろう。実際、免許を取ってから一度も運転していないのだ。しかし遥自身はそれほど不安を感じていない。

「教習所では上手いって言われたけどね」

「ほんとかなあ」

「ちゃんと安全運転するからさ」

開いた扉に手をかけたまま微笑を浮かべてそう言うと、七海は胡乱なまなざしを送りながらも助手席に乗り込んだ。遥はその扉を閉め、反対側から運転席に乗り込んでエンジンをかけた。

途中で花を買い、七海の亡くなった父親が埋葬されている墓地に向かう。遥もこれまで何度か来ているので場所はわかっている。墓地からほど近い駐車場に車を入れるとエンジンを止めた。

「運転どうだった？」

「まあまあかな」

「それならよかった」

久しぶりの運転だが特に危ういところはなかったはずだ。七海もすっかり安心したようで無邪気な顔を見せている。この様子なら、これからも遥の運転する車に乗ってくれるだろう。

花と線香は七海に持たせ、遥は途中で手桶と掃除用具を借りて水を汲んだ。たくさんの墓石が整然と並んだそのあいだの通路を、目的地に向かって歩いていく。

「あれ？」

七海がふいに声を上げた。

視線のさきにある父親の墓には、彩り鮮やかな花が供えられ、線香の煙が立ち上っていた。誰かが墓参りに来たのだろう。彼には七海以外に家族も親戚もいないのだから、思い当たる人物はひとりしかいない。

「拓海かな」

「だろうね」

真壁拓海——彼女の父親である坂崎俊輔の親友であり、同僚であり、そして刺殺した男だ。この墓を建てたのも彼である。かつては命日に七海と墓参りをしていたそうだが、いまま贖罪の気持ちは忘れていないらしい。

しかしながらこれまで一度も鉢合わせることはなかったし、痕跡もなかった。彼自身が悟られたくないのか、七海に配慮してかはわからないが、命日、盆、彼岸の時期は避けているのだろう。

それなのに偶然にも同じ日に来てしまうとは。七海には彼の痕跡すら見せたくなかったが、鉢合わせるよりはよかった。七海が望まないかぎり二度と会わせないと決めている。そのためにはこちらも気をつけなければならない。

「お花、どうでしょうか？」

「七海が捨てたいなら捨てるけど」

「まだ萎れてないしもったいないよ」

「じゃ、窮屈だけど一緒に供えよう」

遥としては拓海の供えたものなど捨ててしまいたかったが、七海がそう言うのであれば従うしかない。決める権利があるのは彼女だけだ。この墓石に名前を刻まれた人物の遺族であり、本人でもあるのだから。

七海 享年六才——遥はちらりと墓石の横側に目を向けて眉を寄せる。彼女の名前までもが刻まれているのは、父親と一緒に死んだことにされていたからだ。もちろん拓海の仕業である。

遥は消したかったが、七海がそのままにしておきたいと譲らなかった。これも生きた証だと思っているのだろう。さすがに本人の意向を無視するわけにはいかず、仕方なく残してあるのだ。

「お花を供えるまえに掃除だね」

「その必要はないよ」

墓は隅々まですっかりきれいに掃除されていた。墓石の上からひしゃくで水をかけたあと、持ってきた花を供える。すでに花が供えてある花立に無理に押し込めたため、不格好になったが致し方ない。

線香はそれぞれ一本ずつマッチで火をつけて立てる。だいぶ短くなった線香の煙と、新たな二本の煙がゆらりと絡み合うように上がるのを見て、遥と七海は静かに両手を合わせて目を閉じた。

遥は死後の世界や霊魂など信じていない。

それでもここに来ることはけじめとして必要だと考えた。七海を必ず幸せにすると、大切にすると、父親の墓前で誓うこと自体に意味がある。その決意を強固なものにするためにも。

隣を見ると、彼女はまだ目をつむったまま両手を合わせていた。やがて目を開き、凜としたまなざしで正面の墓を見つめつつ、合わせていた手をゆっくりと下ろしていく。肩まで伸びた黒髪がさらりと冷たい風に揺れた。

「もういい？」

「うん」

七海はにっこりとして答えた。

墓前で何を思ったのかは互いに尋ねようとしな。遥が秘密にしておきたいと考えているように、七海も踏み込まれたくないと感じているのだろう。それは決して悪いことではないはずだ。

二人とも無言のまま、乾燥した風に吹かれながら人影のない墓地を歩いて戻る。いつのまにか薄曇りになり、そのせいかいっそう風が冷たくなったように感じる。七海の吐く息がほんのりと白い。

「七海、寒くない？」

「ちょっとね」

「どこか寄ってく？」

「今日は帰りたいな」

「わかった」

ほんのりと感傷的な様子を見せる七海に、そっと微笑みかける。

彼女はひとりになりたい気分なのかもしれないが、遥にそのつもりはない。家に帰ったらあたたかい紅茶を飲んで抱きしめよう。父親のことも、拓海のことも、武蔵のことも、何も考えられなくなるまで――。

七海と付き合い始めてから二年が過ぎた。

別れの危機はこれまで一度もない。七海が口をとがらせることはあるが、せいぜいその程度で、喧嘩といえるまでには発展しないのだ。彼女のさっぱりした性格のおかげといえるだろう。

遥と七海の関係を知っているのは、祖父とその秘書、友人の富田、妹夫婦、それに使用人くらいである。メルローズにはまだ言っていない。嫉妬をされて面倒なことになりかねないし、口止めも難しいと判断した。

関係は秘密だが、憚ることなく二人であちらこちらと出かけている。表向きは家族なのだ。普通にしていれば一緒にいても何もおかしくない。手をつなぐなど、疑われそうな行動だけはしないよう心がけている。

大学の同級生や他大学の女子などが街で目撃して、富田や妹に探りを入れてきたことは何度かあったが、二人とも心得ているので余計なことは言わない。あの子は橘の里子とだけ答えている。

ただ、付き合いしているのかと直球で尋ねてくる相手には、明確に否定してくれた。あの品行方正な遥が中学生と付き合うわけがないと。血の繋がりがなくて疑惑の目を向けていた人も、それで納得するようだ。

遥としては、その押しつけがましい言いように思うところはあるが、実際にそれで助けられているのだから文句は言えない。だが、その方法が使えるのもあとすこしのあいだである――。

「高校、どこにするかもう決めた？」

冬休み最後の日、七海を自室に呼んでそう切り出した。

夏頃から何度か志望校についての話し合いをして、彼女がかなり悩んでいることも知っていたが、いつまでもこのままというわけにはいかない。そろそろ決めなければならない時期なのだ。

「今週中には聞かせてほしいんだけど」

「……有栖川学園にしようと思う」

彼女は飲みかけのティーカップを戻して答えた。

私立東陵学園の中等部ではほとんどの生徒が内部進学するが、遥は有栖川学園を薦めていた。遥自身の出身校だ。初等部、中等部、高等部と十二年も在籍していたので、校風もよく知っている。

東陵学園は名家の子女が通う由緒正しい学校だが、内部進学する生徒が多いためか受験勉強には力を入れていない。一方、有栖川学園は国内屈指の進学校なので取り組みも熱心なのだ。

七海は興味を示しつつも決めきれずにいた。東陵学園に思い入れはなさそうだが、それなりに馴染んだ環境を捨てるには勇気がいるのだろう。新しい学校でまたひとりぼっちになってしまうのだから。

ただ、七海には有栖川学園のほうが合うのではないかと思う。華やかな御令嬢や御令息がそこ

ら中にいる東陵学園と違い、地味で真面目な人が多く、遥の知るかぎり陰湿ないじめが起こったことはない。

そのあたりのことも遥の見解として伝えてある。だが言いなりならず、自分自身でしっかりと熟慮して決めてほしいのだ。どちらを選んでも、望みどおりの道を進めるよう支援するつもりである。

「僕が薦めたからって無理はしなくていいよ？」

「僕なりにどっちがいいか考えたんだ。有栖川のほうが進学に有利みたいだし、校風も良さそうだし、うちから徒歩で通えるのもいいなって。知らない人ばかりのところへ行くのはちょっと怖いけど、いつまでもそんなこと言ってもらえないし」

七海は慎重ながらも明確にそう答えると、吐息を落とす。

「受かるかどうかが問題なんだけど」

「七海の成績なら余裕で受かるよ」

「そう言われると逆に不安になるよ」

気休めではなく、事実として十分すぎるくらいの成績である。ただ彼女の不安もわからなくはない。試験当日に何か大きな失敗をしてしまえば、内申点が良くても不合格になることはありうる。

「ま、落ちたら東陵の高等部に行けばいいんだし、神経質にならなくていいよ」

「うん……そうだよね」

七海は気持ちをごまかすようにはにかんだ。

いくら前向きでもそう簡単に不安は拭えないだろう。どうにかしてやりたいが、言葉を尽くしても逆に追いつめてしまいかねない。遥はぬるくなった紅茶のティーカップに手を伸ばし、静かに思案をめぐらせた。

その日から、ふたりで出かけることも夜を過ごすこともなくなった。そういう気分になれないと七海に言われたからだ。そこまで思いつめて大丈夫なのかと心配にはなったが、無理強いもできない。

それでも家族としては普段と変わりなく過ごしている。毎朝のトレーニングは継続していたし、時間さえ合えば食事と一緒にしていたし、たびたび学校や勉強についての話を聞いていた。

保護者としても出来るかぎりのことはしているつもりだ。夜ふかしをしないよう言いつけたり、ときどきお茶に誘って休憩させたりと、根を詰めすぎることはないよう見守っていた。

そして受験当日。

雨や雪が降ることもなく空は穏やかに晴れわたっていた。七海は若干緊張ぎみながらも体調にはまったく問題ないようで、元気に受験会場へ出かけていった。下見にも行ったので迷いはしないだろう。

彼女を見送ったあと、遥は大学の図書館で卒業論文発表の準備をした。家でもできなくはないが、彼女の受験が気になって落ち着かないので、集中するためにあえて大学まで出向いたのだ

。

「おかえり！」

日が沈みかけたころに帰宅すると、廊下を歩く足音を聞きつけたのか、七海が元気よく部屋から飛び出してきた。遥は緊張を感じつつ、それでも逸る心をおさえ、笑みを浮かべる。

「ただいま。入学試験はどうだった？」

「うん、問題は解けたと思うけど……」

「何かあった？」

「ううん、何となく心配なだけ」

きまり悪そうに苦笑している七海を見て、遥は表情を緩めた。久しぶりにその手を取り、無言のまま彼女の部屋に連れ込んで抱きしめる。扉は閉めたので誰にも見られることはない。にもかかわらず彼女は身を預けようとしなない。

「どうした？」

「これお疲れさまってこと？」

「僕がこうしたかっただけ」

そう答えると、こわばったその体から力が抜けるのがわかった。表情を窺おうとするが胸元に顔をうずめられてしまう。彼女はそのまま遠慮がちに遥の背中に手をまわし、ぼそりと言う。

「あのさ……夜、そっちにいていい？」

「もちろん」

冷静に答えたものの、内心驚いた。

これまで遥から誘うばかりで彼女からは初めてなのだ。しばらく触れていなかったのが寂しかったかもしれない。でも、もしかしたら——武蔵への想いがもう消えたのではないか。そう期待して、苦しくなるほど心臓が早鐘を打つのが感じた。

入学試験から数日が過ぎ、合格発表の日がやってきた。

七海は朝からそわそわしていた。合格発表までにはずいぶん時間があるが、待ちきれないのかすっかり準備を整えている。

「じっとしてられないからもう行くよ」

「だいぶ待つことになるけどいいの？」

「うん、うちでじっとしてるよりはマシ」

そう言うと、大学へ向かう遥とともに家を出た。

途中までは同じ道なので並んで歩く。まもなく三月になろうというのに随分と寒い。雪こそ降っていないものの、今朝は霜が降りるほど冷え込んでいた。いまでも吐く息はまっしろである。

「ごめんね、一緒に行けなくて」

「遥がいたらよけい緊張するよ」

七海は明るく冗談めかして答える。

遥としては、行けるものなら一緒に行きたかった。受験番号を探して一緒に喜びたかった。だが卒業論文発表会と重なってしまったのだ。さすがにこればかりは休むわけにもいかない。

「あとで電話する」

「うん、じゃあね」

二人は十字路で手を振って別れる。遠ざかる七海の後ろ姿を眺めてから、遥は駅のほうへ足を進めた。

卒業論文発表会は、朝から夕方まで二日間にわたる。今日は二日目である。

ひとりひとりの持ち時間はそれほど長くないものの、人数が多いのだ。もっとも他学生の発表を聞かなければならないという決まりはなく、自分の発表さえ終わればさっさと帰る人も多い。

ただ、遥を含めた数人はすべての発表を聞くことになっていた。所属する研究室の方針である。恨めしくは思うが仕方がない。昼休みになると、すぐさま講義室を飛び出して七海に電話をかけた。

『はい、遥？』

この時間ならもう家に帰っているだろうと思ったが、電話に出た七海の背後はすこし騒がしかった。学校というより街中のような。引っかけりはしたものの、それよりもまず聞かなければならないことある。

「結果はどうだった？」

『うん、合格してた』

彼女の声には安堵がにじんでいた。

間違いなく合格するだろうとは思っていたが、事実として確定するとやはり遥も安堵する。よかったと吐息まじりにつぶやいたあと、おめでとう、とあらためて心からの言葉を伝える。

そのとき——坂崎、と電話の向こうから七海を呼ぶ声が聞こえてきた。間違いなく男性のものだ。七海はちょっと待ってと応じてから電話口に戻る。

『合格発表のところでクラスメイトと会って、いま一緒にいるんだ。それでお昼を食べようって話になったんだけど……いい？』

「構わないよ。家にも連絡しておいて」

『もう櫻井さんに電話で言ったよ』

「そう。あまり遅くならないようにね」

『わかった』

電話を切ると、遥はその携帯電話を握りしめた。

七海の言うように相手はただのクラスメイトだろう。友達付き合いも許さないほど狭量な男にはなりたくない。他の子たちと同じように、彼女にも学生時代を楽しむ権利はあるのだから。

ただ、彼女と付き合っているのは自分である。おおっぴらにすることはまだできないものの、それでもこの場所だけは絶対に誰にも譲らない。同級生にも、友人にも、そして武蔵にも——。

「遥、何かあったのか？」

「何でもないよ」

よほど難しい顔をしていたのか、あとから来た富田に心配そうに声をかけられたが、軽く受け流した。触れてほしくないという気持ちを察してくれたのだろう。気にするような素振りを見せ

つつも追及はしてこない。

「じゃあメシ行こうぜ」

「うん」

遥は携帯電話を内ポケットにしまいながらにっこりと笑顔で答え、富田と並んで食堂へ向かう。二人の左手には相変わらずプラチナのペアリングが輝いていた。

第14話 卒業

「七海のセーラー服も今日で見納めだね」

遥はベッドに腰掛け、隣の七海を無遠慮に眺めながら言う。

彼女は中学の制服であるセーラー服を身に着けて、ベッドで紺の靴下をはこうとしているところだったが、戸惑ったような顔をして口をとがらせた。

「そういう感傷的なこと言うのやめろよな」

「今日くらいはいいだろう？」

遥が笑顔を見せると、彼女はムツとしてはきかけていた靴下を引き上げる。感情を露わにしたような乱雑な手つきで。しかしその横顔はほんのりと薄紅色に染まっていた。

今日、七海は中学校を卒業する。

入学からあっというまにこの日を迎えた気がする。しかし、保護者として果たしてきた役割、様々な面における七海の成長など、あらためて思い返すと三年という月日の重みを実感した。

そして、その三年をともにしたセーラー服も卒業となる。似合っていただけにすこし寂しい。彼女が元気いっぱい跳ねて、セーラーカラーが大きくひらめくさまがとても好きだった。

ただブレザーも悪くない。先日、高校の制服を注文するときに試着していたが、女子にしては高めの身長、すらりと伸びた脚、まっすぐな背筋によく似合い、セーラー服のときより幾分か大人びて見えた。

「じゃあ、僕はそろそろ行くね」

「玄関まで見送るよ」

学生靴を持って立ち上がった七海とともに、玄関に向かう。

遥も卒業式に出席するが、保護者は開式に間に合えばいいようなので、もうすこしあとで出かける予定にしている。いまはシャツだけでスーツの上着は着ていないし、ネクタイも締めていない。

「じゃ、またあとで……あんま目立つなよ？」

「目立とうとしたことはないけどね」

扉を開けようとした七海に念押しされ、遥は苦笑した。

衣服などは時と場所に合ったものを選んでるし、遥自身も目立つような行動はしていない。それでも中学生の保護者にしては若いからか、橘財閥の後継者だからか、どうしても注目されてしまうのだ。

ヤキモチなら嬉しいが、単純に自分に面倒が及ぶのを嫌がっているだけである。遥について根掘り葉掘り尋ねられたり、非常識なことを頼まれたり、対応に窮することも少なくないらしい。

手に余るようならこちらで対処するとは言っているが、頼ってきたことはない。気を使っているというより、自分に降りかかった問題は自分で対処するのだと、あたりまえのように考えているのだろう。

七海が軽く手を上げながら玄関を出た。

白線の入ったセーラーカラーが風をはらんでひらりと舞う。それも今日で最後だ。しっかりと目に焼き付けておかなければ——遠ざかる後ろ姿を、遥は瞬きも忘れるくらいひたむきに見つめ続けた。

卒業式はきわめて伝統的なものだった。

卒業証書授与は生徒のひとりひとりが名前を呼ばれて起立し、クラスの代表が受け取るという形だ。人数の関係だろう。七海は代表を辞退しているので受け取りはしなかったものの、それでも十分に感慨深い。

卒業生は退場すると教室に戻ることにしている。最後のホームルームがあり、そこで担任からひとりひとり卒業証書を受け取るのだ。四十人ほどいるのでそこそこ時間がかかるに違いない。

そのあいだに遥は理事長室に行くことにした。入学時に世話になったので挨拶しなければならないし、先方からも誘われている。保護者でなく、橘財閥の後継者としての遥と話をしたいのだろう。

案の定、今後も橘財閥と関わりを持ちたがっていることが、理事長の言葉の端々から感じられた。当たり障りのない受け答えでお茶を濁していると、ふいに内ポケットの携帯電話が振動した。

見るまでもなく七海からだと思う。ホームルームが終わったら電話をするように言ってあった。卒業祝いとして二人で食事に行く予定になっているのだ。理事長に断りを入れてから電話に出る。

『ごめん、ホームルームは終わったんだけど、ちょっといろいろあってさ。もうすこしだけ待っててくれないかな。十分くらい……そんなには遅くならないと思う。また電話するよ』

「わかった」

遥はこの電話を利用することにした。電話の向こうの声は理事長に聞こえていないはずなので、七海を待たせているからともっともらしい嘘の理由を告げて、角が立たないように理事長室を辞した。

桜——？

どこで待っていようかと考えながら階段を下りていると、ふと風に揺れる満開の桜がガラス窓の向こうに見えた。時季にはいささか早いので、ソメイヨシノでなく別の品種ではないかと思う。

踊り場に下りて、窓から下方の桜を眺めた。

それは校舎脇に一本だけひっそりと立っていた。奥まった理事長室の近くという立地ゆえだろうか。あたりに人影はない。風が吹くたびに薄紅色の花々がきらめき、花びらがひらひらと舞う。

「なあ、どこまで行くんだよ」

ふいに外から聞こえてきたその声にドキリとする。窓から身を隠してこっそりと声のほうを窺

うと、やはりそこには七海がいた。学生服を着た男子と並んでこちらへと歩いてくる。

「あんまり時間ないんだけど……あれ、桜？」

「そう、坂崎にも見せたくてな」

一緒にいるがっちりとした体格の男子には見覚えがある。七海がいじめで体操服を汚されたときに、予備の体操服を貸してくれた野球部のクラスメイトだ。七海は恩を感じて何度か大会の応援に出かけていた。

先日、合格発表のときに一緒にいたのも彼だろう。調べたところ、この学園から有栖川学園を受験したのは、七海と彼の二人しかいなかったのだ。彼がどういう基準で進学先を選んだのかはわからないが、おそらく――。

「もう咲いてるなんて早いよな」

「早咲きの桜らしい」

「へえ、そんなのがあるんだ」

七海は顔を上げたまま、大きな目をくりくりとさせて興味深げに眺めていた。楽しんでいるというより観察しているような感じだ。しかし、ふと思い出したように隣に振り向いて尋ねる。

「そういえば話があるんじゃないか？」

「あ……ああ……」

彼は口ごもり、曖昧に目をそらしながらうつむき加減になる。だが、しばらくすると意を決したように七海と向き合った。緊張していることがありありとわかる硬い表情で、ごくりと唾を飲む。

「いままで勇気がなくて言えなかったけど、今日は言おうと決めてきた。俺、坂崎のことが好きなんだ。一年のときからずっと好きだった。だから俺と付き合ってほしい」

「……………」

いまのいままで気付いていなかったのだろうか。あるいは告白されると思っていなかったのだろうか。七海は思考が停止したように啞然としていたが、それでもどうにか言葉を絞り出す。

「ごめん、二階堂とは付き合えない」

「まだ好きじゃなくてもいいんだ。だから」

「悪いけど、僕にも好きな人がいるからさ」

予想外だったのか、彼はショックを受けたように目を見開いて硬直した。そして体の横でひそかにグッとこぶしを握りしめていく。

「もしかして噂の保護者か？」

「そんなわけないじゃん」

「じゃあこの学校の生徒か？」

「二階堂の知らない人だよ」

執拗な追及に、七海はふっと寂しげに微笑んでそう答えた。

遥との関係は秘密なのだから言うわけにはいかない。それゆえ単にごまかしているだけかもしれないが、もし特定の誰かを思い浮かべているのだとすれば、心当たりはひとりしかいない――

「そいつと付き合ってるのか？」

「それは、付き合っていない、けど……」

「だったら俺にも可能性はあるよな？」

「ごめん、無責任なことは言えない」

「……………」

ひどく思いつめた様子を見せていた彼が、そこで息を吐いた。

「困らせることばかり言って悪かった。忘れてくれ、っていうのも勝手だし無理だよな。でも、このことで気まずくなりたくないんだ。坂崎が嫌じゃなければ、高校へ行ってもいままでどおり友達でいたい」

「うん、それはもちろん」

七海はほっとしたように答える。

二人はまだ桜の花びらが舞う中で話を続けていたが、遥は目をそむけ、音を立てないようにそっと窓から離れて階段を下りた。聞いてしまったことをすこし後悔しながら――。

玄関の外は卒業生であふれていた。

友達とはしゃいだり、写真を撮ったり、みな思い思いに楽しんでいるようだ。雰囲気は明るいのは大半が内部進学だからだろう。しかし、涙ながらに別れを惜しむ子たちも少数ながらいる。

遥はその様子を隅のほうで遠目に眺めていたが、目ざとい女子生徒たちに見つかり囲まれた。遠慮のない質問や誘いを適当にあしらっていると、ようやく七海から電話がかかってきた。

『ごめん、だいぶ遅くなって』

「もういいの？」

『うん、どこに行けばいい？』

「校門で待ち合わせよう」

『わかった』

通話を切り、もう帰るからと彼女たちに告げて校門へ向かう。

そう、七海と付き合っているのは僕なんだ――現実として彼女はここにて遥の気持ちに応えてくれている。たとえ心のどこかに武蔵への想いを残していたとしても、もう会うことさえできない。だから。

校門脇で足を止め、穏やかに晴れた空に目を向ける。

まもなく校舎から歩いてくる七海の姿を視界に捉えた。彼女もこちらに気づき、はじけるようにパッと顔をかがやかせて駆けてくる。そのとき、白線の入ったセーラーカラーも軽やかにひらめいた。

第15話 二度とないはずの

プルルル、プルルル——。

眠っていた遥の意識にうっすらと内線の着信音が届く。

煩わしさに眉をひそめながら寝返りを打ち、どうにか薄目を開いて気怠い体を起こすと、鳴り続けている電話の受話器を取った。

「はい」

『なんだ、もう寝ておったのか？』

「寝ていてもおかしくない時間です」

祖父の剛三に開口一番あきれたように言われ、ムツとして言い返す。まもなく日付が変わろうかという時間だ。寝ていたところで非難されるいわれはない。しかし、その反論は見事なまでに無視された。

『話がある。執務室に来てくれ』

「いまからですか？」

『都合が悪ければ明日でもいい』

「行きます」

緊急というわけではなさそうだが、こんな時間に呼び出すくらいだから、それなりに重要な話なのだろう。仕事関係だと思うが心当たりはない。遥は溜息をつきながら受話器を置いた。

そのとき、隣で寝ていた七海がもぞりと身じろぎした。

「ん……でんわ……？」

「そう、じいさんに呼び出されたんだ。ちょっと行ってくるよ」

遥はそう言い、夢うつつでぼんやりとしている七海の頭に手を置いた。このまま見つめていたいがそういうわけにもいかない。すぐにベッドから下りて着替えると、再び寝息を立て始めた彼女を起こさないよう静かに扉を開けた。

七海が高校生になっておよそ二か月。

高校のブレザーもだいぶ馴染んできた。当初はネクタイが初めてだったので上手く締められず、何度も遥に助けを求めてきたが、もうひとりできっちりと締められるようになっている。

同じ中学校出身の二階堂とはクラスが分かれていた。最初こそひとりぼっちだと不安そうにしていたものの、中学のときのようにいじめられることもなく、いまではそこそこクラスに溶け込んでいるようだ。

一方、遥は橘の関連会社に一社員として入社していた。平行して剛三から後継者としての仕事を学んでいる。忙しい日々ではあるが、七海と過ごす時間だけは確保するよう努めていた。

今日はめずらしく定時で解放されて七海とゆっくり過ごした。剛三が夕方からどこかに出かけていて連絡もつかなかったからだ。内密に仕事の話をしているのではないかと思ったが——。

「実はな、武蔵が帰ってくることになったのだ」

煌々とした蛍光灯の下、遙は執務機の正面に直立したまま息を飲んだ。

三年半前、武蔵は七海をひとり残してはるか遠い故郷に帰ってしまった。彼自身はいつか戻りたいと願っていたようだが、現実的に二度とこの地を踏むことはできないだろうという話だった。なのに――。

「どういう事情ですか」

「かの国と我が国は秘密裏に交渉を続けているのだが、武蔵がその仲立ちをしている。その関係でこちらに来ることになったらしい」

かの国、というのは武蔵の故郷だ。日本領海にありながら、最近まで認知すらされていなかった共同体である。いまも国の最重要機密として秘匿されている。遙たちが知っているのは発見当初から関わりがあるからだ。

武蔵はもともと故郷と日本の橋渡しをするために帰った。双方の国のことをわかっているのも、双方の国の言葉を話せるのも彼しかいない。その仕事の成果でこちらに来られるまでになったのだろう。

彼のことが嫌いなわけではない。帰ってくると聞いて素直に喜べなかったのは、七海がかつて彼に恋愛感情を抱いていたからだ。おそらく、その気持ちはいまもまだ心のどこかで燻っている。

「どうした、難しい顔をして」

「何でもありません」

遙は表情を消して答えた。

この程度でごまかせる相手でないことは百も承知だ。しかし、剛三は物言いたげな視線を送りながらも何も言わなかった。執務机の上で手を組み合わせ、事務的な口調で本題を進める。

「交渉のあいだはこの屋敷に滞在させることに決まった。武蔵には警備をつける必要があるのだが、ホテルでは何かと不都合があるらしい。それで私のほうに打診をしてきたというわけだ」

「随分きなくさい話ですね」

交渉しているのは政府だろうが、警察庁や自衛隊もすくなく絡んでいるはずで、警備に適した施設くらい用意できるはずである。何もわざわざ民間人に協力を要請する必要はない。だとすれば――。

剛三は口もとを上げ、遙の思考を読んだかのように言葉を継ぐ。

「客人なので監禁するわけにはいかないが自由にもさせたくない。それを実現するためには我々のところが好都合ということだ。武蔵をもてなすという意味ではこれ以上のところはあるまい。そして身内同然である我々の存在は精神的な枷となりうる。もちろん表立って口にはしないだろうが」

「つまるところ人質ですよ」

「心配はいらん。牽制のために我々の存在を利用するくらいで、実際に身柄を拘束したり危害を加えたりするわけではない。よほどの事態になればわからんが、武蔵が我々を裏切るようなことをするとは思えんからな。まあ、あやつらに貸しを作っておくのも悪くなかろう」

剛三はニヤリと人の悪い笑みを浮かべた。

人質であることもすべて承知しているのであれば、もう止めようがない。確かにこれで警察庁に恩を売れるなら悪くないといえる。武蔵が裏切りさえしなければ何も問題はないのだ。ごく個人的な憂慮を除いては――。

「気が乗らないようだな」

顔には出していないつもりだが、会話が途切れたせいで悟られてしまったのだろう。頭を悩ませていることも、あまり賛成していないことも。それでも動じることなくごまかしの答えを紡ぐ。

「人質にされるなどいい気はしません」

「武蔵とは親しくしていたと思ったが」

「再会については楽しみにしています」

「七海も喜ぶだろうな」

一瞬、ドキリと心臓が跳ねた。

単に思ったことを言っているだけなのか、わかったうえで鎌をかけているのか、彼の表情からは読み取ることができない。そうですね、とこちらも素知らぬ顔をして軽く受け流す。

「いつこの屋敷に来るのですか？」

「七月一日の予定だと聞いている」

「七月三日の午後にしてください」

「理由は何だ」

鋭いまなざしで射抜かれる。唐突に日付まで指定したことを訝しんでいるのだろう。しかしながら剛三が警戒するほどたいそうな理由ではない。遥は目をそらすことなく淡々と答える。

「七海の定期試験です。試験期間中に動揺させたくありません」

「そうだな……わかった、交渉してみよう」

剛三は両手を組み合わせたまま、鷹揚に頷いた。

いまは六月上旬なのでまだ交渉の時間はある。二日遅らせるくらい何とかなるだろう、というのが彼の見解だ。受け入れ態勢など具体的な話は後日ということで、遥は一礼して執務室をあとにした。

暖色の常夜灯のみがついた自室に戻ると、蛍光灯をつけずにクローゼットで着替えて、そっとベッドに入った。上半身を起こしたまま隣に目を向ける。七海は起きる気配もなく静かに寝息を立てていた。

彼女が遥を好きになってくれたことは間違いない。一方で武蔵に想いを残していることも確かだろう。それでも構わない。心の片隅で想うくらい見て見ぬふりをしよう、そう決めたのだ。

ただ、それは二度と会うことがないという前提での話だ。武蔵と再会してひとつ屋根の下で暮らすとなれば、そんなに余裕でいられるとは思えない。七海の気持ちもどうなるかわからない。

僕は、どうすればいい――。

多分、いまの自分はとても情けない顔をしている。そう自覚すると、気持ちよさそうに眠る彼女のほうに向いていられなくなり、身を翻しながら布団にもぐりこむ。しかし、胸がざわついて

とても眠れる気がしなかった。

「どうぞ、こちらです」

一通りのボディチェックを受けたあと、遥はスーツの乱れを直し、公安の男性に案内されてスイートルームに入った。

落ち着いた色調でまとめられたゆとりのある空間が、目の前に広がる。華美な装飾はなく思ったよりもずっとシンプルだが、それでも床や調度品など至るところに上質さは感じられた。

正面のリビングルームに足を進めると、金髪碧眼の男がソファで足を組んでいるのが見えた。彼は新聞を広げていたが、遥が声を掛けるより先にこちらに気付き、きれいな顔をパツとかがやかせて立ち上がる。

「久しぶりだな」

「元気そうだね」

「ああ、おまえも」

その男——武蔵はこの三年半ぶりの再会を心から喜んでいるようだ。無邪気なまでに気持ちを隠そうとしていない。座れよ、とブランクを感じさせない気安い口調で、向かいのソファを示す。

しかし、遥はそれほど無邪気ではいられなかった。懐かしさよりも、緊張、嫌悪、不安などの暗い感情が胸に渦巻いている。それでも平然とした表情と態度を崩さず、促されるまま腰を下ろした。

今日は七月二日である。

交渉の結果、武蔵を橘の屋敷に迎え入れる日取りは、要望どおり七月三日の午後に決まった。ただ、七月一日に来日する予定は動かせなかったため、三日間だけホテルに滞在してもらっているのだ。

遥は事前に会っておこうと考えて面会を申し入れた。特に話したいことがあるわけではないが、心の準備をしておきたかったのだ。七海の前でみっともない姿をさらすことのないように——

「ちょっと大人びてきたな」

武蔵はやわらかなソファにゆったりと身を預けると、遥を観察して目を細めた。まるで久々に会った息子の成長を喜ぶ父親のように。遥は内心でムツとしながらも眉ひとつ動かさず、ぶっきらぼうに言い返す。

「もう大人だけど」

「いくつになった？」

「二十二」

そう答えると、まだまだ若いなと苦笑された。

武蔵はもう三十代後半になっているはずだ。七海が幻滅するくらいくだびれていればよかった

のに、いまも初めて会ったときと変わらない。まだ二十代といっても十分に通用するだろう。

変わったのは髪と瞳くらいだろうか。当時は日本で逃亡生活を送っていたため、目立たないように髪も瞳も黒くしていたのだ。いまは華やかにきらめく金髪にサファイヤのような碧眼という、彼本来の姿をしている。

「みんなは元気にしてるか」

彼は背もたれから体を起こして声はずませる。

だが、遥は素直に答える気にはなれなかった。

「みんなって誰のこと？」

「やけに突っかかるな」

「曖昧だから訊いただけ」

「いまごろ反抗期か？」

「かもね」

投げやりに答えたあと、その大人げなさを自覚して溜息をついた。

「じいさんは元気すぎるくらい元気でバリバリ仕事してる。滯は誠一と別れる気配もなく第一子妊娠中。メルは中学三年生で友達もできて成績優秀。七海は高校一年生で僕の出身校に進学してる」

「そうか……滯が……」

武蔵は何とも言えない複雑な面持ちでそうつぶやくと、口もとを押さえながらうつむいていく。滯のこと以外はまるで頭に入らなかったようだ。彼にとってはそれだけ衝撃だったのだろう。

「まだ滯のことが好きなんだ？」

「感傷にひたるくらい許せよ」

以前の遥ならあきれていたと思うが、いまは彼の気持ちがわかるので何も言えない。たとえあきらめたとしても、そう簡単に想いを消すことはできない。自分ではどうしようもないのだ。

故郷にいるあいだに結婚はしなかったのだろうか。恋人はいなかったのだろうか。気になったものの、藪蛇になりそうで尋ねることは躊躇われた。すこし思案をめぐらせてから口を開く。

「交渉が終わったら故郷に帰るの？」

「いや、できればこっちで暮らしたいと思ってる。姉にメルローズのことを頼まれてるしな。それにいまさらだけど七海との約束も守りたい。いつでも会えるし、相談にも乗る、遊びにも行こうって……あのとき言ったんだ」

あのときというのは、三年半前、武蔵が故郷に帰ると決まる直前のことだろう。結果的に嘘をついたことになってしまい、七海にも号泣されて、いたたまれない思いをしたことはわかっている。だが――。

「七海はもう小さな子供じゃない」

わずかに目を伏せて告げる。その声は自分でも驚くほど冷やかだった。

しかし、告げられた武蔵のほうがもっと驚いただろう。遥を見つめたまま暫しきょとんとしていたが、やがて困惑ぎみに顔を曇らせ、納得がいかないとばかりに口をとがらせる。

「俺はもう必要ないって？」

「それは七海に訊いて」

現在の彼女が何を望むのかは遥にもわからない。ただ、幼かったあのころと同じでないのは確かだ。きっとそこまで考えが及んでいないのだろうが、わざわざここで教えてやることでもない。

武蔵は眉をひそめるが、やがて気を取り直したように唇に笑みをのせる。

「そうだな、あした七海に会えるんだしな」

「……………」

あしたなんか永遠に来なければいいのに——遥は素知らぬ顔を装ったままそんな乱暴なことを思う。もちろん実現不可能なことくらいわかっている。それでも何かに縋らなければ平静を保てられなかった。

「まだテスト残ってるんだけど」

家に戻り、七海の部屋に入れてもらおうとしたところ、怪訝な顔でそう言われてしまった。試験前は二人で過ごさないと決めたのは遥だ。だが、今日はそれを曲げてでも彼女と過ごしたかった。

「ちょっとだけだから」

「……わかった」

彼女は渋々ながらも了承してくれた。

遥は部屋の中に足を進める。学習机には教科書とノートが広げられていた。真面目にテスト勉強をしていたのだろう。すこし申し訳ない気持ちになりながらも、ベッドに腰を下ろす。

「何か話があるの？」

七海は隣に座ると、答えを求めるようにじっと見つめてきた。その無防備な表情と仕草は自分にだけ向けられるものだ。他の誰にも許したくない——遥は横目で見つめ返したままふっと微笑む。

「七海、あした結婚しようか」

「……は？」

「十六歳になるだろう」

「無理に決まってんじゃない！」

「どうして？」

「だって……んっ……?!」

混乱したようにあたふたとする彼女の後頭部に手を添えて、口づける。自分で理由を問いながら聞きたくないと思ってしまった。吐息ごと奪いながらベッドに押し倒し、長袖Tシャツの裾から手を差し入れて、なめらかな肌に這わせる。

「んんっ……ちょ、あしたテストあるんだって！」

七海は身をよじりながら訴えた。

彼女を困らせてしまうことは十分すぎるほどわかっているし、保護者の責任を放棄した行動であることも自覚しているが、どうしても彼女を全身で感じたかった。どうしても彼女に受け入れ

てほしかった。

「ごめん……やめられない……」

口をついたのは、思いのほか情けない声だった。

顔を見られたくなくて隠すように白い首もとにうずめ、愛撫を続ける。そのときにはもう彼女の抵抗はやんでいた。あきらめたのか、流されたのか、同情したのか——頭の片隅にちらりと疑問がよぎるが、すぐに熱い吐息まじりの声をもらし始めた彼女に夢中になり、それ以外のことは何も考えられなくなった。

第17話 プレゼント

「行ってきます」

七海はローファーを履いてくるりと向きなおし、笑顔でそう言った。短めのポニーテールが揺れている。もう夏服なので半袖シャツにベストという格好だ。オレンジ色のネクタイもきちんと締められている。

一方、見送る遥のほうは部屋着のままである。普段は七海より早く家を出ることが多いのだが、今日は休みをとっていた。会社だけでなく祖父の仕事のほうもすべて。

「学校が終わるころ迎えに行くよ」

今日は七海の誕生日だ。午前で定期試験が終わることもあり、一緒においしいものを食べに行こうと約束していた。車なので迎えに行ったほうが早いと思ったのだが、なぜか彼女はすこし困ったような顔になる。

「わざわざ迎えに来なくてもいいからさ」

「今日は休みをとってるから心配いらない」

「遥が来ると目立つから嫌なんだってば」

それが本音だろう。

中学のときから何度も同じようなことを言われてきた。目立つなというのが、目立つことは何もしていないのだからどうしようもない。くすりと笑うと、彼女はあからさまにムツとして眉を寄せた。

「ごめん。プレゼント用意してあるから機嫌なおして」

「ほんと？」

その顔がパッと輝いた。

ささやかなものだが誕生日プレゼントを買ってある。そしてもうひとつ、彼女にとっては何よりのプレゼントとなるものも――。

「夕方、帰ってから渡すよ」

「楽しみにしてる！」

七海は手を振り、軽やかな足取りで学校へ出かけていった。

遥の複雑な心境など何も知らないままに。

昼ごろ、遥は学校の正門からすこし離れたところに車を駐めた。

そろそろホームルームが終わり生徒たちが帰る時間である。振り返って正門を確認するがまだ出てくる生徒はいない。シートベルトを外し、おもむろに鞆から取り出した白い紙を見つめた。

それは白紙の婚姻届である。

ここに来るまえに区役所に寄ってもらってきたのだ。あした結婚しようか――きのうの夜、七海にそう告げたのはふとした思いつきだが、だからといって軽い気持ちだったわけではない。

そもそも七海とは結婚するつもりで付き合っているのだ。彼女本人にはまだそういう話をしていないが、祖父には意向を伝えてある。ただ、時期としては彼女が成人してからと考えていた。

なのに十六歳になったばかりのこの日に結婚を申し込み、婚姻届を提出しようと思ったのは、このあと彼女と武蔵が再会することになっているからだ。その前に、法的に自分のものにしてしまいたかった。

しかし、それを実行に移すことにはためらいがある。武蔵が帰ってきた事実を隠したまま結婚を承諾させるなど、騙し討ちにも等しい。あとで真実を知ったときに彼女がどう思うだろうか。

もっとも、きのうの時点ですでに無理だと断られているので、承諾してもらえる確率は低いだろう。それでも本気であることを伝えればあるいはとも思う。二年半も付き合ってきたのだから。

気持ちが揺れる。後悔しないためにはどうすればいい――。

ふと賑やかな声が聞こえて顔を上げると、校門から生徒たちが出てくるのがバックミラー越しに見えた。婚姻届をしまい、車から出て、助手席側に軽く寄りかかりながら七海を待つ。

梅雨明けはまだだが、今日は真夏のように澄んだ青空が広がっていた。陽射しもかなりきつい。日焼けはしないほうなので心配していないが、それでもジリジリと肌が焼けつくように感じる。

やがて、出てくる生徒たちの中に七海の姿を見つけた。隣の男子は中学時代から仲良くしている二階堂である。卒業式のあと七海に告白して振られていたが、友人関係は続いているようだ。

確証はないものの、彼が有栖川学園に進学したのは七海を追ってのことだろう。そこまでする彼が簡単にあきらめるとは思えない。友人という立場を守りつつ虎視眈々と狙っているはずだ。

七海がこちらに気付いた。急にあたふたとして二階堂と何か言葉を交わし、軽く片手を上げて踵を返すと、ポニーテールを左右に揺らしながら駆けてくる。だが、その表情はひどく不満そうに見えた。

「迎えに来なくていいって言ったじゃん」

「このほうが時間の節約になるだろう？」

七海が帰るのを待ってから出かけるより、ここで拾ったほうが早いのは確かだ。それだけの理由で迎えに来たわけではないが、素直な彼女は言葉どおり受け止めて、くやしそうな顔になる。

「せめて車の中で待っててくれよな」

「さっきの彼、二階堂君だっけ」

「……同中の同級生ってだけだよ」

「向こうはそうでもなさそうだけどね」

遥は校門前に目を向ける。

そこにはいまだに立ちつくしたままの二階堂がいた。微妙な面持ちでこちらを窺っていたが、遥の視線に気づき、そろりときまり悪そうに顔をそむける。

「牽制が必要かな」

そうつぶやくと、隣できょとんとしている七海に振り向き、意図的に甘ったるい笑みを浮かべて手を伸ばした。彼女はぎゅっと声を上げながら飛び退き、上気した顔で恨めしげに遥を睨む。

残念ではあるが致し方のない反応だ。二人の関係は秘密にしているので、これまで自宅以外で

は決してこんなことをしなかったし、恋人だと疑われないよう気を配ってきたのだから。

だが、いまは知られてもいいと、むしろ知らせて外堀を埋めたいとさえ思っている。結婚あるいは婚約してしまえば問題はない。誰にも文句は言わせないし手出しもさせない。けれど――。

じっと七海を見つめる。彼女は顔を紅潮させたまま何か言いたげにしていたが、まわりから注目されているこの状況で言えるはずもなく、ふいと逃げるように助手席に乗り込んだ。

「今日の試験はどうだった？」

運転しながらそう尋ねると、助手席の七海は苦虫を噛み潰したような顔になった。それだけであまり良くない出来だったことがわかる。遥は黒革のハンドルを握ったままくすりと笑った。

「まあ、今度頑張ればいいよ」

「誰のせいだと思ってんだよ」

「そうだね、ごめん」

軽く謝罪すると、七海がじとりと非難めいた視線を流してきた。

彼女があまり勉強できなかったのは遥のせいだ。試験前日だというのに強引に迫り、最終的には彼女も仕方なしに受け入れてくれたが、さすがに申し訳ないことをしたという自覚はある。

七海を必ず幸せにすると、大切にすると、そう誓ったはずなのに――それは恋人としての思いであり、保護者としての責任でもある。彼女より自分を優先するなどあってはならない。

「ねえ、きのう言ってたアレさ、やっぱ冗談だよな？」

「本気だよ」

七海もきのうのことを考えていたようだ。

ほんの一瞬だけどうしようか迷ったが、赤信号で止まると、鞆から薄っぺらな白い紙を取り出した。ゆるく二つ折りにされているそれを、彼女は怪訝な顔をしながら受け取り、ぺらりと開く。

「婚姻届?! なんで、無理って言ったじゃん！」

「気が変わったらすぐ出せるようにね」

七海は未成年なので本来なら父母の同意が必要だが、実親はどちらも亡くなり養親もいないので必要ない。証人二人には当てがある。七海さえその気になれば今日中に提出できるはずだ。

「ちょっと待って、僕、まだ高校生だよ?!」

「結婚しても高校に通えるから安心していい」

「そうじゃなくて！」

彼女は必死に言いつのるが、ふと戸惑ったように瞳を揺らして目を伏せる。

「まだ、そんな……考えられないよ」

訥々と言葉を紡ぐと、手にしたままの白紙の婚姻届を苦しげに見下ろし、遥の胸元に勢いよく押しつけるように突き返してきた。その両手からはかすかながら震えが伝わってくる。

遥はただそっと引き取るよりほかになかった。もうあきらめるべきだろう。無理やり承諾させても意味がない。受け入れられなかったことを残念に思う一方で、安堵もしていた。

しわになった婚姻届を元の場所にしまいながら、ちらりと隣に目を向ける。

「もしかして、まだ武蔵を待ってる？」

「……武蔵は関係ない」

七海はふいと顔をそらした。

どういう表情をしているか気になったが遥からは見えない。青信号になり運転を再開しても、サイドウィンドウのほうに顔を向けたまま動こうとしない。駐車場に着くまで重い沈黙が続いた。

昼食はひつまぶしの店を予約していた。

以前、七海が雑誌の特集に興味を示したことがあったのだ。店は祖父に教えてもらったおすすめのところだ。彼女は一口食べるなりおいしいと感嘆の声を上げた。思わず遥の表情もほころぶ。

食事を始めてからは、車中での澁んだ空気が嘘のように会話がはずんだ。おいしいもので七海の機嫌が直るのはいつものことだ。何もかも忘れ、いまは二人だけの時間を存分に楽しむことにした。

昼食後は、あてもなく二人で街中をぶらぶらと歩いた。

本当はすぐに帰らなければならないのだが、そんな気になれない。目についた雑貨屋さんを見てまわったり、通りがかりの喫茶店でパフェを食べたり、足の向くまま気の向くまま楽しんだ。

ビルを出ると、空の一部が鮮やかな茜色に染まっていた。

目を細めたそのとき、後ろのポケットで携帯電話が震えるのを感じた。嫌な予感がしつつサブディスプレイを一瞥し、素知らぬ顔をしてポケットに戻すが、振動はしつこく続いている。

「ケータイ、出なくていいの？」

「馬に蹴られて死ねばいい」

思わず本音が口をついたが、彼女は訝しむ様子もなくおかしように笑った。

「でも、そろそろ帰る時間だよ」

「……………」

遥は何も言えず、前を向いたまま包み込むように七海の手を握る。これまで決して外ではしなかったことだ。昼間のように拒まれるかもしれないと思ったが、今回は受け入れてくれた。

「やっぱり帰したくないな」

「帰るの一緒の家じゃん」

「どこか泊まっていこうか」

「あした学校あるんだけど」

「……仕方ないか」

もうタイムリミットだろう。いつまでも現実逃避を続けるわけにはいかない。溜息をつき、七海の手を引いて駐車場のほうへと歩き始める。繋いだ手には無意識に力がこもっていた。

車を出すときには、すっかり夜の帷が降りていた。

もうすぐ七海を武蔵に会わせなければならない。そう思うと、緊張と不安でいつものように話をすることもできない。彼女も何か感じているのだろう。静かに座ったまま話しかけてくることはなかった。

「着いたよ」

遙は橘の敷地内で車のエンジンを止めると、助手席に振り向いて言う。

そのとき再び携帯電話が震えた。シートベルトを外してポケットから取り出し、画面を一瞥して顔をしかめたものの、さすがにもう無視はしない。親指で通話ボタンを押して耳に当てる。

「はい」

『おい、遙、いつまで待たせるつもりだ』

電話の向こうから聞こえた声はかなり苛立っていた。三時ごろに七海を連れて帰るという話になっていたので、連絡もなしに五時間近く待たせたことになる。おまけに夕方の電話も無視したのだ。

それも忘れていたわけではなくすべて故意である。一方的に遙が悪い。謝罪すべき立場であることはわかっているが、武蔵の声を聞いてますます憎らしく恨めしくなり、眉を寄せる。

「こっちにだって都合があるんだから」

『言い訳してないで早く連れてこい』

「それが人にもものを頼む態度？」

『おまえこそ遅れたヤツの態度かよ』

「逃げたりしないから黙って待ってる」

『……ん、おまえいま帰ったのか？』

電話口の背後でうっすらと執事の櫻井の声がしていたので、おそらく彼が報告したのだろう。使用人の誰かにこの車庫を見張らせていたのかもしれない。遙は素直にそうだと肯定する。

「だからおとなしくそこにいればいい」

『もうあんまり待たせるんじゃないぞ』

「じゃあね」

煩わしげに言い捨てると、乱暴な手つきで携帯電話を戻してハンドルに突っ伏し、深く溜息をついた。いっそ何もかも投げ出して七海と逃亡したい。ふいにそんな衝動に駆られるが――。

「逃げ回っていても仕方ないからね」

そうつぶやいて自らに言い聞かせる。そして顔を伏せたまま小さく呼吸をして気持ちを整えると、新たに緊張が高まるのを感じながらゆっくりと体を起こし、助手席に振り向いた。

「七海、目を閉じて」

「なんで？」

「サプライズだから」

彼女は怪訝そうにしながらも言われるまま目を閉じる。その上から、遙は用意していた白い手拭いを巻いて後頭部で結んだ。緩めに巻いたので、彼女ひとりで外すのも難しくないだろう。

一呼吸おくと、彼女の頬を両手ではさんで額を合わせた。

「本当は行かせたくない。でも僕の一存でそうする権利はないし、七海のためには行かせるしかない。このままじゃ、きっといつまでも七海の気持ちは宙ぶらりんだ。七海が自分自身でけじめをつけないといけない。たとえ君がどんな結論を出したとしても、僕は君の味方である」

「……何の話？」

いまの彼女には意味がわからなくて当然である。しかし、武蔵と再会したそのあとで理解するだろう。半開きになっている不安そうな彼女の唇に、そっと触れるだけの口づけを落とす。

「あのさ」

「行こう」

七海が何か言いかけたのをわざと遮ってそう言うと、車から降り、助手席側の扉を開けて目隠しの七海を横抱きにする。そして車庫の外で待機していた使用人とともに、屋敷へ向かった。

「下ろすよ」

そう声をかけてから、横抱きにしていた七海をそっと足から下ろした。ふらついて倒れないよう手を掴んで支えたが、しっかり自力で立てたことを見定めると、その手を正面のドアノブに誘導する。

「遥……えっと、これどうすればいいの？」

「扉を開けて中に入って、目隠しを外して」

「わかった」

七海は視界を奪われたまま怖々と部屋に入り、扉を閉めた。

しばらくすると、その向こうから二人のやりとりする声が聞こえてきた。やがて七海の声は感情を爆発させたような号泣に変わる。それがうれし泣きであることは確認するまでもない。

「ずっと、ずっと武蔵に会いたかった！」

「俺もずっと七海に会いたかった」

二人の抱き合っている姿が目につく。

遥は奥歯を噛みしめてうつむいた。本当はこのあと一緒に七海の誕生日を祝う予定だったが、とても入っていける雰囲気ではない。使用人に後を頼むとひっそりと自分の部屋に帰った。

七海は、やはりいまでも――。

うっすらと月明かりのみが差し込む静寂の中、遥は明かりもつけずにベッドに倒れ込み、目を閉じる。それでも思考を閉ざすことはできなかった。

コンコン——。

部屋の扉が叩かれた。

遙は手を止めてノートパソコンの時刻表示に目を向ける。まもなく二十二時だ。扉の叩き方や足音からすると七海に違いない。腰を上げかけたものの立たずに座り直し、一呼吸おいてから返事をする。

「開いてるよ、入って」

「うん……」

戸惑いがちな声が聞こえて、静かに扉が開く。

おそらくあれからずっと武蔵と過ごしていたのだろう。七海はまだ制服を着ていた。いつもなら何の遠慮もなく中まで入ってくるのに、今日は扉に手を掛けたまま不安そうに立ちつくしている。

「座って」

窓際のティーテーブルを示しながらそう言うと、七海はこくりと頷いてようやく部屋に入ってきた。遙はノートパソコンを閉じて立ち上がり、ベッドサイドの内線電話に手を伸ばす。

「ノンカフェインのお茶でいい？」

「あ、お茶はいいや」

七海はきごちない笑みを浮かべて断り、椅子に座った。

長居をするつもりはないという意思表示だろうか。あるいはここにいたくないという深層心理だろうか。遙は受話器を戻し、何もないティーテーブルを挟んで向かいに腰を下ろす。

「ごめん、お仕事の邪魔して」

「構わないよ」

胸がざわつくのを感じながらも表情には出さず、さらりと応じる。

だが、七海はこの部屋に来たときから緊張を隠せていない。話さなければならないことがあるのだろう。どうやって切り出そうか悩んでいる様子が見てとれた。

「あの、プレゼントありがとう」

「ああ……気に入ってくれた？」

「うん、大切に使うよ」

七海への誕生日プレゼントは執事の櫻井から渡してもらった。中身は財布だ。なるべく彼女の好みに合うものを選んだつもりである。二年半も付き合ってきたのだから外しはしない。

「それとさ……その……」

ここからが本題のようだ。七海は言いにくそうに言葉を詰まらせてうつむいた。膝の上へのせた手をギュッと強く握りしめる。表情だけでなく全身がこわばっているのがわかった。

重い沈黙が続く。

気の遠くなるようなとてつもなく長い時間に思えたが、実際はそうでもない。無意識に息を詰めていたことを自覚したそのとき——七海が顔を上げ、強い意志を秘めたまなざしでしっかりと

遥を見据えて言う。

「僕と、別れてほしい」

冷たい手で心臓を驚掴みにされたように感じた。

覚悟はしていたつもりだった。武蔵が帰ってくると聞いたときからこうなる予感はしていた。そして七海が部屋に入ってきたときの様子を見て確信した。それでも現実の衝撃は耐えがたい。

小さく呼吸をして、遠のきそうになった意識をどうにか繋ぎ止める。黒一色に塗りつぶされていた視界も戻ってきた。最初に映ったのは、表情をこわばらせてじっと返事を待つ七海だった。

「やっぱり僕より武蔵が好きなんだね」

「ごめん……遥のことはちゃんと好きだった。すごく大事にしてもらったし、楽しかったし、付き合ってたよ良かったと思ってる。でも武蔵と会った瞬間、心の奥から気持ちが逆流してきたみたいにして……自分じゃどうしようもなくして……」

その話に嘘はないと思う。

要するに心の奥底ではずっと武蔵を求めていたということだ。二度と会えないと聞いていたから無意識に抑え込んでいただけで。再会してあらためて自覚した気持ちは無視できないだろう。

「自分でもひどいと思うけど、こんな気持ちのまま遥と付き合えない」

彼女の声は涙まじりでかすかに震えているように聞こえた。目も潤んでいるが、涙をこぼさないよう必死にこらえているのがわかる。そんな彼女を、遥は眉ひとつ動かすことなく見つめていた。

「僕と別れて、武蔵と付き合うつもり？」

責めたつもりはないが、そう捉えられても仕方のない口調になってしまった。七海はビクリとして、その顔に冷や汗をにじませながらうつむいていく。

「そういうつもりは……っていうか……」

「多分、武蔵のほうに恋愛感情はないよ」

「わかってる」

その反応からすると、遥が言うまでもなく一応の理解はしていたようだ。武蔵と暮らしていたころの七海はまだ小さな子供だったので、冷静に考えればあたりまえではあるのだが。

「それでも僕の気持ちは伝えたい」

「そう……じゃあ、ふられたら戻っておいでよ」

「そんな都合のいいことできるわけないじゃん」

「僕はむしろ戻ってほしいと思ってるんだけど」

「無理だよ……そんなの僕が許せない……」

「……わかった」

戻らないというのは彼女なりのけじめだろう。ふられてもないうちから言い合っても仕方がないので、とりあえず彼女の意思を尊重する姿勢を見せたが、あきらめる気はさらさらない。

「でも、保護者としてはこれまでどおりだから」

「あ……」

七海は小さな声を落とした。そこまで考えが及んでいなかったらしく、きまり悪そうに目を泳がせながら逡巡したあと、遠慮がちに尋ねる。

「遥はそれでいいの？」

「ふられたからって途中で投げ出したりしないよ。七海が成人するまで僕が面倒を見ることになってるからね。きちんと務めを果たすだけの責任感はあるつもりだから、心配しなくていい」

答えたことに嘘はないが、責任感よりも役目を誰にも譲りたくない気持ちのほうが大きい。恋人でなくてもせめて保護者でいたいというのが正直なところだ。だからこそ彼女の心情は無視できない。

「もし七海が嫌ならじいさんに相談するけど」

「僕は……別に、嫌だなんて思っていない……」

「それならよかった」

戸惑いながらも受け入れてくれた七海に、遥はほんのりと笑みを浮かべて応じ、腰を上げる。

「さ、そろそろ寝ないと」

「うん……」

明日は平日なので学校に行かなければならない。七海は渋々ながらも頷いて椅子から立ち上がった。それでもまだ物言いたげな様子を見せていたが、遥は気付かないふりをして扉のほうへ促す。

「じゃあ、おやすみ」

「おやすみ……」

扉を開けると、彼女はチラチラとこちらを気にしながらも、結局は何も言うことなく隣の自室へと戻っていく。それを見届けてから、遥は音を立てないようにゆっくりと扉を閉めた。

はあ——。

扉を背にして寄りかかり、思いきり息を吐き出しながらうなだれた。緊張の糸がぷつぷつと切れてしまったらしく、一気に疲労感に襲われて、そのままずるずると崩れるように座りこむ。

七海と別れた。

こんなことになるなんて思いもしなかった。武蔵が帰ってくると知らされたあの日までは。平穩に付き合い続けて、七海が大学を卒業するころに結婚する。漠然とそう考えていたのに。

だが、まだ終わったわけではない。

武蔵が七海の告白を受け入れることはないはずだ。七海を恋愛対象と見ていないというものもあるが、そもそも他に好きなひとがいる。もう可能性は微塵もないのに忘れられない相手が。

勝負は七海がふられてからだ。すぐには難しいだろうが必ずわからせてみせる。叶わなかった幼い憧れにいつまでもしがみついているより、遥といたほうが幸せになれるということ。

それを実現するにはどうすればいい——蛍光灯の白い光が満ちた部屋の中、遥はゆっくりと顔を上げて前を見据え、冷静に思案をめぐらせ始めた。

「くっ……そ……！」

うつぶせに倒して瞬時に背中側で腕を拘束し、動きを封じると、七海はくやしそうに上気した顔をしかめて呻く。多少、痛みもあるのかもしれない。すぐに掴んでいた腕を放して彼女の体の上からどいた。

「教えたことが全然できてなかったよ」

「うん、いまのは完全に失敗だった」

七海は体を起こしつつ、反省しきりといった面持ちでそう応じた。遥が手を差し伸べると、ためらいなくその手を取って立ち上がり、両手を腰に当てて疲れたように溜息をつく。

「予想外の動きをされるとほんとダメだなあ」

「落ち着いてさえいれば対処はわかるよね？」

「でも頭がまっしろになるんだ」

その表情がどうすればいいかわからないと訴えている。何日も失敗が続いているせいか彼女にしてはめずらしく弱気だ。しかし、そう簡単にできるようになるなら誰も苦労はしない。

「こういう訓練やイメージトレーニングを続けていくしかないね。その積み重ねで応用力がついてくるし、そうしたら落ち着いて対処できるようになってくるはずだよ」

「わかった」

七海は神妙に表情を引きしめて頷いた。

武蔵がこの屋敷に来てから三週間が過ぎた。

七海とは別れたままだ。それでも保護者としてはいままでどおり接しているし、家族としても変わりなく過ごしている。違いといえば、互いの身体に触れなくなったことくらいだろうか。

ただトレーニング中は別である。指導のときにはどうしても触れざるを得ないのだ。あくまで指導なので互いに意識する素振りはない。だが、すくなくとも遥は何も感じていないわけではなかった。

こんな形でも触れられるだけありがたいのだろうが、こんな形でしか触れられないことがせつない。早く恋人関係に戻りたいと気は急いているものの、いまだ何の行動も起こせずにいた。

勝負は七海がふられてから——そう考えているが、二人がどうなっているか現状が掴めないのである。だからといって尋ねるのも憚られる。もどかしいが様子を窺いながら待つしかなかった。

「今日はここまでにしよう」

掛け時計を見上げると、もうすぐ終了時間になろうとしていた。

七海は素直に頷き、いつものように棚に積んである白いタオルを手にとった。けれどもいつもと違ってなかなかジムを出ようとしない。汗を拭いながら、チラチラと物言いたげなまなざしを遥に向けてくる。

「どうかした？」

「うん……」

そう言いながら、口元に白いタオルを押し当ててうつむき加減になった。しばらくすると観念したかのようにそっと顔を上げる。緊張しているのか思いつめているのか、その表情は硬い。

「僕、武蔵と付き合うことになったから」

「……えっ？」

一瞬、彼女が何を言っているのか理解できなかった。

思考が追いつくにつれて鼓動が速く強くなっていく。心臓だけでなく体中が脈動しているかのようにうるさい。付き合うって、まさか——カラカラに乾いた喉からどうにか声を絞り出す。

「恋人として？」

「うん……武蔵と再会した翌日に気持ちを伝えたんだ。最初は断られたけど、あきらめないで何度もお願いしてたら、きのう付き合おうって言ってくれて。一応、遥には言っておこうと思ってさ」

こころなしか浮き立った語調。

その話がまぎれもない事実なのだと否応なく思い知らされる。信じたくないのに信じざるを得ない。冷たい手で心臓を鷲掴みにされたように感じながらも、うっすらと微笑んでみせる。

「そう、よかったね」

「ありがとう」

七海もつられるように安堵の笑みを浮かべた。

息は荒く、顔からは汗が滴り落ちる。

遥はひとりジムに残っていた。朝食もとらず、汗だくになりながらひたすらエアロバイクを漕ぎ続けている。休憩すらしていない。何かしら体を動かしていないと気がおかしくなりそうだった。

どうしてこんなことになってしまったのだろう。二人が付き合うなんて思いもしなかった。武蔵が断るものと当然のように考えていた。まだ滯のことを想い続けているのではなかったのか。

息がうまくできないし、心臓が苦しいし、膝にも痛みが出てきた。いつまで漕ぎ続けるつもりなのか自分でもわからない。いっそのこといまして意識を失えたらいいのに。そう思っていると――。

「おっ、遥、まだいたのか」

ジムに入ってきたのは、遥がいま世界でいちばん会いたくない男だった。護衛係という名目の監視役も二人同行している。気付けば、エアロバイクに跨がったまま呆然と凍りついていた。

「汗だくだな。頑張りすぎじゃないのか？」

「……………」

その男——武蔵が親しげに近づいてきて、遥の顔はこわばる。

彼が空き時間にこのジムを使っていることは聞いていた。ただ、遥たちが使っている早朝の時

間帯を避けていたのか、これまで一度も鉢合わせたことがなかったため、その可能性を失念していた。

よりによってこんなタイミングで来なくてもいいのに。遙がいることに気付いたのなら遠慮してくれてもいいのに。身勝手に苛立ちながら、黒の長袖ジャージを着ている彼をじとりと横目で睨む。

「なんだ、言いたいことがあるなら言えよ」

「……七海と恋人として付き合うって聞いた」

「ああ」

武蔵は隣のエアロバイクに跨がり、ハンドルを掴んでゆっくりと静かに漕ぎ始めた。鮮やかな金髪が動きに合わせてさらりと揺れる。その横顔には何の表情も浮かんでいなかった。

「濡に未練があると思ってたけど」

「まあな」

遙の追及にも動じず、変わらない速度で漕ぎつづけながら平然と答える。だがその真意が判然としない。いたずらに人を傷つける男ではないはずなのに、どうして――。

「いいかげんな気持ちなら手を引いて」

「真面目に考えてるぜ」

武蔵は足を止め、ハンドルから手を放して上体を起こした。誰もいない真正面を向いたまま遠い目になる。

「七海のことは好きだけど、さすがに恋愛感情ではなかったし最初は断った。望みはないが忘れられないひとがいるってことも話した。それでも七海はあきらめなくてな。そのひとのことを忘れられるかどうか僕で試せばいい、なんて……そんなセリフどこで覚えてくるんだろうな」

そう言い、おかしそうにハハッと笑う。

僕で試せばいい――それはかつて遙が七海に投げかけた言葉だ。可能性のない相手を想い続けるつらさにつけ込んで、自分のものにするために。まさか七海がその言葉を利用していたなんて。

だが、武蔵はそれを知っていたわけではないのだろう。さきほどの言葉に揶揄するような気配はなかった。ただ浮かべた笑みをおぼろげに残したまま、物思いに耽るような顔になる。

「おまえの言うように、七海はもう小さな子供じゃなかった。結婚もできる年齢だっていうし、いまの七海なら恋人として付き合うのも問題ない。俺自身いつまでも濡に未練を残すのはどうかと思ってるしな。いい機会かもしれない」

それって――。

遙はじわじわと頭に血がのぼっていくのを感じた。太腿の上にのせていた左手をグッと握りしめて、暴走しそうになる自分を必死に抑えると、横目で武蔵を睨みながら唸るように言う。

「つまり七海を利用するってこと？」

「お互い納得のうえだ」

「保護者の僕が納得していない！」

思わずエアロバイクから飛び降り、武蔵の胸ぐらを掴んでこちらに向かせた。

彼はサドルからずり落ちかけたもののハンドルを掴んでこらえた。壁際で待機していた護衛係の二人があわてて駆け出すが、それを片手で制し、蔑むような冷ややかな目を遥に向ける。

「おまえ、七海と付き合ってたんだってな」

背筋がゾクリとした。

すでに知られているのかもしれない。保護者の立場でありながら恋心を向けたことも、心の隙に付け込んで口説き落としたことも、当時まだ中学一年生だった彼女を抱いたことも——そんなおまえが保護者面をする資格はないと、その目が語っている。

遥としては間違っただけはしていないつもりだ。それでも七海を任せられると信頼して託してくれた武蔵の心情を思えば、多少のうしろめたさは感じる。すくなくとも恋愛ごとに関してはあまり保護者面をするわけにはいかない。

もちろん七海が騙されているのならそうも言っていられないが、すべて承知のうえで武蔵との交際を望んでいるというのだから、反対する理由はない。彼の胸ぐらを掴んでいた手から力が抜けていく。

「……もう終わったことだ」

「そうはいっても未練タラタラに見えるぜ」

「いまさらどうこうしようって気はない」

「じゃあ七海と付き合ってもいいんだな？」

「僕の許可なんて何の意味もないだろう」

「おまえの立ち位置を明確にしたいだけだ」

「邪魔はしない」

恋人でなくなっても七海の味方でいようと決めている。自分の感情だけで二人の仲を裂くようなことはしない。でも——彼の胸ぐらをグッと力をこめて掴み直し、その目を見据える。

「でも、七海を悲しませるようなことをしたら許さないから」

「恩人の娘なんだ。言われなくても大事にするさ」

武蔵は煩わしげにそう言うと、胸ぐらの手を払いのけてエアロバイクに座り直し、再び表情を消してゆっくりと漕ぎ始めた。もうこちらを見ようもしない。だが、遥はその横顔をじっと眉を寄せて睨んでいた。

武蔵はかつて七海の父親に命を賭して助けられている。恩を感じるのわかるが、それに報いるために七海を大事にするというのだろうか。もしかしたら七海と付き合うことを決めたのも——。

たとえそうだとしても交際を反対する理由にはならない。非難もできない。振り切るように勢いよく背を向けると、棚から白いタオルを引っ掴み、壁際の護衛係に目礼してジムをあとにした。

第20話 今夜だけは

「ごめん、僕から誘ったのに遅れて」

遙が店員に案内されて間接照明のともる個室に入ると、富田は振り向いて気にするなと笑った。暇つぶしなのかその手には携帯電話が握られている。スーツの上着は脱ぎ、ビジネスバッグとともに隣の椅子に置かれていた。

遙は空いていた奥側の長椅子に腰掛けて、彼と向かい合った。駅から小走りで来たせいですこし汗ばんでいる。スーツの上着を脱いで軽くネクタイを緩めながら、ふうと息をついた。

テーブルの上を見ると、水の入ったグラスとおしぼりしかなかった。

「先に飲んでてって言ったのに」

「ひとりじゃつまらないからな」

富田は携帯電話をしまいながら苦笑する。

そうはいってもさすがに三十分は長いだろう。遙が遅刻したことへの当てつけなどではなく、ただ単に律儀に待っていただけなのだろうが、だからこそ余計に申し訳なく感じてしまう。

すぐに店員がおしぼりと水を持ってきた。遙は熱いおしぼりで手を拭くと、気を取り直してドリンクメニューを広げた。富田が一ページずつゆっくりとめくっていき、二人で眺める。

「遙、おまえ何にする？」

「スパークリングワイン」

「じゃあ、俺も」

つきあいならビールも飲むが、好きなのは発泡性ワインとそれをベースにしたカクテルである。ただ普段はアルコール自体ほとんど飲まない。富田とのプライベートか会社関係で必要に迫られたときくらいだろう。

富田は冷えたビールが一番だと言っていたが、ワインも好んで飲むようだ。遙といるときはたいてい遙と同じものを頼んでいる。いつもビールばかりなのでたまにはということらしい。

店員を呼んでスパークリングワインをグラスでふたつ注文すると、そう時間をおかずに運ばれてきた。ついでにいくつか料理を注文してから乾杯する。渴いた喉に、辛口スパークリングワインのシュワツとした刺激が心地いい。

「今日は急に誘ってごめん」

「いや、どうせ暇だったし」

先約はなくても夕食など何かしら予定はあっただろう。それでも快諾して来てくれたのだから感謝しかない。今日はどうしても富田と一緒に飲みたい気分だったのだ。

「仕事はどう？」

「あー……いっぱいいっぱいだな」

「最初は覚えることも多いしね」

「おまえは余裕だろ？」

「後継者教育もあるし結構大変だよ」

「もうそんなことまでやってるのか」

「まあね」

それぞれ就職して約四ヶ月、互いの会社や仕事のことなど話は尽きない。そのうち注文した料理が運ばれてきた。大皿のサラダとパスタを適当に取り分けていると、富田が思い出したように言う。

「そういや、何か話があるんじゃないかったのか？」

「ああ、うん……」

それが今日誘った理由のひとつだ。

気は重いが、いつまでも富田に黙っているわけにはいかない。七海との関係を隠すために、何年も偽装恋人を続けてもらっているのだから。取り分けた皿を手渡しながらさらりと告げる。

「七海と別れた。ふられたんだ」

「えっ……」

富田は目を丸くして絶句した。

遥はうっすらと自嘲まじりの笑みを浮かべると、順を追って話していく。七海は昔からずっと武蔵に恋心を抱いていたこと、遥はそれを承知のうえで告白して付き合ったこと、帰ってこないはずの武蔵が帰ってきたこと、七海から別れを切り出されて受け入れたこと、今朝武蔵と付き合い合うことになったと報告されたこと——守秘義務に抵触する部分はぼかしたが、七海とのあいだに何があったかは伝わただろう。

「ひどいな……自分さえ良ければいいのかよ……」

富田はテーブルの上でこぶしを震わせて呻くように言う。その眉間には深い皺が刻まれていた。まさかこれほどまで七海への怒りを露わにするとは思わず、驚くと同時に、板挟みになったような複雑な気持ちになる。

「仕方ないよ。武蔵が帰ってくるなんて誰も思ってなかったんだから」

「それにしても二年半も付き合いあってたのに、好きなひとが帰ってきた途端にほいほい乗り換えかよ。普通なら躊躇するだろ」

事実だけを追えば、そういう印象になるのかもしれない。

確かに決断は早かった。だからといって悩んでいないことにはならない。あのときの涙に震えた声は、決して演技ではなかったと断言できる。彼女なりに罪悪感で苦しんでいたはずだ。それでも——。

「自分の気持ちに嘘がつけなかったんだよ」

遥はそう言うと、グラスに手を伸ばしてスパークリングワインを飲んだ。勢いよく流し込んだせいか喉の奥がカッと熱くなる。グラスを戻して、細かな泡がはじけるのを眺めつつ静かに吐息を落とす。

「無理して付き合いつづけてもお互いつらいだけだし、これで良かったんだと思う。仕方ないよね。誰を好きになるかなんて自分でもコントロールできないんだから」

「それは……まあ……」

そのあたりは富田にも思い当たることがあるはずだ。眉を寄せてうつむき、テーブルの上のせた左手をぐっと握り込んでいく。そのときキャンドルに照らされてプラチナの指輪がきらりと

輝いた。

「ペアリングは今日で終わりにしようか。僕はこれからも女避けのために何か嵌めておくけど、富田に嵌めてもらう意味はもうあんまりないからさ。会社が別々で普段ほとんど一緒にいないし」

「いや、やめないほうがいい」

富田は真顔で反論する。

「相手がいないと説得力がないから俺が協力してるんだ。それに大学時代のことを知ってるヤツは結構いるし、俺だけ外してるのを知られたらマズいと思う。別れたのかとか詮索されるのも面倒だし」

そんなことは言われるまでもなく承知していた。

それでも終わりにしようと言ったのは、彼をいつまでも縛り続けるわけにはいかないと考えてのこと。だがこれまでと同じようにやはり引き留められてしまった。遥としてはありがたいのでつつい甘えてしまうのだが。

「富田はさ、もっと自分を大切にしたいほうがいいよ」

「別に彼女がほしいとか思っていないから心配するな」

「それって、まだ滯が好きだってこと？」

「……そんなんじゃない」

じっと覗き込んで尋ねると、富田は目をそらしてムツとしたように言い捨てる。しかし頬の紅潮は隠せていない。滯を意識するような素振りはなくなっていたし、子供ができたと聞いても平然としていたので、もうふっきれたものとばかり思っていたのに。

いつまで想い続けるんだろう——。

難儀だなと思うが、遥もいずれ同じ道をたどりそうな気がしている。七海のことを忘れて他の女性を好きになるなんて、とてもじゃないができる気がしない。数えきれないほどの思い出があるからなおさらだ。

「食べよう。もうだいぶ冷めてるけど」

「ああ」

富田は気を取り直したように笑顔で頷いた。

冷めたパスタを完食したあと、今度はあたたかいうちに食べようとピザを注文する。それから再び仕事のことを話したり、とりとめのない話で笑い合ったり、楽しい時間を過ごした。

「思ったより元気そうで安心した」

最後にひとりでデザートを食べる遥を見ながら、富田は安堵まじりに言う。

確かに自分でも意外なくらい笑うことができていたが、それは富田のおかげだ。自分ひとりでいたらひたすら沈んでいたかもしれない。もっとも傷が癒えたわけでもふっきれたわけでもないのだが。

「まあ、本当につらいのはこれからかもね。付き合ってるふたりを、ひとつ屋根の下で見守らないといけなわけだし。考えただけで頭がどうにかなりそうだよ。何の罰ゲームなんだろうね」

そう冗談めかして言うと、エスプレッソのかかったアイスクリームを口に運んだ。その冷たさがほろよいの体にしみわたる。本当はパフェを食べたかったが残念ながらメニューになかった。

カランと音が聞こえて視線を上げると、富田が氷水の入ったグラスに手を掛けて難しい顔をしていた。

「なあ、おまえあの家を出て一人暮らししたほうがよくないか？」

「そういうわけにはいかない。僕はまだ七海の保護者なんだから」

「そうか……」

七海が二十歳になるまでは論外だし、それ以降も橘の後継者という立場では難しいはずだ。もっとも武蔵と七海のほうが居を移すかもしれないが、それまではふたりを見守る覚悟でいる。

「でも、今夜だけは帰りたくないな」

情けない本音が口をついた。

だいぶ酔いがまわっているという自覚はある。すこし失敗したなと思いながらも表情には出さず、黙々とアイスクリームをすくって口に運んでいると、ふいに正面の富田が口を開いた。

「じゃあ、俺んちに来るか？」

遥はきょとんとして手を止めた。富田はグラスに手を掛けたままうつむいていたが、気恥ずかしそうにそろりと視線を上げて言い添える。

「そんなに広くないけどな」

「知ってる」

思わず遥はくすりと笑った。

富田は実家暮らしだ。子供のころに何度か遊びに行ったことがあるが、広くないというのは橘の屋敷と比べてのことで、一般的にいえばむしろ広い。そのくらいのことは理解している。

今日は金曜日か――。

富田の言葉に甘えて一晩だけ泊めてもらおうか。そうしたらあしたからきっとまた頑張れるはず。ふわふわした頭でそう考えると、スプーンを手にしたまま無防備な笑みを彼に向けた。

第21話 激情

僕の願いは――。

願ってはならないことを願いそうになる自分を戒めながら、遥は賽銭箱の前で手を合わせる。そうなるともう他に願いたいことなんて思い浮かばない。それがいまの自分ということだ。

そっと隣に目を向けると、着物姿の七海がおしとやかに両手を合わせて拝んでいた。その横顔はいつになく大人びて見える。武蔵に関する何を何か願っているのかもしれない。

「行こうか」

「うん」

七海がそっと目を開けたのを見計らって声をかけると、彼女は笑顔で振り向いた。吐く息はかすかに白い。薄曇りの早朝、ちらほらと初詣客が来ている小さな神社を、二人並んであとにした。

七海が武蔵と付き合い始めてから五か月が過ぎた。

保護者としてはいままでと変わらず接しているが、それ以外では若干距離を置くようになっていた。朝のトレーニングも武蔵に任せている。未練があるからこそ近くにはいられなかった。

それでも二人の動向はどうしても気になってしまう。見たくもないくせに親しげな様子を目で追い、聞きたくもないくせに隣の部屋に聞き耳を立て、ときどき使用人にも報告させる始末だ。

二人が恋人として過ごしているのは主に武蔵の居室だが、七海の部屋のときもある。いずれにしても護衛係が声の届くところで待機しているので、最初のうちは二人とも落ち着かなかっただけだ。

しかし次第に慣れ、いつしか意識することなく過ごせるようになっていた。体を寄せ合いながらおしゃべりをして、お茶をして、笑い合っ――遥のときよりもよほど恋人らしくしている。

ただ、二人で遊びに出かけたことはこれまで一度もない。武蔵が自由な外出を制限されているからだ。七海としては寂しく思うこともあるだろうが、何も言わず素直に聞き分けている。

初詣に誘ったのはそういう事情があったからだ。毎年楽しみにしていたので連れて行ってやりたい。それは保護者としての思いといってもいいだろう。もちろんおかしな下心はない。

七海はすこし驚いていたものの笑顔で頷いてくれた。そしてこの元日、そろって和服を着て近所の小さな神社へ出かけたのだ。メルローズも誘ったが友達と先約があるとのことで、二人きりである。

「今日はじいさん居間にいるはずだから、そのまま挨拶してきなよ」

寄り道せずに帰り、あたたかい玄関でほっと息をつくとき、外套を脱ぎながら七海に告げる。そのままとするのは着物のままとという意味だ。毎年のことなので勝手はわかっているだろう。

「遥は一緒に行かないの？」

「あとで行くよ」

初詣に行ったあとはいつも一緒に挨拶をしていた。だから一人で行かせることを不思議に思っ

たのだろう。怪訝な顔をしている七海をそこに残して、遥はひとり先に廊下を進んでいった。

「え、なんで着物なんか着てるんだ？」

遥がひとりで向かったのは武蔵の居室である。扉を開けてくれた護衛係二人に会釈して中に入ると、武蔵はソファに座ったまま目を見張り、驚いたように紺色の着物と羽織を眺めてそう言った。

「正月だからだよ」

「ああ……」

着飾ることに興味がないのは武蔵も知っている。公の場では必要に応じてそれなりのものを身に着けているが、あくまで身だしなみでしかない。初詣で和服を着るようになったのは七海にせがまれてのことだ。

武蔵に促されて二人向かい合う形でソファに座る。そのとき執事の櫻井が二人分の紅茶と菓子を運んできた。手際よくローテーブルに並べて退出するのを見届けると、遥は静かに切り出す。

「ちゃんと話すのは久しぶりだね」

「ああ、あのとき以来か」

あのとき——七海と付き合い始めたのを知ってジムで話をしたときだ。話というより口論だったかもしれない。喧嘩別れのようにジムをあとにしてからというもの、没交渉が続いていた。

今日は話があるからこの居室にいてほしいと遥のほうから頼んだ。そのときは使用人を通していたので直に話していない。あらためて向かい合って言葉を交わすとやはりすこし緊張する。

武蔵も同じなのだろう。沈黙が続くにつれて表情がこわばっていくのがわかる。しかし目を伏せたままごくりと唾を飲み下すと、遥の顔色を窺うようにちらりと視線を上げ、口を開く。

「俺を非難しに来たんだろう？」

「もうそんな気はないよ。いつまでも気まずいままではいたくなかっただけ。七海が幸せにしているなら何も言うことはないし、それが続くよう支援もしたい。何があっても七海の味方でいようって決めたから」

虚勢もあるが、言ったことに嘘はない。

武蔵にとっても悪い話ではないだろう。七海との将来に手続上あるいは外交上の問題があることくらい、彼ならわかっているはずだ。しかし何が不満なのか当惑したように眉をひそめた。

「もしかして聞いてないのか？」

「何を？」

聞き返すと、固く口を引きむすんでうつむいてしまった。しばらくそのままの姿勢で何か考え込んでいたが、やがて背筋を伸ばし、意を決したようにまっすぐ遥を見つめて告げる。

「おととい七海と別れた」

「……は？」

何を言っているのかにわかに理解できなかった。

武蔵は考えながら慎重に言葉を継いでいく。

「七海のことはいまでも好きだ。でもそれはあくまで家族や仲間みたいな感覚で、恋人としてじ

やなかった。付き合ううちに馴染んでくるかと思ってたけど、どうしても違和感が拭えなくて...
...それで別れた」

その説明を聞くうちに、遥はだんだんと鼓動がうるさくなるのを自覚した。そのうち息もできないくらい苦しくなり、じわりと汗がにじみ、腿の上で震えんばかりにこぶしを握りしめる。

「つまり、武蔵が捨てたってこと？」

「俺から別れてくれと言った」

そう答えた武蔵をグッと歯噛みして睨めつけると、地を這うような声を絞り出す。

「やることやっておいて、いまさら.....」

「抱いて初めてわかったんだから仕方ないだろう。話してるだけのときは普通に楽しかったし、こんな違和感を感じるなんて思いもしなかった。濡には感じたこともなかったのにな」

瞬間、全身の血が沸騰したかのように感じた。

気付けばローテーブルに飛び乗り、武蔵の頬に力いっぱいこぶしを叩き込んでいた。護衛係のひとりにあわてて羽交い締められる。蹴散らしたティーセットは床にまで派手に飛び散っていた。

武蔵は顔をしかめながら殴られた頬に手を当て、体を起こした。こちらには目も向けずに放してやれと護衛係に告げる。護衛係はすこし迷っていたようだが、言われるまま拘束を解いた。

遥はジンジンと疼くこぶしをきつく握りしめ、奥歯を食いしばった。

「最悪だ。何で帰ってきたんだ.....武蔵さえいなければ.....」

「七海の心を掴めなかったのはおまえ自身だろうが」

カッとして再び武蔵に殴りかかる。

だが片手で軽くこぶしを受け流されたかと思うと、逆に頬を殴りつけられた。勢いよく吹っ飛ばされて床に転がり、小さく呻く。焼けるような頬の痛みとひどい目眩で、すぐには起き上がれない。その無様な姿を、武蔵がソファに座って冷やかに見下ろしていた。

「殴られてやるのは一度だけだ」

「.....もう顔も見たくない」

目の奥がじわりと熱くなり視界がぼやける。頭がグラグラするの感じつつもどうにか立ち上がり、手を貸そうとする護衛係を払いのけると、何度もよろけながらフラフラと部屋をあとにした。

「え.....ちょっと、それどうしたんだよ！」

廊下の角を曲がったところで七海と出くわした。剛三や他の家族への挨拶をすませて部屋に戻るところだろうか。まだ着物姿のままである。遥の有りさまを目にするとギョッとしていた。

あらためて意識すると確かにひどい状態だ。着物は着崩れているうえ裾に紅茶までかかっているし、遥自身は立つのがやっとだし、何より殴られた頬が腫れてじくじくと熱を持っている。

どうにか姿勢を正して、たいしたことはないかのように取り繕うが、頬がこれではあまり説得力がないかもしれない。七海のひどく心配そうなまなざしから逃れるように、そっと目をそらす

「おととい武蔵と別れたって聞いたけど」

「……まさか、それで殴り合い？」

いきなり核心を突かれるとは思わず、絶句した。

それが肯定を意味することくらい誰にでもわかる。七海は泣きそうになるのをこらえるように眉を寄せた。だが遙がじっと見つめていることに気付くと、ぎこちなく笑みを浮かべてごまかす。

「何やってんだよもう。手当てしてもらおう？」

笑い飛ばすように言うと、手を引いて連れて行こうとするが、遙はギュッと手を握り返して引き留めた。

「七海……戻っておいでよ」

「え？」

何のことを言っているかわからなかったのだろう。彼女はきょとんと不思議そうな顔をして振り向いた。遙はしっかりと繋ぎ止めるように手を握りしめたまま、その目を見つめて明確に告げる。

「もう一度、僕と付き合おう」

七海は息を飲んだ。暫しの沈黙のあと、微妙に目を伏せて自嘲を浮かべる。

「そんな虫のいい話ないよ」

「僕がいいって言ってるんだ」

「遙にひどいことしたのに」

「七海は何も悪くない」

「でも自分が許せないんだ」

「僕が許すよ」

真剣な気持ちを伝えようと握る手に力をこめながら、みっともないくらい必死に言いつのる。けれど七海は応じようとしない。困ったように目をそらして逡巡したあと、きまり悪そうに言う。

「ごめん、まだ武蔵のことが好きだからさ」

「……………」

もどかしく思うものの、一方的に別れを告げられたばかりなのだから、気持ちの整理がつかないのも無理はない。それでもいつかは遙のもとへ戻ってきてくれる。そう信じたいが——。

彼女を掴んでいた手から無意識に力が抜けていく。しかし離れかけた瞬間、彼女のほうからしっかりと強く握りなおしてきた。ハッとする遙に、気まずさをにじませながら曖昧に微笑みかける。

「手当てしに行こう？」

「ああ……」

今度は手を引かれるまま素直に歩いた。

つないだ手がやけに熱く感じる。熱を持っているのは七海なのか、遙なのか、あるいはどちらともなのか——ぼんやりとそんなことを考えながら、ただ黙ってそのぬくもりに甘えていた。

「おまえもただの男というわけか」

剛三は正月ということで身に着けていた羽織袴のまま、革張りの椅子にゆったりと身を預けて溜息をついた。その表情は渋い。正面で背筋を伸ばして立つ遥にあきれたような視線を送る。

「激情にまかせて殴りつけるなど愚の骨頂だ。今回は罪に問われないが、おまえのしたことは十分傷害罪になりえるのだぞ。目撃者が二人もいるのだから言い逃れはできない。復讐したいのなら頭を使って上手くやるのだな」

「申し訳ありません」

遥は素直に頭を下げた。

今朝の諍いについては原因も含めて剛三に報告されている。この屋敷で彼に隠しごとをするのは不可能だといっている。半年前に遥と七海が別れたことも、そのあと七海と武蔵が交際を始めたことも、当然のように把握されていた。

剛三が危惧しているのは、直情的な行動により足をすくわれることである。些細な過ちが命取りになりかねない立場なのだ。どこで誰が手ぐすねを引いているかわからない以上、常に冷静に対処しなければならない。

だが今回にかぎってはそういう心配はないだろう。武蔵の存在自体が秘匿されているため表沙汰にできないのだ。そこまで計算して殴りかかったわけではないが、頭のどこかで承知していたのかもしれない。

遥としては何より殴り返されたことが不覚だった。頬はすこし腫れが引いたもののまだジンジンと疼いている。武蔵のほうが身のこなしも腕力も上ではあるが、落ち着いていればあのくらい防げたはずだ。

「良かったではないか」

つらつらと考えごとをしながら頭を下げていた遥に、予想外の言葉が降った。怪訝に顔を上げると、剛三は椅子にもたれたまま鷹場に腕を組み、意味ありげな笑みを口元にのせていた。

「まだあきらめておらんのだろう？」

「.....あきらめたくはありません」

「それならば早くよりを戻すのだな」

「努力します」

遥は抑揚のない声でそう答えたあと、わずかに目を伏せた。

言われるまでもなくそうしたいと考えてはいたが、簡単なことではない。七海は離れても振られても一途に武蔵を想い続けている。事実、まだ武蔵が好きだからとすでに一度断られているのだ。

年末年始の休暇が終わるころには、頬の内出血はほぼ消えていた。

長期休暇中だったのは不幸中の幸いである。殴られた痕跡を残したまま会社に行けば、後継者という立場ゆえにあることないこと騒がれ、おかしい噂を立てられていたかもしれない。

武蔵とは顔を合わすことさえ滅多になくなった。これまでは話をしないまでも出くわすことは度々あったが、いまは食事も自室ですませ、仕事へ向かうときくらいしか出歩いていないようだ。

そして七海とは――。

「週末、映画に付き合ってくれない？」

七海の冬休み最後の日、彼女に請われて数学の問題を教えたあと、緊張を押し隠してさりそう切り出した。彼女は問題集とノートを閉じようとした手を止め、微妙に困惑の表情を浮かべる。

「何の映画？」

「これ」

遥がそう言いながら机のひきだしから取り出したのは、アメリカのミステリ小説を原作とした映画の前売り券である。日本での公開は今週末だが、本国では二か月前に公開されて高い評価を受けているらしい。

「あ……ちょっと行きたいかも」

「じゃあ行こうよ」

控えめに興味を示す七海に、遥は焦燥感を悟られないよう注意しながら後押しする。それでも彼女はまだすこし迷っているようだったが、しばらくすると曖昧にはにかんで頷いた。

「うー……なんかもやもやするっていうか、腹立つっていうか」

土曜日の昼すぎ、約束したとおり二人で例のミステリ映画を観た。しかし上映が終わるなり、七海は思いきり眉を寄せてそんなことをつぶやく。遥は座ったまま隣の彼女に視線を流してくすりと笑った。

「確かに後味は悪いよね」

「あのラストはなあ」

ミステリ・サスペンスという分類になっているものの、重厚な人間ドラマに重きが置かれており、事件を解決して大団円という類の話ではなかった。遥としては現実の理不尽さを突きつけるこの結末も悪くないと思うが、七海の好みではないだろう。

「今度はもっと楽しそうなのにはしよっか」

「……うん」

今度があるとは考えてもいなかったのだろう。七海はきょとんとして流されたように返事をする。驚いてはいるものの嫌がってるようには見えない。遥はひそかに胸をなで下ろした。

しばらくして退出の人混みがまばらになってきたころ、二人は席を立った。

「坂崎？」

シネコン直結のエレベーターで一階に下りて、エントランスを歩いていたとき、雑踏にまぎれてふいにそんな声が聞こえた。七海の名前は坂崎だ。七海も遥もつられるように振り向く。

「え、二階堂?!」

七海が甲高い声を上げた。

そこには彼女が中学時代から親しくしている男子がいた。休日なのでダウンジャケットにジーンズという私服姿だ。半年前に見かけたときよりも背が伸びている。もう遥の身長を超しているかもしれない。

「こんなところで坂崎に会うなんて驚いた」

「僕もだよ」

二人はそう笑い合った。通行の邪魔にならないよう端に寄りつつ話を続ける。

「遊びにきたのか？」

「うん、映画を観てきたところ」

「俺はスパイクを買いに来た」

彼はスポーツ用品店の手提げ袋を軽く掲げて見せる。部活で使うものだろう。高校でも野球部に入り、一年生ながらレギュラーに選ばれているらしい。前回の身辺調査報告書にそう記載があった。

「七海の友達？」

「あ、うん……同じ高校の二階堂」

背後から白々しく声をかけると、七海は当惑して気まずそうに二階堂を紹介した。彼は遥の存在に気付いていなかったらしく、無言のまま驚いたように顔をこわばらせたが、すぐに我にかえて会釈する。

「こんにちは」

「橘です」

遥はよそいきの顔で微笑んだ。それが相手に与える影響を十分に承知した上で。案の定、二階堂は逃げるようにわずかに視線をそらした。その微妙な空気を感じ取ったのか七海はおろおろする。

「えっと、僕がお世話になってる家の人でさ」

「知ってる」

中学のときは、入学式や卒業式の他にも三者面談などで何度か学校を訪れている。そのたびに騒がれていたのが七海の友人なら当然知っているだろう。七海の誕生日に高校まで迎えに行ったときも遠くから見ていたはずだ。

「あの」

ふいに二階堂が切り出した。その目は思いつめたように遥を見据えている。しかし半開きの唇はなかなか続きを紡ごうとしない。「何？」と遥が促すと、緊張をにじませながらも意を決したように口を開く。

「あなたと坂崎さんはどういう関係なんですか？」

「簡単に答えられるような関係ではないね」

「それは、保護者だけじゃないってことですか？」

「厳密に言えば七海の保護者は僕ではなく祖父だ」

望んだ答えが得られなかったのだろう。二階堂は傍目にもわかるくらい不満そうな顔になった。

「君は何を聞きたいの？」

見当はついているが、わざわざ意を汲んで答えてやる義理はない。聞きたいことがあるならばはっきりと言えればいい。そう挑発するように冷ややかな声音で聞き返すと、二階堂は顔をしかめて遙を睨んだ。

「立場を利用して交際を強要してませんか？」

「仮にそうだと、素直に認めると思う？」

「……………」

彼はおそらく七海の誕生日に校門前で目撃していたのだ。遙が七海の頬に手を伸ばそうとして拒否されたところを。そしてそのあと彼女が仕方なしに車の助手席に乗ったところを。それしか知らなければ強要していると思うのも無理はない。もちろんいくら騒ぎ立てたところで何の証拠もないのだから、心配はしていないが――。

「ちょっと待てよ！」

重い空気を破ったのは七海だった。その頬は紅潮している。

「遙がなんか思わせぶりなこと言ってただけだし、強要も何もそもそも付き合っていないからな。何度もそう言ってるのに何で信じてくれないんだよ。そんなに信用ない？」

「あ、いや……ごめん」

二階堂はきまり悪そうに詫びるが、付き合っていないと信じて納得したわけではないはずだ。しかし当の七海にここまで強く言われてしまった以上、もう追及はできないだろう。すくなくとも彼女の前では。

二人は二階堂と別れ、チョコレートショップの二階に併設されたカフェに入った。

これまでも何度となく七海と訪れていたところである。チョコレートの名店だけあってチョコレートパフェが絶品なのだ。ただ、ひとりでは来ていなかったのでおよそ半年ぶりである。

窓際の席に案内され、二人でメニューを見ながらデザートとドリンクを注文する。遙はチョコレートパフェ、七海はブリュッセルワッフルだ。どちらにも名物のチョコレートアイスがふんだんに使われている。

「ごめん、なんか二階堂が暴走して」

エアコンの暖房が効きすぎるくらい効いたなか、七海は冷たいグラスの水を飲んで一息つくつと、そう切り出した。

「でも否定しなかった遙もどうかしてる」

「過去に交際していたのは事実だからね」

「強要はされてないけど？」

「立場だけで強要になることもあるから」

「うーん……」

立場的に優位な者からの要求は断りづらい。たとえば里親と里子の関係であれば、断ったら家

を追い出されるかもしれない、生きていけないかもしれない、そう考えて意に沿わない承諾をすることはありうる。

二階堂もおそらくそのあたりのことを心配していたのだろう。彼に悪気があったわけではない。七海が好きだからこそ黙っていられなかつただけである。そのくらいは七海もわかっていると思うが――。

「なんだよ」

無遠慮な遥の視線に、七海は居心地悪そうに眉をひそめる。

遥はグラスの水を飲んでゆったりと椅子にもたれた。意図的に表情を消してポーカーフェイスを作ったまま、ちらりと七海に目を向けて言う。

「二階堂君にずいぶん好かれてるみたいだね」

「……中学のときに告白されたことはあるけど」

「へえ、それでどうしたの？」

「遥と付き合ってたし断るに決まってんじゃない」

「じゃ、いまあらためて告白されたらどうする？」

「二階堂と付き合うとか考えられない。無理」

「そう」

それなりに親しくしているのに無理とまで言われてしまった彼には、男として同情を禁じ得ない。ただ遥としては安堵した。自分がかつて付き合っていたのだから無理ということはないだろうし、望みは十分にあるはずだ。

「なら、僕と付き合うことを考えてみてほしい」

「……まだ武蔵のことが好きだって言ったけど」

「それでも構わない」

七海の目を見つめて真剣に告げると、その瞳が揺らいた。すかさず付け入るように畳みかける。

「そもそも僕らはそこから始まったんだからさ、またそこからやり直せばいい。これからまた二人ですこしずつ積み上げていこうよ。何なら僕を利用するくらいの気持ちでも構わない」

「……ごめん」

七海はうつむき、どうにかそれだけ絞り出すように答えた。

ちょうどそのとき注文したものが運ばれてきた。遥の前にはチョコレートパフェとコーヒーが、七海の前にはブリュッセルワッフルと紅茶が並べられる。ワッフルはチョコレートアイス、バニラアイス、生クリームが添えられた豪華なものだ。

「食べようか」

遥は何事もなかったかのように声をかけた。

先に食べ始めると、続いて七海もフォークとナイフを手を取った。最初こそ気まずそうな顔をして下ばかり向いていたが、食べているうちにすっかり元気を取り戻したらしく、笑顔で声をはずませる。

「やっぱチョコレートアイスはここのがいちばんおいしいよな」

「じゃあまた来ようよ。映画やカフェなら付き合ってくれる？」

「……うん」

一瞬の戸惑いは見えたが、それでもはにかみながら頷いてくれた。

いまはこれでいい。望みがあるということは十分に感じられた。二人で楽しい時間を過ごしていれば、いずれ頑なな気持ちも氷解するだろう——このときはまだ、二人の関係についてそのくらい楽観的に考えていた。

「もう脈はないんじゃないか？」

そう言われて、遥は思わず隣の富田を睨みつけた。

暖色の間接照明が灯る中、彼はきまり悪そうにスパークリングワインを口に運ぶ。この二年のあいだに九回告白してすべて断られたと聞けば、そう思うのも仕方がないかもしれない。けれど。

「誘えば一緒に遊びに行ってくれるし普通に仲はいいよ。いまは高三で受験生だから部屋で勉強を見ることが多いけど。付き合ってたときとあんまり変わらない感じかな。身体に触れないだけで」

「だからそこが問題なんだろ。その、あー……言いにくいんだけどな……遥のことは人として嫌いじゃないけど、そういうことはしたくない。つまり恋愛対象じゃないってことにならないか？」

「あのさ、僕ら二年半も付き合ってたんだけど」

遥はあきれた視線を流して言う。

付き合っているときにはさんざんそういうこともしてきたが、七海が嫌がったことは一度もない。もしそうならもっと早く別れを切り出されていたはずだ。恋愛対象でないという見解には無理がある。

「でもあのころの七海ちゃんはまだ子供だったし、流されるまま何となく付き合ってただけで、離れて気付いたこともあるかもしれないだろう。やっぱり遥のことは保護者としか思えないとか」

痛いところをつかれた。

遥に流されるような形で付き合い始めたのは事実だし、中学生だから未熟だったと言われると反論のしようがないが、それでもきちんと恋人として好きになってくれたと信じている。

遥はすこしだけ残っていたスパークリングワインを飲み干すと、二人掛けソファにゆったりと身を預けた。正面の窓ガラス越しにきらめく夜景をぼんやりと眺めながら、口を開く。

「単に武蔵に未練があるだけだよ」

「七海ちゃんがそう言ったのか？」

「そのくらい見てればわかるから」

最初はまだ武蔵のことが好きだからと言っていたが、そのうち理由を訊いても教えてくれなくなった。だが未練があるのは間違いない。彼の話題を出すだけで狼狽した様子を見せるのだ。

しかし、彼にその気がないならいつかはあきらめなければならない。いつになるかはわからないが、そのときそばにいればきっと自分を選んでくれると信じている。脈がないとは考えたくない。

「どうだろうな。おまえ案外ニブいし」

「は？」

地を這うような声で聞き返ししながら振り向く。富田はあからさまにしまったという顔になり、

逃げるように目をそらす、このまま聞かなかったことにはできない。

「どうということ？ そんなのいままで誰にも言われたことないんだけど。むしろ他人の気持ちには敏感なほうだと思ってるけど。僕のどういうところが鈍いっていうわけ？」

「あ、いや……何となく……」

ぐいっと詰め寄ると、富田は身体をのけぞらせてしどろもどろで答えた。声からも表情からもうろたえていることが窺える。それだけでなく、間接照明でもわかるくらい頬が赤くなっていた。

おそらくまだ滯のことが好きなのだ。ずいぶん前からそういう素振りは見せなくなっていたが、双子の遙が顔を近づけたときだけは別である。もう瓜二つとはいえないものの面影はあるのだろう。

自分だって脈はないのに——。

わずかに目を細めると、元のところに座りなおして小さく吐息を落とした。スパークリングワインに手を伸ばしかけたが、さきほど飲み干してしまったことに気付き、隣のナッツをつまむ。

「もし本当に富田の言うとおりでとしてもさ、僕はまだあきらめられない。可能性はゼロじゃないんだ。状況の許すかぎり希望は捨てないつもり。ごめん、心配してくれてるのはわかってるんだけど」

「……ああ」

うつむく富田の顔はまだほんのりと紅潮していた。無意識なのか、落ち着かない様子で左手薬指のプラチナリングに触れている。遙もつられて自分のプラチナリングに目を落とした。

「富田はさ、将来的に結婚する気はあるの？」

「え……そんなこと考えるのはまだ早いだろ」

「僕はちらほら話が出てるよ」

すでに方々から見合いの打診があると聞いている。

いまは遙の気持ちを知っている祖父が断っているが、七海と結婚する目処が立たないようであれば、他の女性と見合い結婚ということになるだろう。現時点ではまだはっきりと期限を区切られていないが——。

「数年のうちに誰かと結婚することになると思う」

「そうか……」

遙には、その誰かが七海になるよう手を尽くすことしかできない。

隣では富田が思いつめたような顔をしてうつむいていた。結婚について真剣に考えたことがなかったのだろう。しかしすぐに気を取り直したように表情を明るくすると、左手薬指のペアリングを掲げて冗談めかす。

「じゃあ、それまでは俺がおまへの恋人だな」

「心強いよ」

遙は軽く笑いながら応じた。

思えばずいぶんと長いあいだ富田を縛り付けてしまった。彼を解放するためにも早く結婚すべきなのかもしれない。それまでにせめて何か——スパークリングワインを飲んでいる彼を見つ

めて、わずかに目を細める。

「お礼になんでもひとつ言うことを聞こうか？」

「.....おまえな、そういうこと軽率に言うなよ」

「どうして？」

そう聞き返すと、富田はグラスを置いてあきれたように溜息をついた。

「自分がめっちゃくちゃモテるって自覚あるのか？」

「あるから富田とペアリングしてるんだけど」

「キスしてとか言われる可能性だってあるんだぞ」

「そのくらいなら全然構わないよ」

「は？」

きょとんとした富田に考える隙も与えないまま、遥は唇を重ねた。しばらくほのかなぬくもりとやわらかさを感じたあと、ゆっくりと顔を離し、彼を見つめてうっすらと唇に笑みをのせる。

富田はぶわっと火を噴きそうなほど真っ赤になった。

「な.....んで.....」

「だからお礼だよ」

「お礼.....え.....」

「足りなかった？」

「そうじゃない！」

あわてて言い返し、顔を赤らめたまま混乱ぎみに眉を寄せる。

「ちょっと待て、おまえ何か思いっきり誤解してるぞ。どこぞの女に迫られたら困るだろうって話で、俺にしてほしいって言ったわけじゃない。いくらなんでもおまえにそんなこと頼むかよ」

どうやら行き違いがあったらしい。

富田はときどき滯と遥を重ねて見ている節があるので、滯では叶えられないことを遥に求めたのかと思ったが、確かにそんなことはひとことも言っていなかった気がする。しかし――。

「そんなに嫌だった？」

「そういうわけじゃ.....」

「ならよかった」

遥はすこしだけ残っていた富田のスパークリングワインを飲み干し、グラスを持ったままにっこりと笑う。

富田はうぐっと言葉を詰まらせてテーブルに突っ伏した。夕チ悪りい、酔っ払いが、などひとりぼそぼそと文句を言っている。顔が隠れているので表情はわからないものの、その耳はゆでだこのように赤かった。

「僕の学費とか生活費とか遥が出してるって本当?!」

七海が切羽詰まったように扉を叩いて遥を呼ぶので、どうしたのかと扉を開けると、何の前置きもなくいきなりそう詰め寄ってきた。体が触れそうなほど近い。そのうえ答えを催促するようにじっと目を見つめてくる。

「とりあえず入って」

「うん……」

動揺を見せることなく無表情のまま部屋に招き入れると、うつむき加減になった彼女の白いうなじを目で追いながら、ひそかに溜息をついた。

日に日に春めいていく三月下旬。

七海は第一志望である国立大学に合格し、先日入学手続きを終えた。この家から通えるので下宿先を探す必要もなく、また高校の卒業式も終わったので、のんびりと羽を伸ばしているところである。

昨日は肩胛骨あたりまで伸びていた髪をばっさりと切ってきた。出会ったころよりすこし長めの女性的なショートボブである。特にこれという理由があつてのことではなく、気分的なものらしい。

今日は中学からの友人である二階堂とランチbuffetに出かけた。二人は同じ大学の別学部に進学する。ようやく受験から解放されたので、パーッと何か食べに行こうという話になったようだ。

決して対抗しているわけではないのだが、遥は忙しいなか定時で仕事を切り上げて帰宅し、七海と夕食をともした。そのとき剛三がいつ帰ってくるかを気にしていたので、おそらくは――。

「で、その話は誰に聞いたの？」

「剛三さん」

ティーテーブルの用意が調うと、遥はひとまず熱い紅茶で一息ついてから尋ねた。向かいから返ってきたのは予想どおりの答えだ。余計なことを、と内心舌打ちしつつも表情は動かさない。

「七海を引き取りたいと言ったのは僕なんだ。じいさんは責任を持って面倒を見るならと名前を貸してくれただけ。だから僕が七海の保護者として金銭の負担もしている。それだけのことだよ」

「それだけ……」

七海はぼつりつつぶやいて微妙な面持ちになった。そのまま無言で何か思案をめぐらせていたかと思うと、ふいに強い意志を感じさせるまなざしを遥に向け、凜然と言う。

「僕にいくらかかったか教えて」

「そんなこと聞いてどうするの」

「返済計画を立てるんだ」

ティーテーブルの上でこぶしを握り、そう意気込む。

そんなことだろうと思っていたので驚きはしなかった。ただ七海は頑固だ。自分でこうだと決めたことはなかなか譲ろうとしない。だが、こちらとしてもそればかりは聞けない話である。

「返してなんかいないからね」

「そういうわけにはいかない」

案の定、強く食いぎみに言い返してきた。ティーテーブルの上でこぶしに力がこめられたせいか、彼女のミルクティーはこぼれそうなほど水面が揺れている。

遥はゆったりと椅子にもたれて腕を組んだ。

「普通は返済するものじゃないよ」

「普通なんて関係ないじゃん」

「僕が返していないと言っている」

「僕は返したいんだ」

七海は一步も引かない。しかし、何かに気付いたようにあっと小さな声を上げると、急にあたふたとして落ち着きなく弁解を始める。

「別に遥だから返すってわけじゃないよ。最初は剛三さんに返すつもりだったし。さっきその話をするために剛三さんのところへ行ったら、お金を出してるのは遥だって教えてくれて……だから……」

剛三は軽率に口を滑らせたわけではなかったようだ。そういう状況であれば言わざるを得ない。それについて対処するのは当然ながら遥の役割である。

「ねえ、七海」

おもむろに呼びかけて腕組みを解き、腿に手を置く。

「僕は正直言って金銭的に何も不自由していない。七海に使ったお金なんて僕にとってははした金だ。返してもらったところで意味がないんだよ」

「遥に意味があってもなくても関係ない。僕が返したいんだ」

七海は前のめりで訴える。

これではいつまでたっても平行線のままだ。こちらの意見には聞く耳を持たず、ただ返したいの一点張りなのだから。遥はあたたかい紅茶を飲んで気持ちを整えると、七海を見つめて問いかける。

「どうしてそんなに返すことにこだわるの？」

「こだわるっていうか……」

七海は曖昧に目を伏せて考えながら、言葉を継ぐ。

「僕は親がいないのに恵まれすぎなくらい恵まれてる。何もかも橘の家に甘えてさ。だから返せるものだけでも返したいって思うんだ。そうじゃなきゃこれから自立して生きられない気がする」

「……わかった」

気持ちの問題である以上、完全に説得することはほぼ不可能だと言っていい。もちろん遥が受け取らなければ返済できないのだから、強硬に突っぱねてしまうこともできなくはないが――。

「七海が就職したら月一万ずつ返してもらう」

「月一万……うーん、それじゃ少くない？」

「さあ、どうかな」

感情を隠したまま白々しくとぼけて、間をおかずに続ける。

「でも返していかないのに無理やり返そうっていうんだから、返済方法くらいはこちらに従うべきだと思うよ。それが気に入らないのなら一円たりとも受け取らない」

「なんだよそれ」

七海は思いきりむくれた。それでも自分のほうが折れるしかないと悟ったのか、あきらめたように投げやりな溜息をつく。

「わかったよ」

「さっきも言ったけど、返済は七海が就職して社会人になってからだ。学生のうちは働かないでしっかり勉学に励んでほしい。約束だよ」

奨学金でも在学中の返済はたいてい猶予されるのだから、おかしな話ではない。むしろきわめて一般的な配慮とっていいだろう。しかし、七海はなぜか眉をひそめて困惑を露わにする。

「でも、バイトしないとひとりで生活できないんだけど」

ひとりで生活――？

一瞬、何の話かと怪訝に思ったが、そのあとすぐに気が付いた。

七海は成人したらこの家を出ていくつもりでいるのだ。彼女がこの家に来たころ、保護者として二十歳まで面倒を見るという話をしたので、二十歳で出ていかなければと考えているのだろう。

だが、遥としてはそれ以降も変わらず面倒を見るつもりでいた。ましてや追い出すつもりなど微塵もなかった。むしろずっとそばにいてほしいとさえ思っているのに。祖父も出ていけとは言わないはずだ。

「学生のうちはここにいればいい。学費も出すよ」

「え……でも、それじゃあ……」

「その分もあとで返済してくれるんだろう？」

甘えたくないと頑なになっている七海のためにそう投げかけると、彼女はひとり百面相をしながら考え込み、やがて渋々といった様子ながらもどうにか受け入れてくれた。

「じゃ、僕にいくらかかったか教えてくれる？」

「七海が就職するときに確定額を書面で出すよ」

「現時点でどのくらいか知りたいんだけど」

「返済は月一万って決まったからもういいよね」

返済計画を立てるために教えてほしいといったのは、他でもない七海である。返済計画が決まったのなら教える必要はないはずだ。けれども彼女としては納得がいかなかったらしく、むうっと口をとがらせる。

「でも、やっぱ総額がどのくらいか気になるし」

「面倒な作業だから何度も出したくないんだよ」

「……そっか」

面と向かって面倒だと言われたら引き下がるしかないだろう。伏し目がちにぼつりとつぶやくと、放置していたミルクティーにようやく口をつけ、気を取り直したように小さくほっと息をつく。

「返し終わるまで何年くらいかかるのかなあ」

「七海も僕もうんと長生きしないといけないね」

「え？」

七海はきょとんとして顔を上げた。

返したいなんて意地を張らなければこんなことにはならなかったのに——遥はひどく身勝手なことを思いながら、彼女の目を見つめてティーテーブルに頬杖をつき、艶めいた笑みを唇にのせる。

「一生、僕から離れられないよ」

「……………」

七海はグッと言葉に詰まり、ほんのりと頬を上気させながら恨めしげに遥を睨んだ。

「遥、もう見合いをして結婚しなさい」

祖父の剛三がそう命じるのを、遥は直立したまま表情も変えずに受け止めた。先日、大伯母からも見合い相手を見繕っていると聞かされたし、呼び出された時点でこの話だろうとほぼ確信していたのだ。

執務机にはお見合い写真らしきものが山積みになっている。剛三は若干うんざりした面持ちでそれを見やると、一番上からひとつぞんざいに取り、中の写真に冷ややかな目を向けながら言う。

「大地たちのこともあって、遥にはしかるべき家のお嬢さんをとという声大きい。個人的にはおまえたちを応援していたし、味方になるつもりでいたが、よりを戻せないのでは仕方あるまい」
「僕はまだあきらめていません」

遥は強気に訴える。

しかし剛三が気持ちを動かされた気配はなかった。手にしていたお見合い写真を無造作に元の場所に戻すと、まっすぐに遥を見据え、厳しさすら感じさせる真剣な声音で諭すように告げる。

「現実を見る。三年以上ふられつづけているのだぞ。七海の気持ちがおまえに向くことはもうない。そのくらいおまえだってわかっているのだろう。ときにはあきらめるしかないこともある」

「……最後にもうすこしだけ時間をください」

遥は背筋を伸ばし、まじろぎもせずひたむきに見つめ返して訴える。泣いてはいないが泣き落としのようなものだ。剛三は半ばあきれたような目つきになりながら、溜息をついた。

「強要や脅迫は絶対に許さんぞ」

「承知しています」

「七海が成人するまでは待とう」

「ありがとうございます」

遥は静かに答え、深々と一礼して剛三の執務室を辞した。

自室に戻る途中、うらかな陽気に誘われるようにふと足を止める。格子窓のガラス越しに庭のほうへ目を向けると、満開の桜並木が風にそよぎ、薄紅色の花びらがひらひらと舞い落ちるのが見えた。

七海は現在十九歳。成人するまであと約三か月だ。

認めたくはないが剛三の言ったことはもっともだと思う。正直、遥自身も七海とよりを戻すのはもう難しいと感じている。これまで三年三か月、何度告白しても受け入れてもらえなかったのだから。

遥は現在二十七歳。まもなく七海の保護者としての役割にも区切りがつき、結婚を考えるにはちょうどいい頃合いである。いつまでも見込みのない片思いにうつつを抜かしているわけにはいかない。

だが、急に言われてもすぐには気持ちを切り替えられない。せめて悔いの残らないようにもうすこしだけ足掻かせてほしい。そのあとは素直に剛三に従う。七海を好きになるまえの人生設計に戻るだけのこと――。

心臓がギュッと引き絞られるように痛む。

七海と出会わなければこんな気持ちを知ることもしなかった。それでも出会わなければよかったと思えないのが憎らしい。小さく吐息を落とすと、その痛みを振り切るように颯爽と足を進めた。

「遙！」

自室の扉を開けようとドアノブに手を伸ばしたとき、足音を聞きつけたのか、隣の部屋から七海があわてた様子で飛び出してきた。その手にはきのう遙が貸したミステリ小説が握られている。

「それ、もう読み終わったの？」

「うん、下巻も貸してくれる？」

「もちろん」

その返事に、七海は嬉しそうな顔を見せる。

そういえば上巻はひどく続きが気になる終わり方をしていた。ラスト数行でぞわりと鳥肌が立ち、混乱し、下巻を読むまで落ち着かないような。七海も同じ気持ちになったのかもしれないと思い、くすりと笑う。

「入って。ちょうどお茶にしようと思ってたところだから、ついでにつきあってくれると嬉しいんだけど」

「うん」

すぐにでも下巻を読みふけりたいところだろうが、笑顔で頷いてくれた。遙は扉を開け、どうぞと彼女を促しながら中に足を進めると、ベッドサイドの内線電話でお茶の用意を頼んだ。

しばらくして使用人が紅茶を運んできた。

レースのカーテンを通したやわらかな陽射しが満ちる中、手際よくティータイムの用意がなされる。二人の前にはそれぞれティーカップが置かれ、中央にはティーポットと籠入りクッキーが並べられた。

さっそくゆらりと湯気の立ちのぼる熱い紅茶を飲みながら、いつものようにとりとめのない話をする。件のミステリ小説については、七海が下巻を読み終わったら語り合おうと約束した。

「じゃあ、僕はそろそろ戻ろうかな」

話が途切れると、七海はカップに半分ほど残っていた紅茶を一気に飲みきって、そう切り出した。いつもはもっとのんびりとティータイムを楽しんでいるのに、今日は明らかに性急である。

「早く下巻が読みたい？」

「ん、まあね」

からかうように尋ねると、彼女は気まずそうに苦笑を浮かべてそう答える。二人で話をしているあいだも、ときどきではあるが手元の下巻に目を向けており、気もそぞろになっていることはわかっていた。

「でも遥も仕事が忙しいみたいだしさ」

「いまはそんなことないけど」

「剛三さんに呼び出されたんだろ？」

「ああ……」

なぜそんなことを知っているのかと不思議に思ったが、遥が自室にいなかったのも、執事の櫻井にでも居場所を尋ねたのかもしれない。

「今回は仕事の話じゃないよ」

「あ、そうなんだ」

「そろそろ見合いしろって」

七海は静かに息を飲んだ。しかし驚いた様子を見せたのはその一瞬だけで、そう、とたいては興味がないかのようにつぶやくと、ティーポットから自分のカップに紅茶を注いで一口飲む。

「僕は見合いなんかしたくないんだけど」

「そんなわがまま言える立場じゃないんだろ？」

「……まあね」

遥は目を伏せ、ひそかに奥歯を噛みしめた。

いつからだろう。七海への想いを口にしようとする、彼女は心を閉ざすようになってしまった。そっけない態度で話をそらしたり、淡々とあしらったりするばかりで、真剣に向き合ってくれないのだ。

いまだに武蔵のことが好きだと知られたくないのだろうか。最初のうちはそれを理由に遥の告白を断っていたのだが、いつしか理由は言わなくなった。尋ねても答えてくれなくなった。そのこととも符合する。

あるいは富田の言うように、もはや遥を恋愛対象として見ていないのかもしれない。気の合う友人ではあるが付き合うつもりはないと。そのことに申し訳なさを感じて隠しているのなら、辻褄は合う。

いずれにしても、遥にできるのは最後にもういちど告白することくらいである。そのために猶予をもらったのだ。きちんと準備をして、どうにか悔いの残らないように気持ちを伝えなければと思う。

それでもきっと答えは変わらない。せめて理由だけでも聞かせてほしいところだが、それも難しいだろう。だから——凧いだ紅茶の水面を見つめつつ、腿に置いた両手をそっと握りしめる。

「ねえ、今度の七海の誕生日にさ」

「ん？」

七海は飲んでいた紅茶のティーカップを置きながら、怪訝な顔をした。急に三か月も先の話を切り出されたのだから無理もない。遥は安心させるようにやわらかく微笑んで続ける。

「一緒にどこか飲みに行こうよ」

「飲みに……って……え、お酒？」

「そう、二十歳のお祝いも兼ねて」

「うん！」

最初こそ面食らっていたが、二十歳のお祝いと聞くと喜んで頷いてくれた。前々からお酒に興味を示していたのだ。未成年のうちは飲まないよう言いつけてあるので、その日が初めてになるだろう。

告白を断られたら、二人きりで飲みに行くのはおそらく最初で最後になる。七海の成人を祝い、一緒にお酒を飲み、それを思い出にしてこの気持ちに区切りをつけよう。遥はひとりひそかに決意を固めた。

「五月の一日二日、大学休めない？」

穏やかに晴れた土曜の昼下がり。

遥は話したいことがあるからと七海の部屋を訪れると、窓際のティーテーブルで向かい合って紅茶を飲みながらそう切り出した。彼女は不思議そうに目をぱちくりと瞬かせたものの、すぐに記憶を探り始める。

「ゴールデンウィーク中は半分くらい休講になりそうだし、実験もないし、二日くらいなら別に休んでも大丈夫だと思うけど……なんで？」

望みどおりの答えに、遥はティーカップに手を掛けてにっこりと微笑む。

「小笠原へ遊びに行こうよ」

「それどこ？」

「ずっと南のほうの島」

「遠いってこと？」

「船で丸一日くらいかかるかな」

「え、そんなところになんで？」

確かに海辺のリゾートというだけなら沖縄のほうがよほど行きやすい。しかし遥としては小笠原でなければならない理由があるのだ。ただ、いまの段階でそれを明らかにするつもりはない。

「野生のイルカが見られるんだ」

「ほんと？」

「一緒に泳ぐこともできるって」

「すごい！」

この話をすれば一も二もなく飛びつくことはわかっていた。

彼女は幼いころからイルカが好きだった。生活が苦しい中、父親に買ってもらった数少ないおもちゃのひとつがイルカのぬいぐるみで、当時は寝るときも離さないくらい気に入っていたらしい。

いまはときどき水族館にイルカやイルカショーを見に行っているが、どちらかというとも海で自由に泳ぎまわっているほうが好きなようだ。それを実際に見られるというなら断りはしないだろう。

「あ、でも……泊まりなんだろ？」

「心配しなくても部屋は別々だよ」

そのあたりを気にしているようなので先回りして答えた。付き合っていないのだから部屋を分けるのは当然である。おかしな下心があって誘っているわけではない。そのことをはっきりと伝えておきたかったのだ。

七海はきまり悪そうにごまかし笑いを浮かべ、目を伏せる。

「じゃあ、行こうかな」

やわらかな頬をほんのりと紅潮させたままそう答えると、白いティーカップに手を伸ばし、ま

だうっすらと湯気のゆらめいている紅茶に口をつけた。

その日は、午前から眩しいくらいの白い日射しが降りそそいでいた。

七海はそびえ立つような大型船を見上げて唾然としていた。ここまで大きいとは思っていなかったのだろう。船内に入ると、興奮を隠しもせずあちこちきょろきょろと見てまわる。

「すごい……船ってというかホテルみたい」

この船は今年二月に就航したばかりの三代目だ。

むかし乗った二代目は、特等室はそこそこゆとりがあってきれいだったが、エントランスや通路は無骨で野暮ったく、船内レストランも古めかしい食堂といった風情で、全体的に冴えない印象だった。

だが三代目は小粋なバーのような展望ラウンジや、明るく広々とした船内レストランなど、パブリックスペースにもかなり力を入れているようだ。クルーズ客の拡大を狙ってのことだろう。

遙はカードキーで特等室の扉を開けて、七海を促した。

「さ、ここが僕らの部屋だよ」

「僕らの……？」

彼女は思わずといった感じで聞き返しながら、怪訝に振り向いた。わかっているのかいないのか問うような視線を向けてくる。遙は気まずい微苦笑を浮かべて軽く肩をすくめた。

「ごめん、小笠原の宿は二部屋とったんだけど、船は一部屋しかとれなかったんだ。ゴールデンウィークだけあって満室でさ」

間際になってしまったのでこの一室を確保するのが精一杯だった。しかもベッドはキングサイズひとつ。あらかじめ了承を得るのが筋だということは重々承知しているが、断られたたくなくて黙っていたのだ。

「七海が寝るときは部屋を出てるから」

「遙はどうするんだよ」

「ラウンジで時間をつぶすつもり」

一室しかとれなかった時点でそうしようと決めていた。ラウンジもデッキも特等専用のほうなら混むことはないだろう。幸いにも身体は丈夫なので一晩くらい寝なくても平気である。

だが、彼女は眉をひそめて困惑した面持ちになった。

「そんなことさせられるわけないじゃん」

「部屋は別って約束したんだし当然だよ」

「いいよ、もう……」

疲れたように溜息をつくとき、ベッドサイドまで足を進めてリュックサックを下ろし、開いた扉のまえで立ちつくしている遙にちらりと目を向ける。

「遙のことは信用してるしさ、一緒に寝よ」

「……ああ」

ドキリとして、気付けばそう返事をしていた。

もちろん彼女に他意がないことくらいわかっている。遙をひとり追い出すのが忍びなかっただ

けだろう。なのに——これしきで意識してしまう自分を情けなく思いながら、後ろ手で扉を閉めた。

「ねえ、外には出られないの？」

展望ラウンジで昼食代わりにアップルパイを食べながら、ガラス越しに外の景色を眺めているうちに、七海はその空気を実際に肌で感じたくなくなったらしい。

遥は冷めた紅茶を飲み干してから七海をデッキに連れて行く。特等専用のほうだ。一般向けよりだいぶ狭いが、利用人数を考慮するとこちらのほうが快適だろう。いまは二人きりである。

そこは若干ひんやりとした潮風が吹きすさんでいた。周囲の構造ゆえか複雑な気流が起こっているらしく、髪が乱雑に吹き上げられて絡まりそうになるが、七海はあまり気にしていないようだ。

「海の匂いなんて久しぶり」

そう言いながら手すりに腕を置いてもたれかかり、目を細める。

幼いころに海辺の田舎町に住んでいたこともあって、懐かしく感じているようだ。父親に連れられて海を見たことも少なくないだろう。なにせ娘に七海と名付けるくらい海が好きな人なのだ。

「この景色、お父さんに見せてあげたかったな」

「今度の墓参りのときに教えてあげればいいよ」

「ん、そうする」

遥も同じように手すりにもたれかかる。

どこまでも果てなく続くかのような見渡すかぎりの大海原。はるか彼方の青い空。陸からは決して見ることでできない景色だ。その中に立つと何か飲み込まれてしまいそうな感覚に陥る。

いつしか陽が傾いてじりじりと水平線に沈み始めていた。その様子を二人して無言で眺める。やがて夕陽が完全に隠れて見えなくなり、急速にあたりが暗くなるのを感じると、遥は隣に目を向ける。

「そろそろ中に戻ろうか」

「うん」

七海は夕陽の名残を見つめたまま頷いた。

薄暮の中、消えゆく光を受けて浮かび上がるその横顔は、気のせいかもしれないがいつになく儂げに見えて、キュッと胸が締めつけられるように感じた。

二人は船内レストランで夕食をとり、客室に戻った。

七海はシャワーを浴びに行き、そのあいだに遥はノートパソコンを開いて仕事をする。急ぎの案件ではないが、ひとりの時間があれば進めようと思っていた。どのみち帰ったら休日返上でやることになるのだから。

「あれ、お仕事してるの？」

「もう終わるよ」

浴室から出てきた七海は、太腿くらいまで丈があるゆったりとしたパーカーに、細身のスウェットパンツという格好をしていた。半分ほど残っていたペットボトルの水を飲み干して、ふうと息をつく。

「もう寝ようかな」

そうつぶやくと、キングサイズのベッドの端にちょこんと腰掛けた。遙に背中を向けているので表情まではわからない。ただ、気のせいかもしれないがその背中が緊張しているように見えた。

「僕はシャワーを浴びてくるよ」

遙はノートパソコンを閉じて意識的に普段どおりの声を出した。着替えの入った鞆を持って立ち上がるが、彼女は同じ姿勢で座ったまま振り向きもしなかった。

「七海は寝てていいから」

「うん……おやすみ」

ようやくこちらを向いたその顔には、随分ときこちない笑みが浮かんでいた。完全には信用されていないのかもしれない。そう思いながらも、おくびにも出さずにおやすみと微笑み返し、浴室に入って扉を閉めた。

シャワーを浴びて戻ったときには、すでに部屋の明かりが落とされていた。

それでもスタンドライトの薄明かりがついているので支障はない。キングサイズのベッドの端が控えめに盛り上がり、七海が口元まで上掛けをかぶって寝息を立てているのがわかる。

ここまで端に寄らなくても十分距離はとれるのに——遙は思わず苦笑する。やはり完全には信用されていないのだろう。もうすこしゆったりと寝てほしかったが、元凶である遙が勝手に移動させるわけにもいかない。

おやすみ——。

心の中でそう声を掛けると反対側からベッドに潜り込んだ。結局、七海と同じように端に体を横たえてしまう。ひとつのベッドで寝ているのに、ぬくもりを感じるどころか横顔を見ることさえできなかった。

「んー、いいお天気！」

タラップを降りるなり、七海は大きく伸びをして抜けるような青空を仰いだ。

人口約二千人という小さな島にしては思いのほか活気があった。乗船客が多いので、その客を迎えにくる宿の従業員やツアーの係員も多い。ほかにも飲食店や土産店の宣伝をしている人たちが集まっていた。

十年ほど前に遙が来たときはもっと閑散として寂れた印象だった。それだけ観光客が戻ったということだ。客足が途絶える原因となった小笠原沖フェリー事故から三十数年、島民たちが努力を続けた結果だろう。

遙たちの宿は港からほど近いところがあるので迎えはない。地図を見ながら徒歩で向かうとすぐに着いた。チェックイン時間前なので荷物だけ預けて、併設されたカフェのテラス席で昼食をとった。

午後からは予約したツアーに出かけた。小笠原の自然や歴史をガイドに解説してもらいながら、島をめぐるというものだ。ガイドが丁寧で親しみやすかったこともあり、思いのほか楽しめた。

そのあとは寄り道せずに宿に戻ってチェックインする。サーファーズハウスを思わせるハワイアンな雰囲気建物だ。一階がテラス席のあるレストラン兼カフェで、二階が客室になっている。

「七海はそっちね。僕はここ」

「うん」

二人の客室は隣り合っていた。

七海はさっそく渡した鍵で扉を開けるが、中に入ろうとしたところで動きを止め、怪訝に振り返った。

「ねえ、なんかベッドが二つあるんだけど……」

「ああ、ここにはシングル部屋がないらしくてね。ツインを二つとったんだ。僕のほうにもベッドが二つあるはずだよ」

遙も扉を開いて中を見せた。赤みがかかった陽射しが差し込む開放的な部屋に、ベッドが二つ並んでいる。それで状況は理解したようだが、納得はできなかつたのか微妙な面持ちになる。

「なんか、もったいないね」

「一部屋でよかった？」

「いまさらって感じもする」

船では同じ部屋どころか同じベッドで寝たのだから、確かにいまさら感は否めない。だがリラックスして休むには別々のほうがいだろう。どのみちもうチェックインをすませてしまったのだから、それこそいまさらだ。

「寂しかったらこっちに来てもいいけど」

「さっ……寂しくなんかないし！」

七海はあわてて言い返し、逃げるように自分の部屋へ駆け込んでいった。

その場にひとり残された遙はうっすらと苦笑し、隣の部屋で荷物を置くような物音を聞きながら、静かに扉を閉めた。

荷物を置いたあと、七海を誘って一階のレストランに降りた。

夜は一般向けの営業をせず、予約した宿泊客のために夕食を提供しているらしい。地元の素材を使った本格的な料理と謳っていたので、半信半疑ながらも今日の夜だけ予約してみたのだ。

ウェブサイトにも料理の写真は載っていなかったため、どういうものかはわからなかったが、出されたのは新鮮な海の幸を使った創作和食だった。趣向を凝らした見た目も美しい料理がテーブルに並べられた。

食べてみると、基本がしっかりしていて奇をてらった感じはしない。本格的というのも嘘ではないようだ。七海も最初こそ見たことのない料理を警戒していたが、食べるとすぐに顔がほころんだ。

「あー、おなかいっぱい！」

食事を終えて二階に上がりながら、七海は満足げに声を上げた。

それぞれ一品の量は少ないが品数が多いのだ。あまり食べたつもりはないのに、いつのまにか満腹になる。最後のほうはすこし苦しいくらいだったが、それでも二人とも残さず完食した。

「じゃあ、おやすみ」

隣り合ったそれぞれの客室に戻ろうとしたとき、七海にそう声を掛けられた。ゆっくりと食事をしていたとはいえ、まだ夜九時にもなっていないはずだ。確かに、このあとには何も予定を入れていなかったが――。

「もう寝るの？」

「うん、あしたに備えて」

「そうだね……おやすみ」

「うん、おやすみ」

七海は笑顔を返し、鍵を開けて部屋へ入っていった。

せっかくなので散歩でもしようと思っていたが、疲れているところを無理に連れ出すわけにはいかない。まだ明日も明後日もあるのだから焦らなくてもいいだろう。そう自分を納得させると、煌々と蛍光灯がともる下でノートパソコンを取り出した。

「わっ、すごい！！」

翌日、小型船で沖に出てしばらく走るとイルカの群れが見えた。それも結構近い。晴れわたった青い空に白い雲、透明度の高い海を元気に泳ぎまわる本物のイルカ――七海は目をキラキラと輝かせている。

同じ船には、遥たちのほかに若い女性の三人グループと男女カップルがいた。インストラクターの教えを受けながら、順に海に入っていく。ウェットスーツを着ているのでさほど冷たさは感じない。

七海と一緒にそっとイルカに近づく。

そう簡単に近づけはしないだろうと思っていたのに、すぐそばまで行っても逃げなかった。キラキラと光る水面を見上げると、そこを横切るようにイルカが泳いでいく――まるで写真のような光景だ。

ただ、写真では感じられない確かな実感がここにはあった。果てが見えない海中に、意外と大きなイルカ。水槽を見ているのではなく自分も同じ海にいるのだ。触れずとも水流などですぐそばを泳いでいることがわかる。

隣の七海がはしゃいでいることは動きから伝わってきた。長くはない遊泳のあと船に戻ると、表情を覆い隠していたマスクとシュノーケルを外して、パツとはじけるような笑顔を見せる。

「海でイルカと泳げるなんて夢みたい」

「楽しんでくれてよかった」

「ありがとう、連れてきてくれて」

無邪気に声はずませる彼女の髪からは海水が滴り、太陽の光を受けてキラキラと輝く。その

まぶしさに、遥はうっすらと目を細めてやわらかく微笑み返した。

「夜は外に行こうと思ってるんだけど、行けそう？」

「全然平気」

ドルフィンスイムの小型船を下りて、宿に向かう道すがら尋ねてみたところ、七海は元気いっぱいにそう答えてくれた。さすがに疲れたのではないかと心配していたが、この様子なら大丈夫だろう。

宿に着くと荷物を置いてすぐにシャワーを浴びた。ウェットスーツを着ていても頭は海水につかるし、船の簡易シャワーだけでは落としきれないので、きちんと洗ってさっぱりしたかったのだ。

ふう——。

ベッドに腰掛け、ぬるいペットボトルの水を飲んで息をつく。

さきほど七海と楽しい時間を過ごしたからか、ひとりの時間が無性に寂しい。仕事をする気にもなれず、そのまま仰向けに倒れてぼんやりと天井を眺め、隣の部屋にいるであろう七海に思いを馳せた。

日が沈みかけたころ、予約した近くの魚料理店に出かけた。

ここでは一品料理をいろいろと頼んで分け合った。七海はコースより自分でひとつずつ選ぶのが好きなのだ。遥としても、二人でメニューを見ながらあれこれ話し合うのはとても楽しい。

頼んだものは、煮魚、焼き魚、島ずし、天ぷらなどの定番メニューである。どれも素材そのものがよく活かされていて驚くほどおいしかった。素材が良くても料理人の腕が良くなければこうはいかないだろう。

「今日もおなかいっぱい！」

店を出ると、もうすっかり夜の帷が降りていた。

控えめな街灯と店明かりに照らされた路地を二人並んで歩く。ときどき観光客らしき人たちとすれ違うくらいで、それほど人通りは多くない。飲食店の多く集まるところからすこし外れているからだろう。

「七海、上を見てみて」

「上？」

真上に向けた人差し指につられるように、七海は顔を上げる。

「わあ……！」

電線の向こうに見えるのは宝石を散りばめたような星空だ。空気がきれいだからか、明かりが少ないからか、都心とは比べものにならないくらい数多の星が見えている。

「もっときれいに見えるところへ行こう」

「うん」

海辺に出ると、あたり一面に降るような星空が広がっていた。

周囲には同じ目的と思われる人たちがちらほらといた。望遠鏡を用意して星空の解説をしているガイドもいる。ただ、星明かりしかないようなところなので、すこし離れるとほとんど黒い人影にしか見えない。

しかし七海は周囲には目もくれずにひたすら空を仰いでいた。そのまま砂浜の上をふらふら歩きながら、まるで息をするのも忘れたかのように、ぐるりと空全体に視線をめぐらせていく。

「天の川って本当にあるんだ……」

視線の先には肉眼でもはっきりとわかる星々の集まりがあった。ところどころ蛇行して川の流れのように見える。存在は知っていても、自分の目で見られるとは思っていなかったのだろう。

「座ろうか」

「うん」

遙がハンカチを出すより早く、七海はその場に腰を下ろして仰向けに寝転がった。砂が乾いているのでさほど汚れはしないだろう。遙も同じように彼女の隣に並んで寝転がった。

ザザーン……。

波の音を聞きながら、まるでプラネタリウムのような視界一面の星空を眺める。もちろんスケールや美しさは比べものにならない。まるで吸い込まれていきそうな、あるいは落ちてしまいそうな、そんな感覚に陥る。

「ねえ、七海」

「ん……」

星空に心を奪われているのか、七海は返事ともいえないようなかすかな反応を返す。すくなくとも聞こえていないわけではないのだろう。遙は空のほうを向いたままうっすらと表情を緩めると、静かに言葉を継いだ。

「小笠原は、僕にとって因縁の場所なんだ」

「……………？」

隣に目を向けると、七海が仰向けのまますこしだけこちらに顔を向けていた。その漆黒の瞳はまるで続きを促しているかのようだ。遙はゆっくりと空のほうに視線を戻して息をついた。

「昔、この近くの海で小笠原への定期船が事故に遭ってさ。そこに結婚するまえの両親が乗っていたんだ。何百人もの乗員乗客のなかで生き残ったのは二人だけだった」

七海は黙って耳を傾けている。彼女にこの話をするのは初めてだが、両親がフェリー事故の生き残りということは知られた話なので、もしかしたらどこかで聞いていたのかもしれない。

「表向きは落雷による海難事故ということになってたけど、そうじゃないことは現場にいた両親にはわかっていた。だから二人は事故の謎を解明しようと研究にのめり込んだ。そのためなら倫理観も無視してどんなことでもした。結果、僕と滯は実験体として生み出され、メルローズは実験体として拉致された」

「ちょっと待って、実験体って……えっ……遙の両親……？」

七海は体を起こし、ひどく混乱した様子を見せている。

メルローズが拉致されていたことは武蔵に聞いているはずだが、その目的や、遙の両親の仕業

ということまでは知らなかったのだろう。ましてや遥の生い立ちなど知っているわけがない。

「僕や滯はそんな自覚もなく普通に暮らしていたから、心配はいらないよ。メルももう大丈夫。ただ国の機密事項だからこれ以上のことは言えないし、七海も絶対に口外しないでほしい」

「うん……」

一連の事件において、七海もまったくの部外者とはいえない。

武蔵は行方不明のメルローズを探しに日本に侵入して公安に捕らえられたが、その監視係を務めていた七海の父親が自らの立場を利用して逃亡を手助けし、同僚に刺殺されている。

機密事項の一部となっているその事実についてはすでに七海も知っているし、関連する事実についても知る権利はあるだろう。ただ、遥の勝手な判断でしかないのであまり詳しくは話せない。

七海はいまだにどうすればいいかわからないといった様子だ。上半身を起こして手をついたまま、同情、困惑、恐怖など複雑な感情をにじませながら、おろおろと目を泳がせている。

「星を観ようよ」

遥が微笑んでポンポンと隣を叩くと、彼女は戸惑いつつも仰向けになり星空に目を向けた。その横顔には隠しきれない緊張がにじんでいる。星を映した漆黒の瞳もこころなしか揺れているように見えた。

遥は目を細めてゆっくりと空に向き直る。

「そういうわけで父親は後継者から外されているんだ。だから僕が一刻も早くじいさんの後を継げる人間にならないといけないし、結婚して跡取りを作らないといけない。周囲からはそういうプレッシャーを掛けられている」

ザザーン——。

七海は身じろぎひとつせず、ただじっと口をつぐんで続きを待っている。その息の詰まる雰囲気はもちろん、波の音にさえ煽られているように感じ、遥の緊張も次第に高まっていく。

「僕は幼いころから橘の後継者として生きてきた。十年ほど前、橘の血を引いていないことがわかったけれど、それでもじいさんは僕を変わらず家族として扱ってくれたし、後継者にすると言ってくれた」

本来、血筋を重んじる橘家ではあり得ないことだ。

もともと遥自身が後継者になりたいと望んだことはない。本家の長男に生まれつき、そういうものとして無感情に受け入れてきただけである。後継者を外されることも粛々と受け入れるつもりだった。

だが剛三はそうしなかった。本家筋ではほかに適切な人物がいなかったのも、仕方なく目をつむっただけかもしれない。それでも家族として認められているように感じて、嬉しかったのだ。

「だから僕はその恩義に報いなければならない。結婚して次の後継者を作るのも求められる役割のひとつだ。このままだと近いうちに見合いをすることになる。でも、僕はきっとこれからも七海しか好きになれない」

未来のことなので断言はできないが、いまのところ七海しか好きになれる気がしない。ほかの

誰にも心を奪われたことがないのだ。七海と出会うまえも、七海と別れてからもずっと——。

「だからお願いだ。もう一度だけ僕と付き合うことを考えてほしい」

これが最後の告白になる。

そう意識すると、波の音が聞こえなくなるくらい鼓動がうるさくなった。じわじわと全身から汗が噴き出してくるのを感じながら、判決を待つ被告人のような気持ちで息を詰める。

「う……ぐっ……」

隣から呻くような声が聞こえた。

驚いて振り向いた瞬間、彼女は腕で目元全体を覆い隠してしまった。しかし唇を結んだまましゃくり上げているのはわかる。泣くのを必死にこらえようとしているようだが、こらえきれていない。

「うっ……僕の答えは変わらないって、いったい何回言ったらわかるんだよ。断るのだからつらいんだぞ。遥なんかとっとと結婚してしまえばいいんだ。そしたら僕だってこんな思いしなくてすむし」

「ごめん……」

彼女の涙に、吐露に、鈍器で頭を殴られたような衝撃を受けた。

自分の事情ばかりで、彼女の事情を思いやることができていなかった。言われてみれば当然である。その気もない相手から何度も告白されるのは迷惑でしかないし、断るのも負担だろう。

そのうえ相手は保護者だ。関わりを絶つことも無下にすることもできない。強要しなくても強要になりうる立場だとわかっていたはずなのに、親しくするうちに頭から抜け落ちてしまった。

しゃくるような彼女の嗚咽はしばらく続いたが、そのうち疲れたように小さくなり、やがて波の音だけが聞こえるようになった。

「泣いちゃってごめん」

「いや……」

彼女はきまり悪さをごまかすように笑っていた。睫毛や瞳が濡れているのは星明かりでわかるが、すぐに乾くだろう。言いたいことを言って、泣くだけ泣いて、すっきりしたように見える。

終わったんだ——。

そのときすっと納得した。

潮風が冷たく、砂も冷たく、急に体が冷えていたことを自覚する。しかしそんな素振りはずこしも見せず、仰向けに寝転がったまま彼女に横目を流し、いつものようにやわらかく笑ってみせた。

第27話 堰を切ったように

『ペアリングが偽装だってバレてるみたいだ』

平日の昼休み、近くの和食ダイニングに向かおうと会社のビルを出たところで、富田から電話がかかってきた。その声は深刻そうで冗談には聞こえない。遥は通行の妨げにならないよう隅に移動して足を止める。

「どういうこと？」

『午前中、知らない女が会社まで乗り込んできて、いきなり俺に平手打ちして泣きわめいてな。そのペアリング偽装なんですってね、遥さんは同性愛者なんかじゃなかった、よくもわたしを騙してくれたわね、ほかの人と結婚したからもう手遅れよ、とか何とか』

「どんな人？」

『見たところ俺らと同じくらいの年齢だと思う。どうやら運転手付きの車で来てたらしくて、身なりも良かったし、いいところのお嬢さんって感じに見えた。あ、でも結婚してるんだよな。名前を聞いとけばよかったんだけど……悪い』

「気にしないで」

おそらく遥との結婚を狙っていた令嬢のひとりだ。遥は同性愛者だからとあきらめてほかの人と結婚したのに、それが違ふとわかり、協力した富田に八つ当たりしたというところだろう。

これだけの情報があれば、彼女が誰なのかは調べればわかるかもしれない。ただ、これ一回きりのことなら突き止める必要もないだろう。下手に関わるとなおさらやっかいなことになりかねない。

『しかし、なんでバレたんだろうな』

そう、問題はなぜ偽装が露見したのかということだ。

いままでも疑われることは少なくなかったが、決定的な証拠はなく、二人も答えを濁しているのでグレーなままである。ただ、どちらにも女性の影がないということで、かなりの信憑性をもたれているのが現状だ。

「濡あたりが口をすべらせたのかもね」

『あー……』

偽装であることを知っている人間はそう多くない。

口をすべらせるとすれば双子の妹である濡くらいだろう。基本的に口止めをすれば守ってくれるし、頭も悪くないが、かなりそそっかしいところがあるのだ。あとで本人に確かめたほうがいいかもしれない。

「ほかの人にもバレてるかもしれないから、しばらくは気をつけて。富田の手に追えないようならこっちで対処する。また何かあったらいつでも連絡して」

『ああ、おまえも気をつけろよ』

遥との結婚を目的に近づいてくる女性はいらぬかもしれないので、そういう意味ではもちろん気をつけなければならないが、富田のように直接的な危害を加えられる可能性は低いと思う。

「そういえば会社のほうは大丈夫だったの？」

『おまえの名前は出さないから心配するな』

「じゃなくて、問題にならないかってこと」

『ま、大丈夫だろう』

富田は何でもないかのように受け流した。

会社でそんな騒ぎを起こせば、処分はされなくても説明は求められるはずだ。好奇の目にさらされることも避けられない。それなのに文句のひとつも言わないのだから、なおさら申し訳ない気持ちになる。

「面倒なことに巻き込んで本当にごめん」

『いって。もう報酬はもらってるしな』

「報酬？」

『あ……俺、そろそろ昼メシ行かないと』

「うん、また電話する」

『じゃあな』

どこか焦ったような声を最後に通話が切れた。

一瞬、報酬というのが何なのかわからなかったが、おそらく一年半ほどまえのキスのことだろう。滯の身代わりとしてそれを求められていると勘違いし、不意打ちでしてしまったのだ。

しかも富田にとってはあれが初めてだった可能性がある。当時はかなり酔っていたのでそこまで考えが至らず、翌日になって気付いたが、彼がどう思っているのかは確かめられずにいた。

しかし報酬と表現していたことから考えると、きっとそれなりの価値は見いだしているのだろう。そのことにいまさらながら安堵を覚えた。滯への恋心をだいぶこじらせていることは心配だが――。

そっと溜息をつく、手にしたままだった携帯電話で滯にかけ、呼び出し音を聞きながら彼女が出るのを待った。

『いままで一度だって身内以外に話したことないよ。訊かれてもわからないって答えてるし、そもそも最近は何も訊かれてもないし。大学のときみたいに面識ない人に突撃されることもないから』

ペアリング偽装の件を誰かに話さなかったかと尋ねると、滯はこう答えた。そそっかしいが記憶力は良いので信じていいだろう。確かに、研究所にまで突撃する輩がそうそういるとは思えない。

『もしかしてバレたの？』

「多分ね。富田が会社に乗りに来た女に殴られたって」

『うわあ……じゃあ、七海ちゃんも気をつけてあげないと』

「一応ね」

富田が偽装なら、七海が本命と思われる可能性もないわけではない。かつて一部でそういう疑惑はあったのだ。滯が否定してくれたおかげで下火になったものの、今後どうなるかはわからない。

『あれ、七海ちゃんとはまだよりを戻せてないんだっけ？』

「ああ……まだっていうか、もう付き合うことはないけど」

『え、あきらめたってこと？』

「しつこくしすぎたせいで泣かれたからね」

『何それ……』

電話越しでもわかる不満そうな声。彼女の思いきり眉をひそめた顔が目には浮かぶ。

『七海ちゃん、絶対に遥のことが好きだと思うんだけどなあ』

「どっちにしても期限まであと一週間だし、どうにもならないよ」

『うーん……もういっそ押し倒しちゃえばいいんじゃない？』

「は？」

思わず耳を疑った。

そんな尊厳を踏みにじることをして上手くいくわけがない。保護者として友人としてそばにいることを許されているのに、七海本人の意思を蔑ろにして無理やり行為に及ぶなど、信頼を裏切ることには他ならない。だいたいそのつらさは滯自身がわかっているはずなのに——。

『最後まであきらめちゃダメだからね』

「……切るよ」

『うん、頑張って！』

その能天気な声にますます苛立ち、思いきり眉をひそめながら通話を切った。意識的にゆっくりと呼吸をして気持ちを鎮めると、携帯電話を折りたたんでスーツの内ポケットにしまう。

しかし——滯でないとすれば、どこから偽装の件が漏れたのだろう。

春頃から大伯母がひそかに見合い相手を見繕っているらしいので、そのうわさ話を聞きつけての憶測かもしれないが、ただの憶測だけであそこまでの行動に出るのは不自然な気もする。

ちなみに大伯母はペアリングの偽装については知らない。指輪には気付いているだろうが、恋人がいても婚約までに別れれば良いと考えているので、いまのところあまり気にしていないようだ。

とりあえず富田と七海には護衛をつけておこう。何も起こらないかもしれないが念のためだ。正式に婚約者が決まるまでは——遥は急ぎ足で和食ダイニングへ向かいながら、無意識に眉を寄せた。

その日の夕方から富田と七海に護衛をつけた。

どちらも本人には内緒なので、ある程度の距離をおいて見守ることになる。富田のほうはひとまず通勤中だけにしたが、七海のほうは通学中に加えて、大学内でも可能なかぎり見守るよう命じた。

6月28日（木）

「あなた、橘の里子の坂崎七海さんね」

大学を出たところで、七海はワンピースを着た細身の女性に呼び止められた。その声には自信に満ちた高圧的な響きがある。実際かなりの美人で、まるでモデルのようにメイクされていて爪先まで隙がない。

七海は眉をひそめ、警戒心を露わにして彼女を見据えた。

「そうですけど……」

「すこしお時間をいただけないかしら。話があるの」

「そのまえに自分から名乗るのが礼儀だと思うけど」

「八重樫由紀。八重樫グループってご存知？」

彼女は勝ち誇ったような笑みを浮かべて言う。その名を出しさえすれば何でも思いどおりになると思っているのだろう。実際、誰でも知っているくらい有名な財閥系の企業グループである。

しかし七海はそんなものに萎縮することも媚びることもない。ただその話を聞いて何かを察したらしく、表情を引きしめてすこし考える素振りを見せると、挑むような視線を由紀に送る。

「グランドハリントン東京のラウンジでなら話を聞きます」

「ええ、それで構いませんわ」

由紀は余裕たっぷりに艶然と微笑んだ。

「坂崎さんもご一緒にどうぞ」

そう言い、ワンピースの裾をひらめかせて軽やかに身を翻す。彼女の向かうさきには黒塗りの大型セダンが停まっており、白い手袋をした運転手が後部座席の扉を開けて、恭しく頭を下げていた。

「僕はタクシーで行きます」

七海はきっぱりとそう告げると、大学のまえで客待ちしていたタクシーをつかまえて、さほど遠くない場所にある約束のホテルに向かった。

「遥さんと別れていただきたいの」

適度にざわめいている五つ星ホテルのラウンジで、由紀はそう切り出した。

二人の前にはまだ口をつけていないアイスティーが置かれている。七海は無表情のままグラスに手を伸ばしてストローで半分ほど飲むと、あらためて正面の由紀に冷ややかな目を向ける。

「どうして？」

「あなたのせいで遥さんが結婚を渋っているそうなの。遥さんはお優しい方だから、気まぐれに手をつけたあなたを無下にできないんでしょうけど、あなたが遥さんにふさわしくないことは自分でもおわかりでしょう？ 遥さんのことを思うならあなたが自ら身を引くべきだわ」

由紀は華やかなローズ色の唇に悠然と笑みをのせた。

それでも七海は表情を崩さず、淡々と答える。

「僕がふさわしくないっていうのは否定しないけど、その要望には応えられない。だって付き合ってもないのに別れられないでしょ？ 僕はただ里子としてお世話になってるだけだから」

由紀は整えられた栗色の細眉をひそめた。

「そんな見え透いた嘘なんかにごまかされないわよ」

「別に信じなくていいけど事実だし。遥に聞けば？」

「待ちなさい！」

もう用はないとばかりに席を立った七海に、鋭い一声を浴びせた。

しかし七海は動じることなく黒のリュックを肩に掛ける。

「そうそう、遥ってコソコソと陰険なことをする人は嫌いだから、あなたとの結婚はないと思うよ。今日のことは全部そのまま遥に報告するつもりだし」

バシャッ——。

カッと怒りを露わにした由紀が、一口も飲んでいなかったアイスティーを七海の顔めがけてぶちまけた。顔だけでなく胸元や腕までぐっしょりと濡れ、七海は呆然とする。足元には落ちた氷がいくつも転がっていた。

「そのとき近くにいた親切なお姉さんが、ホテルの人に言って場所を借りてくれて、タオルや着替えも用意してくれたんだ。ほんと助かったよ」

七海から聞いた話は、あらかじめ護衛から受けていた報告と同内容だった。

ちなみにこの親切なお姉さんが護衛の一人である。七海を守れなかった不手際を謝罪していたが、怪我もなかったことだし責任を問うつもりはない。そばにいられないため対応が難しいことは承知している。

しかし今の七海はほとんど危機感を持っていないようだ。今回はアイスティーを掛けられただけなのでまだよかったが、怪我をさせられる危険性があるということを、わかっていないのかもしれない。

「七海、知らない人は無視すればいいからね」

「でも気になるんだもん」

彼女は悪びれもせず言い返す。

「一応、話をする場所は人目のあるところを選んだし、移動も二人きりにならないようにしたし、これでもちゃんと考えて行動してるつもりだよ」

「まあ、そこは評価するけど」

護身術だけでなく危機回避についても教えてきたが、とっさに実践するのはなかなか難しい。これならひとまず及第点だといえる。しかしながらそれを素直に褒められる状況ではない。

「好奇心に負けて必要もない話に応じるのは感心しない。百歩譲っておとなしく話を聞くだけならいいとしても、煽るのはやめてほしい。帰りぎわの捨て台詞はいらなかったよね」

「だっていいかげん頭に来てたしさ……気をつけるけど……」

七海はきまり悪そうに口をとがらせる。

身を案じての苦言であることは理解しているのだろう。彼女の負けず嫌いなところを愛おしく思っているし、捨て台詞も痛快ではあったが、やはり危ないことはなるべく避けてもらいたいのだ。

遥は湯気の立たなくなったハーブティーを飲んで息をついた。七海もつられるように残り少ないハーブティーを飲み、クッキーを口に運ぶと、どこか遠慮がちにこちらを窺いながら声をかけ

てくる。

「ねえ、遥……あんなのと結婚するの？」

「まだ誰とも見合いさえしてないよ。でも七海の言ったようにあの子はないね。何度か顔を合わせたことはあるけど、自信家でチャホヤされてないと気がすまないタイプで、もともといい印象はなかったから」

見合い相手が決まっているかどうかは知らないが、たとえその中に八重樫由紀がいたとしても決して選ばない。見合いもしたくない。以前から遥に色目を使っていたが嫌悪感しかなかった。

おそらく今回のことは彼女個人の暴走に違いない。八重樫グループとしてなら他にいくらでも利口な手段があるだろう。間違っても、わざわざ愚かな娘を差し向けたりはしないはずだ。

「よかった。いくらなんでもあれはひどいなって思ってたんだ。見合いだけで本性を見抜くのは難しいかもしれないけど、あんま変な女にひっかかるなよ」

「……気をつけるよ」

軽く笑みさえ浮かべながら平然とそんな心配をする七海に、遥は静かに微笑み返す。それなら七海が結婚してくれればいいんだ——喉まで出かかったその言葉をどうにか飲み込みながら。

6月29日（金）

「坂崎七海さんですね」

大学を出たところで、七海はスーツを身につけた男性に呼び止められた。年のころは四十前後だろうか。落ち着いていながら凜とした佇まいは、いかにも仕事ができそうな理知的な雰囲気醸し出している。

七海は怪訝に一瞥して通り過ぎようとしたが、男性の動きのほうがそれよりすこしだけ早かった。まるで足を封じるかのようにずっと彼女の前に進み出ると、丁寧な所作で名刺を差し出す。

「弁護士の堂島と申します」

「何の用？」

七海は仏頂面で名刺を受け取りながら尋ねる。その目はスーツの襟についた弁護士バッジを確認していた。確かにひまわりを模した小さなバッジがついている。金色でなく銀色なのはメッキが剥がれたからだろう。

「場所を変えましょう」

堂島はそばで待機している黒いセダンに促そうとするが、七海は身を守るように後ずさった。それでも強気なまなざしで彼を睨んでいる。

「グランドハリントン東京のラウンジでなら話を聞く」

「……まあいいでしょう」

堂島は鼻で笑いながらも七海の条件を飲んだ。

前日と同じように同乗は断り、七海はひとりタクシーをつかまえてホテルに向かった。

「橘遥さんと別れていただきたい」

前日と同じ開放的なラウンジで向かい合って座り、頼んだホットコーヒーが運ばれてくると、堂島はいきなり何の前置きもなくそう切り出した。七海は驚きもせず胡乱な視線を送る。

「弁護士ってそんなこともするんだ……依頼人は誰？」

「それはお話しできません」

依頼人に身元を伏せるよう頼まれているのだろう。こうなると弁護士はよほどのことがないかぎり口を割らない。七海もそのあたりのことはわかっているらしく、しつこく問い詰めようとしなかった。

堂島は眉ひとつ動かすことなく本題に戻る。

「別れるだけでなく、完全に縁を絶って二度と会わないでいただきたい。転居先や各種手続きなどはすべて私がお世話をいたします。もちろん相応の謝礼もご用意させていただきました」

そう言うと、黒のダレスバッグから帯付きの札束を取り出し、テーブルの中央に二列に積み上げていった。当然のようにすべて一万円札である。

「一千万あります」

「やっす……」

七海はあきれたようにつぶやいた。

「こんなので動くわけないじゃん。金に目がくらまない女ならそもそも意味ないし、金に目がくらむ女なら一千万より御曹司を選ぶ。弁護士先生なんだからもうすこし頭を使ったら？」

その挑発に堂島はいささか面食らったようだ。しかしそれは一瞬のこと。弁護士としての闘争心に火がついたのか、うっすらと口元を上げ、よどみなく流れるように反論を唱え始める。

「坂崎さん、あなたが橘の御曹司と結婚できるなどと本気でお考えですか？ 亡くなられたご両親はともに孤児だったと聞きました。こう言っては何ですが、どこの馬の骨ともわからない娘を後継者の妻になどしないでしょ」

「結婚も何も付き合っただけでいいけどね」

「えっ」

それは交渉の前提条件を覆す発言だった。

依頼を受けただけの彼に真偽を判断する術はないはずだ。それでもほとんど動揺した様子を見せることなく、素早く思案をめぐらせると、気を取り直したようにずっと居住まいを正す。

「それが事実かどうかは問題ではありません。完全に縁を絶って二度と会わない、それさえ約束していただければ一千万は差し上げます。付き合っていないのなら受け取ったほうが得策かと思いますが」

七海は無言でホットコーヒーを一口飲み、ふうと息をつく。

「僕さ、それじゃ全然足りないくらいの借金があるんだよね。遥に。就職したら一生かけて返すって約束してるから絶縁は無理。まさか弁護士先生が借金バックレろなんて言わないよな」

堂島の眉がピクリと動いた。それでも表面上の冷静さは消えていない。

「では、もう一千万ご用意しましょう」

「だから全然足りないんだってば」

「……少々、お時間をいただけますか」

彼は携帯電話を取り出してどこかに掛けようとする。おそらく依頼人と相談するつもりだろう。七海はそれを待つことなく椅子から立った。

「無駄だよ。いくら積まれたって受け取らない」

「お待ちください！」

堂島は携帯電話を手にしたまま、あわてて七海の行く手を塞ぐように立ちはだかる。それでも七海に動揺はなかった。黒のリュックを背負い、刺すような冷たいまなざしを堂島に向ける。

「弁護士先生なら強要できないってことくらいわかるよね。あ、コーヒーぶっかけたら暴行罪だから」

そう言うと、棒立ちになった堂島を軽やかによけてラウンジを出ていった。

「今日はぶっかけられなくてよかったよ」

無邪気にそんなことを言う七海を見て、遥は嘆息した。

今日もあらかじめ護衛から報告を受けていたので、何があったかは知っていたが、七海にはまるっきり反省している様子が窺えない。どう言い聞かせればいいのか考えるだけで頭痛がする。

「煽るのはやめてって言ったよね」

「それは……ごめん……」

「気持ちはわかるんだけどさ」

正直、報告を聞いて胸のすく思いもあった。金を積まれても少しも揺るがず、相手が誰であろうと堂々と渡り合い、弁護士でさえやり込めてしまう、そんな七海をあらためて好きだと思った。

ただ、それで危険にさらされる事態になっては困る。弁護士ならそうそう暴力に訴えはしないだろうが、今後どういう人物が出てくるかわからない以上、なるべく相手を刺激しないでほしいのだ。

ティーテーブルに置いた弁護士の名刺に目を落とす。

これだけで依頼人を突き止めるのは難しいかもしれない。素性を隠しているくらいだから、顧問弁護士を差し向けたりはしないだろう。おそらく別の弁護士にこの件のみを依頼しているはずだ。

遥と七海が付き合っていないと聞いて驚いていたらしいので、八重樫とは別口だと思うが、揃いも揃ってなぜそんな事実誤認をしていたのかが解せない。よほど巧妙なデマを流されているのだろうか。

「七海、しばらく護衛をつけさせてほしい」

「え、護衛って……そんな物々しいの嫌だよ」

「わがまま言ってる場合じゃないよ」

すでにひそかには護衛をつけているものの、本人に気付かれないよう護るには限界がある。離

れているためとっさの事態には対応できないのだ。昨日アイステイーを掛けられたときのように。

「今度はいきなり襲ってくるかもしれない」

「そんなの言い出したらキリないじゃん」

「だから護衛をつけたって言ってるんだ」

「こんなときのための護身術だろ」

七海には橘に来るまえから継続的に武術を教えている。主に護身術だ。まさにこういうときのためである。教えたことは一通りできるようになっているので、自分の身くらいは守れるという自負があるのだろう。

「だけど相手のほうが腕が立つこともある」

「そんなに心配ならとっとと結婚しろよ」

そう苛立ったように言い放たれ、遥は息をするのも忘れて呆然とした。確かに他の女性と結婚してしまえば、いや婚約さえしてしまえば、七海が恋人と誤解されることもなくなるが――。

七海は華奢な背もたれにそっと身を預けて、溜息をついた。

「弁護士先生の言うように、僕がいなくなったほうがいいのかもね。付き合っただけじゃないけど、僕のせいで遥が結婚を渋ってたのは事実なんだろう。結婚するのに元カノがひとつ屋根の下にいるのもおかしいし」

「駄目だ！」

焦るあまり、遥は思わず前のめりで声を荒げた。

それでも彼女はまったく動じていなかった。表情をほとんど変えずにそれを受け止めると、そのまなざしにかすかな侮蔑の色をにじませつつ、遥を見据える。

「でも、成人すれば僕の意思で決められる」

「……………」

七海が本気で出ていこうとすれば止められない、そう思い知らされた。

認めたくないが彼女の言うことはもっともなのだ。かつての恋人をいまも想いつづけているだけでなく、里子であることを隠れ蓑にそばに置こうとするのは、結婚相手に対して不誠実といえる。たとえ二人のあいだに何も無いとしても。

「安心して。黙って行方不明になったりしないから。お金も返さなきゃいけないし、出ていって決めたらちゃんと話すよ。剛三さんにも遥にも。具体的なことはまだ何も考えてないしさ」

七海はそう告げてニコッと微笑んだ。小さなクッキーをひとつ口に放り込むと、半分ほど残っていたハーブティーを一気に飲み干す。

「じゃあね」

軽やかに席を立ったその背中を、遥はただ黙って見送ることしかできなかった。

『申し訳ありません、七海さんが車で連れ去られました』

それは七月二日、七海の誕生日前日のことだった。

本社での打ち合わせ中、遥のスマートフォンに七海の護衛から着信があった。この時間にメールでなく電話をよこすということは、おそらく緊急事態である。打ち合わせ相手である会長秘書に断ってから電話に出ると、開口一番、張りつめた声音で冒頭のように告げられたのだ。

彼から聞いたところによると、自宅からさほど離れていない閑静な住宅街の路地で、一瞬にして黒いバンに引きずり込まれたらしい。

護衛の二人はすぐに飛び出したが間に合わなかった。一人はどうにかリアウィングに飛びついたものの、角を曲がる時に振り落とされて重傷を負い、さきほど救急車を呼んだところだという。まだ楽観はできないが、意識がしっかりしているとのことで命の危険はなさそうだ。

「すぐ本家に向かってください。執事の櫻井に話を通しておくので、協力して七海のGPSを追ってもらえますか」

『了解しました』

徒歩でも十分とかからない場所だ。走ればもっと早く着くだろう。

すぐさま櫻井に電話し、この事態を端的に伝えておおまかに指示を出していく。彼はほとんど動揺を見せることなく的確に受け答えした。あの剛三に長年仕えてきた度胸と手腕は伊達ではない。

通話を切ると、そのスマートフォンで七海のGPSの位置を表示する。もし途中で荷物が捨てられていたら心配したが、いまのところは大丈夫なようだ。ちょうど車が走るくらいの速度でGPSが移動している。

「師匠……いえ、楠さん」

スマートフォンを握りしめたまま会長秘書に振り向き、思いつめた声で呼びかける。かつて保護者代理として遥の面倒を見ていた彼は、それだけで言わんとすることを察したらしく、真剣な顔で頷いた。

「事情はだいたいわかった。行って」

「ありがとうございます」

遥は早口で礼を述べると、そのままスマートフォンだけを手にして応接室を飛び出した。

「ん……う……」

七海が目覚めたのは、朽ちかけた廃工場のような場所だった。

高窓を見るかぎりまだ日は落ちていないようだ。襲撃された時点ですでに夕方に差しかかっていたはずなので、気を失っていた時間はそれほど長くない。せいぜい一時間といったところだろう。

視線をめぐらせ、古びたパイプベッドに寝かされていることを理解する。敷かれているシーツは薄汚い周囲と比べて不釣り合いに白い。右手には手錠が掛けられ、錆びの目立つ太いパイプ部分に繋がれていた。

体を起こそうと身をよじると背中にうっすらと鈍痛を感じた。おそらく拉致されるときにスタンガンを使われたのだろう。背中に固いものを押し当てられた直後に気を失ったのだ。護身術など使う間もなかった。

「お目覚めかな、お嬢ちゃん」

ニヤニヤと下卑た声が聞こえて振り向く。

隅で煙草を吸っていた男が、もう一人の男を従えて七海のほうへ悠然と歩き出した。途中で火のついた煙草をコンクリートの地面に捨て、ブーツで踏み消す。二人とも目出し帽をかぶっているので顔はよくわからない。

後ろの男がハンディカメラを構えた。前の男はそれを意識しつつホルスターから拳銃を抜くと、引き金に指をかけ、その銃口をバツと勢いよく七海の鼻先に突きつける。表情が一瞬にして凍りついた。

「悪く思うなよ。お嬢ちゃんには何の恨みもないが、百年の恋も冷めるくらいえげつなく犯して、その動画を撮ってこいって頼まれてんだ。おっと、撃たれたくなかったらおとなしくしてろよ。殺さなければ何をしてもいいって言われてるからな」

男は拳銃を突きつけたまま軽い口調でそう言うと、口もとを上げる。目出し帽の口まわりが開いている理由は十分に察せられた。七海は冷や汗をにじませながらも強気に反論する。

「バカじゃない？ 僕がそんな目に遭わされたなんて遥が知ったら、責任を感じてかえって僕から離れられなくなる。逆効果じゃん」

しかし男は鼻で笑った。小馬鹿にしたように銃口で七海の鼻先をつつく。

「あのな、俺らは金で雇われてるだけなんだよ。孫請けだから大本の依頼主が誰かも知らないし、目的も聞かされていない。お嬢ちゃんがどこの誰かも知らない。だが一度受けた依頼は確実にやり遂げる。この世界も信用第一でね」

そう嘯く声にはからかいの色が混じっていた。

「まあ、大金もらって女を犯せるなんて、こんなおいしい仕事はそうねえよなあ。これも信用があればこそだ」

七海はギリと歯を食いしばる。

「いいね。負けん気の強い女を力尽くで犯して、泣かせて、よがらせて、絶望させるのがたまらねえんだ。まさに俺にうってつけの仕事ってわけだ。正気を失うくらいの快楽に落としてやるよ」

男は愉悅に酔ったような声でそう言うと、後ろの男に拳銃を手渡した。

「しっかり脅しとけよ」

「おうよ」

彼は楽しげに返事をして、ハンディカメラを構えたまま反対の手で拳銃を握り、引き金に指をかけてまっすぐ七海に銃口を向けた。さきほどより距離があるものの脅すには十分だろう。

両手の空いた男は、堅牢な折りたたみナイフをポケットから取り出した。それをじっくりと見せつけるような手つきで開くと、高窓からの光を反射してぎらりと輝く刃を、七海の喉元に突きつける。

「死にたくなきゃ動くなよ」

そう告げると、素早くパイプベッドに上がって七海に跨がった。右手のナイフでシャツの合わせ目を力任せに開き、その下に着けていた機能性重視のスポーツブラも、舌打ちをして切り裂いていく。押さえつけられていた白い胸が解放されてふるりと揺れた。

「こりゃあ結構な上玉じゃねえか。思った以上に楽しめそうだな」

「……………」

七海は何も言わず、ただ真一文字に口をむすんで男を睨みつけていた。

だが、男にはそんな視線さえも興奮のスパイスにしかならない。舌なめずりしながらショートパンツとショーツを切り裂いていく。ハンディカメラを構えた男は興奮ぎみにちよろちよろと動きまわり、あますところなくおさめていった。

「いつまで耐えられるか楽しみだ」

「んっ」

いきなり胸の先端を口に含まれ、七海は唇を引きむすんだまま声を漏らした。

男は気をよくして巧みに舌を使いながら、もう片方の白いふくらみを揉みしだき、その先を指で觸る。胸だけでなくあらゆるところに吸い付き、舐めまわしていく。唇や口内も例外ではなかった。

「う……はっ、あ……あ……んっ」

白い肌がうっすらと上気してくると、七海は耐えきれずに声を漏らし始める。

男は勝ち誇ったようにいやらしい笑みを浮かべながら、さらに容赦なく攻め立てた。濡れた音が激しさを増していく。七海は身悶えし、手錠がパイプにぶつかりガチャガチャと音を立てた。

「ひ……あ……！」

かぼそい悲鳴とともに七海の身体はビクリと跳ねて弛緩した。涙の膜が張った目を虚空に向けたまま苦しげに息をする。男は満足げに舌なめずりしながら上体を起こし、彼女の膝裏から手を放した。

いつのまにかハンディカメラの男は片膝をベッドにつき、あからさまに興奮して身を乗り出していた。もう拳銃のことなど忘れていたのだろう。構えもせずただ持っているだけで銃口は下を向いている。

「へばるなよ、本番はこれからだ」

からかいまじりにそう言ったのは七海を觸っていた男だ。七海の脚のあいだを陣取ったまま、ずっと手放さなかったナイフを横に置き、自らのズボンに手を掛けて下ろそうとする。そのとき――。

ガツッ。

七海は腰を浮かして男の横っ面に膝蹴りをかました。間髪を入れず、倒れかけた男の首筋を反対側の脚で蹴り抜いてベッドから落とす。即座にナイフを拾い、啞然としていたハンディカメラ

の男の腿に突き立てた。

「ギャーッ！！！」

すぐにナイフを抜いてシートの上に投げ置き、悶絶する彼の右手に飛びついて拳銃をもぎ取った。安全装置を外し、右手首にかけられた手錠の鎖をピンと伸ばすと、そこに銃口をくっつけるようにして撃つ。反動で姿勢を崩してベッドに倒れ込んだものの、無事に鎖は切れていた。

「よくも……このアマ……」

ベッドから蹴り落とされた男がゆらりと立ち上がる。鼻血を手の甲で拭いながら憤怒にまみれた表情を見せるが、脳震盪を起こしたのか、なかなかまっすぐ立てずにふらふらとしていた。

七海はパイプベッドから軽やかに飛び降りると、男に向かってしっかりと両手で拳銃を構え――引き金を引いた。

パン……パン……。

時折、子供の声が聞こえる夕暮れどきの静かな住宅街に、異質な音が響いた。決して大きな音ではなかったが、遥は胸騒ぎがして音のほうに振り向く。隣の護衛も同じほうを見ていた。

遥は本社を飛び出したあと、櫻井たちとともに七海のスマートフォンのGPSを追ってここまで来た。郊外のコインパーキングに駐められた黒いバンを発見したものの、そこには七海のリュックが放置されていただけで、本人の姿はなかった。

サングラスの男が七海を横抱きにして車から降りたのは、コインパーキングの防犯カメラ映像で確認したが、その後どこに向かったかまではわからなかった。遥と護衛三人は二手に分かれて周辺の聞き込みに奔走した。

遥たちが異質な音を聞いたのはそのときだ。

視線の先には町工場のようなプレハブの建物があった。そこに七海がいるとは限らないが、すこしでも可能性があるなら確認すべきである。二人はどちらともなく目を見合わせて頷き、駆け出した。

そこは廃工場のようなようだった。社名の看板はひどく汚れ、建物は錆びて朽ちかけ、ガラスはあちこち割れ、長らく放置されていることが窺える。正面の大きなシャッターは閉まっていたが、その脇の扉は半開きになっていた。

「私が様子を見てきます。遥さんはここで待機をお願いします。三分以内に戻らなければ応援を呼んでください」

「わかった」

二人は扉に身を隠したまま声をひそめた。

さきほど聞こえた音が銃の発砲音ならかなり危険である。日本では護衛であっても民間人に銃の携帯は許可されていない。つまり、ほぼ丸腰で銃を持つ無法者と対峙することになるのだ。

唯一、携帯を許可されているのは特殊警戒棒だが、銃に対抗するにはあまりに無力である。それでも彼は怯まず、手にしていた特殊警戒棒を素早く振って伸ばし、身構えながら半開きの扉にそろりと近づいていく。

「止まれ！！」

突如、その扉がバンとはじかれて鋭い声が飛んだ。

七海だった。切り裂かれたシャツのみを身に着けた裸同然の格好で、正面の護衛を鋭く見据えながら両手で拳銃を構えている。右手首には鎖の切れた手錠らしきものが嵌められていた。

「七海！！」

目にした瞬間、遥は我を忘れて飛び出していた。

彼女はハッと息をのみ、そして全身から力が抜けたかのようにへたり込んだ。その体を遥はがむしゃらに抱きしめる。やわらかく、あたたかく、まぎれもなくここに存在しているのだと実感できた。

「ごめん、遅くなって」

「うん……」

彼女はほっとしたようにそう応じたものの、体は震えていた。

その身に起こったことを想像するだけで頭に血がのぼり、気持ちがぐちゃぐちゃになるが、彼女を支えるためにも自分は冷静でいなければならない。奥歯を食いしばり必死に激情を抑え込む。

まずは抱きしめたまま震える手から慎重に拳銃を取り上げる。その拳銃も手足も赤黒い血でべっとりと濡れていたが、彼女自身に傷はないようだ。よく見ると顔には無数の飛沫血痕が散っていた。

遥はそっと護衛を見上げて目配せする。

おそらくは彼も同じことを考えていたのだろう。緊張した面持ちで頷くと、伸ばした特殊警戒棒をしっかりと隙なく握りなおし、あたりを警戒しつつ廃工場の中へ足を進めていった。

たとえ何があったとしても、絶対に守ってみせる――。

遥は一通り周囲に視線をめぐらせてからスーツの上着を脱ぎ、彼女の露わになった肌を隠すように前から掛けると、スマートフォンを取り出して執事の櫻井に電話をかけた。

「ん……う……」

大きなベッドで眠っていた七海がぼんやりと目を覚ました。ゆるりとあたりに視線をめぐるせて、枕元で見守っていた遥の姿を認めると、記憶を探るように眉をひそめながら小首を傾げる。

「ここ、どこ？」

「ホテルだよ」

遥はやわらかく微笑んで答える。

廃工場から飛び出してきた七海を保護したあと、車で都心に戻り、剛三が予約してくれたこのホテルにチェックインした。スイートルームだ。そのほうが何かと便宜をはかってもらえるという判断らしい。

七海は服を切り裂かれて裸同然の格好だったため、毛布にくるんでここまで連れてきたが、いまはホテル備えつけのバスローブを着せてある。そのときに体の汚れはひとつおりの濡れタオルで拭いておいた。

右手首に掛けられていた手錠は、執事の櫻井がピンを使って開錠してくれた。手首にはうっすらと内出血や擦り傷があるが、さほど目立つものでもない。それより背中ofスタンガンの痕のほうが痛々しかった。

「なんでわざわざホテル？ 家に帰らないの？」

「じいさんが今日はここでゆっくり休めってさ」

「そう……」

いま、家はこの騒動の後処理でごたごたと慌ただしくしている。そんな様子を七海に見せたくない、聞かせたくない、心配すら感じさせたくない。そう考えて剛三はホテルをあてがったのだ。

遥もここに残って七海に付き添うように指示された。犯人を殺しかねないので家には戻るなということだ。遥も犯人に挑発されたら冷静でいられる自信はないので、素直に従うことにした。

あの犯人たちをどうするつもりなのかは聞いていないが、剛三に任せるしかない。彼らには依頼人がいるとのことなので、まずはあらゆる手段を用いてそれを突き止めることになるだろう。

そして、相応の報いを与えるはずだ。

七海とは血縁関係にないし、戸籍上の繋がりもないが、それでもひとつ屋根の下で暮らす大切な家族である。その七海を害そうなど橋に喧嘩を売ったも同然だ——そう剛三は息巻いている。

犯人が七海に何をしたのはわかっている。すべてハンディカメラにおさめられていたのだ。目的を遂げていないという意味では未遂になるが、七海の心情を思えば未遂で片付けられるものではない。

できるならその映像は誰の目にも触れさせたくなかったが、そうもいかない。最初にその映像を見つけた護衛と、遥、櫻井、剛三の四人が見ている。ただ、他の人間には決して見せないという約束してくれた。

「あのさ……」

七海は天井のほうにじっと視線を向けたまま、緊張した声で言いづらそうに切り出したが、なかなか言葉が続かない。暫しの沈黙ののち、覚悟を決めたように真剣な面持ちで尋ねる。

「僕を襲ったヤツらって生きてるの？」

「残念ながら生きてるよ。意識もある」

「けっこう血が出てたと思うけど」

「応急処置が早かったからね」

「そっか……」

複雑な表情を見せながらも、ほっと息をつく。

犯人のひとりにはナイフで腿を刺され、もうひとりには拳銃で腿を撃たれ、ベッドまわりは血まみれになっていた。ただ、応急処置が早く適切だったこともあり、どちらも致命傷にならずにすんだのだ。

死ねばよかったのと思う気持ちもないわけではないが、たとえ正当防衛が認められたとしても、七海に人を殺めたという咎を負わせるわけにはいかない。そういう意味では死ななくてよかったといえる。

七海も殺すつもりがなかったから脚を撃ったのだろう。文字どおり足止めとして。もう十年近く拳銃に触れていないとはいえ、それ以前は毎日訓練していたのだから、狙って撃つこともできるはずだ。

「シャワー浴びてこようかな」

「ああ……ついていこうか？」

「ひとりで大丈夫」

七海はもぞもぞと上掛けをめぐりながらベッドから降りると、スリッパを履いて歩き出した。その足取りはしっかりしている。ただバスルームの場所がわからず迷っていたようなので、遙が扉の前まで案内した。

「あー、さっぱりしたあ」

三、四十分ほどして、七海がニコニコと上機嫌な様子でバスルームから出てきた。さきほどのバスローブをそのまま身に着けているようだ。髪はドライヤーで乾かしたらしくさらさらとしている。

彼女自身が望んだとはいえ、ひとりで行かせてよかったのかと気をもんでいたが、そこまで心配することはなかったのかもしれない。ただ、あまりにも普段と変わらないのがかえって気にかかる。

「そういえば、僕、服がないんだけど」

「一式クローゼットに用意してあるよ」

「ほんと？」

七海はさっそくクローゼットの中を確かめて、ほっと息をついた。着替えを手にとらずにクローゼットの扉を閉めると、ありがとうと礼を述べ、大きなベッドの端にぽすんと腰掛ける。

「水、飲む？」

「うん」

遙が冷蔵庫からペットボトルの水を持ってきて手渡すと、一気に半分ほど飲んでふうと息をつき、きっちりとキャップを閉めてからベッドサイドに置く。そのあいだに、遙は一人掛けソファを彼女のほうに向けて座った。

「遙はもう帰っていいよ」

「いや、僕もここに泊まるから」

「僕ならひとりで大丈夫だしさ」

「じいさんの命令なんだ」

「そう……」

剛三の命令であれば七海も受け入れざるを得ない。困惑ぎみにぼつりつつぶやいて、深くうつむく。まるで遙に顔を見せまいとしているかのよう——。

「僕のまえでは泣きたくない？」

「……………」

ほどなくして彼女の体がわずかに震え始めた。それでも泣くのは必死にこらえているようだ。遙は何も言わずにソファから立ち上がり、隣に腰掛け、ビクリとこわばる体をそっと抱き寄せる。

。

「うっ……ぐ……うう……」

嗚咽とともに、堰を切ったように大粒の涙があふれ出した。こうなるともう止めようとしても止まらないだろう。拭いきれずに落ちた滴が、濃色のスラックスをじわじわと濡らしていく。

やがて泣くだけ泣いて落ち着いてくると、静かに話し始める。

「怖かった……ずっと逃げる隙ができるのを待ってたけど、うまくいくかどうかなんてわからなかったし、失敗したら殺されるかもって思ったし……でも、このままやられるだけなんて死んでも嫌だったから」

「頑張ったね」

遙は寄りかかる頭に優しく手をのせる。

今回は七海が行動を起こさなければ確実に間に合わなかった。あまり無謀なことをしてほしくないというのが本音だが、今回に限っては、結果的に正しい判断だったというより他にない。けれど——。

「ごめん、僕が不甲斐ないせいで」

本当はこうなるまえに遙が守らなければならなかったのに。そもそもこんなことになったのは遙の交際相手だと誤解されたからである。そこまでわかっていながら守ることも助けることもできなかった。

その謝罪に、七海はゆるゆると頭を振って答える。

「護衛を断ったのは僕なんだしさ」

「それでもどうにかすべきだった」

「これからは遙の言うこと聞くよ」

「そうしてくれるとありがたい」

彼女は彼女で反省しているのだろう。このまえとは打って変わっての殊勝な態度に、遥は冗談めかした口調で応じた。彼女は肩に寄りかかったまま曖昧に微笑むと、小さく吐息を落とす。

「なんで遥をふっちゃったんだろ」

瞬間、遥は息をのんだ。勢いよく彼女の両肩を掴んで引きはがすと、驚いて目を丸くする彼女と向かい合い、その双眸をまっすぐに見つめる。

「いまならまだ間に合う。僕と付き合おう」

「えっ……あ、いや、それは……」

ひとりごとを聞かれていたとは思わなかったのだろう。もしかしたら声に出した自覚すらなかったのかもしれない。彼女はしどろもどろになりながら気まずそうに顔をそむけた。すぐに顎を掴んでこちらに向きなおらせたものの、目は泳いでいる。

「僕をふったことを後悔してるんだろ？」

「えっと……でもそういうつもりじゃ……」

「付き合いたくないの？」

畳みかけるように問い詰めるが、彼女は目をそらしたまま何も答えようとしない。そのうちにじわりじわりと頬に赤みが差してきた。この状況で否定しないなど肯定しているも同然である。だとすれば――。

「何が問題なわけ？」

グイッと顔を近づけて覗き込む。

彼女は必死に目をそらした状態のまま、瞼を震わせ、何かをこらえるように唇を引きむすんだ。頑固な性格だということはよく知っているが、遥としてもあきらめるわけにはいかない。

「七海、こっちを見て」

それでも彼女は視線を戻そうとしなかった。ならば――遥は顎から手を離して立ち上がり、不安そうにうつむいた七海を見下ろすと、その体を横抱きにする。

「ちょっ……！」

抵抗する彼女をものともせず、広いベッドの中央に投げるように置いた。そして遥自身もベッドに上がり、膝立ちで彼女の体をまたいで見下ろしながら、スーツの上着をバツと脱ぎ捨てる。

「どういうつもりだよ」

「いまから七海を抱く」

「はあ?!」

七海の声は裏返った。

それでも遥は表情を動かさない。乱暴な手つきで自身のネクタイを抜き去ると、七海の両側に手をつき、真上から覆いかぶさるようにじっと見つめる。

「ちょっと、えっ……落ち着けよ！」

そう訴える彼女自身はまったく落ち着いていないが、遥は落ち着いていた。シャツの胸ポケットにさしていたボールペンを取り、彼女に見せつけるように眼前に掲げてから、隣に転がす。

「嫌ならそれで腕でも脚でも刺せばいい。痛みで正気に戻るかもしれないね。まあ、僕はいつも

十分正気のもりだけど」

「え、ちょっ、ま……」

彼女は顔を紅潮させながら身をよじって逃げようとするが、逃げられるはずがない。腕力も体力も武術も何もかも遥のほうが上なのだ。華奢な肩を押さつけて仰向けにしたまま腰の上に座り、動きを封じると――。

「ぎゃっ！」

すでに乱れぎみのバスローブの襟を掴み、一息に前を開いた。

・
・
・

「強姦されたって訴える？」

「……ばか」

まだ濃密な空気が色濃く残るベッドの中で、遥がからかうように尋ねると、隣の七海は恨めしげに睨んで口をとがらせた。ほんのりと上気した肌、気怠げな声が、先ほどまでの行為を思い起こさせる。

もしも本気で嫌がっていれば、やめていた。

しかし彼女が抵抗らしい抵抗をみせたのは最初だけで、肌に触れるとすぐに受け入れてくれた。むしろねだられた。まるで離れていた時間を埋め合わせるかのように、互いが互いを求め合った。

いまになって思えば、乱暴されかかったばかりの彼女を抱こうとするなど、正気の沙汰ではない。自分のことしか考えていないと非難されても仕方がない。だが、結果的にはこれでよかったのだと思う。

「もう付き合わないなんて言わないよね」

「負けたよ」

ドクン、と遥の鼓動が跳ねた。

これまでなぜ意固地に拒絶していたのかはわからないが、もうどうでもよかった。あきらめていたはずの未来がひらけたのだから。目を細めながら、熱っぽく紅潮した彼女の頬に手を伸ばそうとする。しかし――。

「遥が結婚するまでなら付き合うよ」

「……え？」

意味がわからない。

思わず体を起こして問いかけるように彼女を見つめる。彼女も上掛けで胸元を隠しながら体を起こし、真剣なまなざしで挑むように見つめ返すと、きっぱりと告げる。

「不倫はしない。それだけは譲れないから」

「……え？」

ますます意味がわからない。

だが、冷静に思考をめぐらせると何となく話が見えてきた。まさか、と思いつつもそれしか考えられない。頭が痛くなるのを感じて額を掴むように押さえる。

「ちょっと待って。僕は七海と結婚するつもりなんだけど」

「え、しかるべき家のお嬢さんと結婚するんじゃないの？」

「それは七海とよりを戻せなかったときの話」

そういえば七海の十六歳の誕生日に別れて以来、付き合っしてほしいとはさんざん言ったが、結婚してほしいとは言わなかったかもしれない。遥としては結婚前提のつもりだったが伝わっていなかったようだ。

そのうえ近いうちに見合いをするとまで告げた。七海とよりを戻せなかったらそうなるという話で、七海と結婚するなら見合いをする必要もないのだが、明確には言っていなかった気がする。

だからといって、まさか他の女性と結婚するつもりでいながら、平然と交際を迫るような男と思われていたなんて。不倫するような男と思われていたなんて。七海を愛人にするつもりだと思われていたなんて。

どうして肝心なことを伝えていなかったのか、どうして七海の心情に気づけなかったのか、いくら後悔してもしきれない。それでも手遅れではない。まだ結婚どころか見合いさえしていないのだから。

だが、七海は納得のいかない顔をしていた。

「でも僕、高校生のときに、剛三さんの姉ってひとに釘を刺されたんだけど。遥はしかるべき家のお嬢さんと結婚するから夢を見るなって」

「ああ……」

それが誤解の発端だったのか――。

遥の大伯母である彼女は、橘の跡取りならしかるべき家柄の令嬢と結婚すべきだと、他家に嫁いだ身でありながらしつこく口を出していた。その強硬さには剛三もうんざりしていたようだ。

しかし、七海にまでそんな牽制をしているとは思わなかった。剛三が同席していれば黙っていなかったはずなので、おそらく二人きりのとき、廊下ですれ違ったときにでも言ったのだろう。

「それはあのひとが先走っただけ。じいさんは昔から七海と結婚することを認めてくれてたよ。ただし七海の気持ちが一番優先だから無理強いは許さない、七海が二十歳になるまでによりを戻せなかったらあきらめろって」

「うそ……」

七海は唖然としているが誤解は解けたはずだ。だからといってすぐになんかどうにかと思うし、余裕がなさすぎてみっともないという自覚もあるが、悠長に待っている時間はない。

「七海、僕と結婚してくれるよね？」

「……ごめん、やっぱり結婚は無理」

「は？」

一瞬、耳を疑ったが聞き違いではない。

七海は気まずそうにうつむき、胸元で上掛けを押さえていた手をゆっくりと握りこんだ。表情だけでなく全身がこわばっているのがわかる。別れを切り出そうとしていたあのときのよう
に――。

「武蔵に未練があっても構わないよ」

「それはもうとっくにふっきれてる」

「え……じゃあ、何が問題？」

武蔵のことをふっきれているというのは意外だったが、彼女がそこまではっきりと言うのなら
事実だろう。嘘をついているようには見えなかったし、そもそも嘘をつく理由もない。

ただ、そうなると洩る理由がわからない。

催促するようにじっと無言で見つめて圧力をかける。彼女はうつむいたまま困ったように目を
泳がせていたが、そうしていても逃がしてもらえないと悟ったのか、観念して話し始める。

「遥が好きだったはずなのに、武蔵と再会したら気持ち移って、武蔵にふられたら遥に気持ち
が戻って。僕はこんなふらふらと心変わりするような人間なんだ。期間限定で付き合うならまだ
しも結婚はしないほうがいい。もう二度と遥を傷つけるようなことはしたくないし、遥だってさ
れたくないだろ」

自責の念をにじませつつも最後まで冷静さを失わなかった。しかしその瞳はうっすらと潤んで
いる。曖昧に目を伏せて隠しているつもりかもしれないが、隠しきれていない。

「舐められたもんだね」

「……………」

当惑ぎみにおずおずと上げられた視線を、遥は鋭く捉える。

「それしきのことで七海をあきらめるわけないだろう。いったい何回ふられつづけたと思ってる
んだ。せっかく僕に気持ちがあるとわかったのに、不確定な未来を理由に断られて、はいそう
ですかと引き下がれると思う？」

「それ、は……」

「だいたい七海は何も悪くないだろう。もともと七海が好きなのは武蔵だったんだ。それを承知
のうえで付き合おうと押し切ったんだから、やっぱり武蔵がいいと言われても仕方がない。武蔵
が戻るまでに七海の心を掴みきれなかった僕の力不足。でも、もう二度とほかの誰にも心変わり
なんかさせない」

そう断言すると、鼻先に人差し指を突きつけてずいっと迫る。

「それよりわかってる？ 七海が僕にどれだけ残酷なことをしようとしているか。七海に断られ
たら僕は好きでもない女と結婚することになる。一生、七海を想い続けたまま別の女を抱かな
ければならないんだ。本当に申し訳ないことをしたと思ってるなら、罪滅ぼしに僕と結婚してよ」

七海は困惑を露わにする。

彼女は責任感が強い。こういう言い方をすれば断りづらくなることはわかっている。だからこ
そ言うべきではないし言わないようにしていた。彼女の気持ちを無視して縛り付けることにな
るからだ。

しかし、その気持ちが自分にあるとわかれば話は別である。どんな手を使っても必ず承諾させ

てみせる——居住まいを正し、胸元に上掛けを当てたままの七海と膝をつきあわせる。

「七海、僕と結婚してくれるよね？」

「.....後悔したって知らないからな」

「しないし、させないよ」

七海はじとりと睨むが、遙が両手を伸ばすと戸惑いつつも身を預けてくれた。上掛けが落ちて肌と肌が触れあう。やがてあたたかい手が遠慮がちに背中にまわされて、遙も抱きしめる手に力をこめた。

ピンポン——。

心当たりのない真夜中のチャイムに、遙は思わず眉をひそめて怪訝な面持ちになった。コンシェルジュに何か頼んだ覚えもなければ、来客の予定もない。腕の中にいる七海も不安そうに顔を曇らせている。

「ちょっと出てくる」

「うん.....」

安心させるように微笑んでぽんと頭に手をのせると、床に落ちていた彼女のバスローブを身につけて玄関に向かう。ドアスコープから見えたのは、ホテルスタッフの制服を身につけた壮年の男性だった。

「呼んだ覚えはないんだけど」

「橘剛三様より承りました」

男性スタッフがドアスコープから見える位置に移動させたワゴンには、ワインクーラーで冷やされたシャンパンが載っていた。そうか——遙は腕時計を確認してひとり静かにふっと笑うと、扉を開けた。

男性スタッフが一礼してメッセージカードを差し出す。そこには思ったとおりのことが書き記されていた。遙はその場でワゴンごと受け取って男性スタッフを帰し、七海のいる寝室へと運んだ。

「それ、何？」

「シャンパン」

「えっ？」

きょとんとした七海に、先ほどのメッセージカードを手渡しながら言う。

「二十歳の誕生日おめでとうって、じいさんが」

「あ.....そっか.....」

七海はベッドサイドのデジタル時計に振り向いた。

もう零時を越えている。つまり日付が変わって七月三日になったということだ。シャンパンは七海への成人祝いといったところだろう。メッセージカードにも祝いの言葉がシンプルにしたためられていた。

「これどうしようか？」

「飲みたい！」

七海は目を輝かせて訴えた。

遥はくすりと笑うと、用意されていた二つのグラスにシャンパンを注ぎ、ベッドに腰掛けてその一つを七海に手渡した。そろりと慎重な手つきで受け取った彼女は、興味深そうにグラスを覗き込む。

「成人おめでとう」

「ありがとう」

そう言葉を交わしたあと、遥がグラスを傾けるのをちらりと見て、七海も緊張ぎみにグラスに口をつける。喉が何度かこくりと動くのが見えた。

「どう？」

「うん、おいしい！」

七海ははじけるような笑顔を見せて、そう答えた。

二人とも喉が渴いていたこともあって、あっというまにボトルを空けてしまい、もう一本追加した。それでも七海はなぜか一向に酔う気配がなく、不覚にも遥のほうが先に酔いつぶれて寝てしまったのだが、それは二人だけの秘密である。

「本当にすまなかった」

翌日の夜、ようやく許可が下りて七海とともに帰宅すると、剛三から事件についての説明と謝罪を受けた。応接セットの向かいから深々と頭を下げる当主の姿に、七海はおろおろと困惑を露わにする。

「別に剛三さんが悪いわけじゃないし……僕も無事だったから……」

「今後、誰であろうと二度と七海に手出しはさせない。約束しよう」

「あ、はい……」

謝罪を受ける側が、謝罪する側の必死さに気押されていた。

ただ、遥としてはこれでもまだ足りないくらいだと思っている。悪気がなかったとはいえ、彼の軽率な言動のせいで七海はならず者に辱められ、あやうく取り返しのつかない事態になるところだったのだ――。

事の発端は、先日行われた懇親会だった。

剛三を含め七人の財界人が高級料亭に集まった。みな旧知の間柄だが、仕事以外で酒を酌み交わすのは久々で、すこし気が緩んでいたのかもしれない。いつになく遠慮のない話題が多かったという。

「そういえば、遥くんが近々見合いをすともっぱらの噂ですが」

「あれは私の姉が先走っているだけだ」

思い出したように遥の見合い話を振ってきたのは、隣の藤澤だった。剛三はにわかに変わった話題を不審に思うこともなく、冷酒を口に運び、空になったお猪口を漆塗りの座卓に置いて溜息をつく。

「単なるおせっかいか何か思惑があるのか知らんが、勝手に遥の見合い相手をあれこれ見繕ってきてな。だが、あいつの思いどおりにはさせんよ。見合いをさせるにしても相手は私が選ぶつもりだ」

大伯母の持ってきた身上書や写真は受け取ったが、あくまで参考にするだけで、その中から選ぶと決めたわけではなかったのだ。それに、七海の誕生日まではきちんと待つ気でいたという。

藤澤は徳利を手に取り、剛三のお猪口に冷酒をつぎながら尋ねる。

「でも、遥くんには長年の恋人がいるという噂を聞きましたけど……その……」

「指輪なら偽装だよ。女に言い寄られるのが面倒で、幼なじみに頼んで恋人のふりをしてもらっているだけだ。同性愛者だと思われれば寄ってこないと考えたらしい。まったく頭がいいのか悪いのかわからんな」

これまでペアリングの話はのりりくらしと躲してきたが、今回は意図的に暴露した。七海と結婚するにしろ、見合い結婚するにしろ、そろそろ噂を払拭すべき時期に来ているとの判断である。

目論見どおり、藤澤だけでなく同席している他の面々も興味を示した。あえて二人の会話に加

わろうとはしないものの、好奇のまなざしを向け、聞き逃せないとばかりに耳をそばだてている。

「では、その、同性愛者というのは事実ではないと」

「昔からうちの里子に骨抜きにされておるよ」

藤澤に確認され、剛三はからりと笑い飛ばすように答えた。

里子については特に隠しているわけではないし、懇親会などで何度か話題にもしているの、年若い女性であることくらいは藤澤も知っている。

「なるほど、それで女性との噂がなかったのですな」

「そういうことだ」

遥に女性との浮いた噂がなかったのも、目撃情報がなかったのも、ひとつ屋根の下でひそかに交際を続けていたから——藤澤だけでなく、まわりもみな腑に落ちたような顔をして頷いた。

「では、その子と結婚ということに？」

「そうさせてやりたいのは山々だがな」

「まあ血筋もわからない孤児ですしね」

「いや、それは問題ではない」

藤澤の発言はいささか思慮分別を欠いたものであったが、相手の家格や素性などの理由で結婚を認めないことは、名家ではめずらしくない。しかしながら剛三はきっぱりと否定した。

「では、何が……」

「まだ七海の決心がつかんらしいのだ」

「ああ、本家の嫁になる自信がないと」

「どうだろうな」

そっけなく流し、お猪口につがれた冷酒を一気に呷る。

「近いうち、あの子に本当の気持ちを聞いてみようと思っておる。色よい返事がもらえればいいのだが……そうでなくても、私ができうるかぎりの説得を試みるつもりだ」

約束の期限が過ぎたら本当にそうするつもりだったという。遥のことが嫌いだというならあきらめるしかないが、他の理由なら全力で説得し、結婚を承諾してもらおうと考えていたらしい。

「あなたなら説得などたやすいでしょう」

「いや、あの子の頑固さは筋金入りでな」

「ははは」

藤澤は愛想笑いを浮かべながら、空になった剛三のお猪口に再び冷酒をついだ。しかしその目はすこしも笑っていない。獲物を見つけた獣のように鋭い光を放ち、剛三を窺っている。

「……万が一うまくいかなかったときは、私の孫娘を嫁に考えてもらえませんか。身内の私が言うのも何ですが、器量がよくて、教養もあって、慎ましやかで、遥くんにも気に入っていただけるかと」

「そうだな、悪くないかもしれん」

藤澤の申し出からはあからさまなくらい下心が透けて見えた。前々から橘財閥とつながりを持つと躍起になっていたのだ。絶好の機会を前にしてなりふり構ってられなかったのだろう。

確かに橘と姻戚関係を結べば多少の忖度はあるかもしれない。だが、藤澤がどこまで承知しているのかはわからないが、親族であれ、姻族であれ、剛三自身がビジネスで特別扱いすることはないのだ。

ただ、そのことさえきちんと了承してくれるのであれば、彼の申し出を受けるのもやぶさかではない。もちろん当事者である遥の意向を最優先にするが——そう剛三は考えていたという。

それなのに藤澤はやりすぎた。弁護士を差し向けて交渉するだけならまだしも、ならず者を使って暴行させようなど犯罪以外の何物でもない。うまくいくと思っていたのなら舐められたものである。

剛三は軽率だったと反省しきりだ。少なくとも七海と特定できる形で言うべきではなかった。まだ婚約に至っていないのなら、排除しようとする輩が出ることも十分考えられるのだから。

とはいえ、さすがにあそこまでの行動を起こすとは想像もつかないだろう。それなりに親しくしている旧知の相手ならなおのこと。口にしなくても裏切られたという思いはあるかもしれない。

ちなみに、向かいにいた越智と八重樫という二人からも迷惑を被っている。富田に平手打ちを食らわせた泣きわめいたのが越智の孫娘で、七海にアイステイーをぶっつけたのが八重樫の孫娘だったのだ。

ただ、二人とも単なる世間話のつもりで、焚きつけてはいないという。

越智の孫娘はすでに名家の三男と見合い結婚しており、八重樫の孫娘にも条件のいい縁談が持ち上がっているのです。確かにいまさら意味がない。孫娘本人の暴走と考えるほうが自然だろう。

「あの、犯人はどうなったんですか？」

七海は不安そうな顔をしておずおずと切り出した。

彼女からすれば謝罪よりもそちらのほうが切実な問題である。自分を襲った犯人が野放しになっていたら心配でたまらないだろう。逃げるときに重傷を負わせたことで報復される恐れもあるのだから。

遥があからさまに物言いたげなまなざしを剛三に向けると、彼は心得ているとばかりに目だけで頷いてみせた。そして気付かれないようすぐさま七海に視線を移し、誠実な声で答える。

「実行犯二人は警察に突き出した。他にもいろいろと重罪を犯しておるようだから、長期の実刑は免れんだろう。依頼主である藤澤のほうは警察沙汰にするのが難しい。しかし橘に喧嘩を売った報いはきっちりと受けてもらう。二度とこんなことをする気は起きなくなるはずだ。それで構わないか？」

「はい……」

彼女はようやく安堵の表情を見せた。

実際には、七海の拉致監禁および強姦未遂については事件化されない。事情聴取や証言などで七海にさらなる負担をかけるし、何より世間に知られてしまう危険があるので、見送ることにしたのだ。

もちろん実行犯二人を野放しにしているわけではない。ひとまずしかるべきところに身柄の拘束を頼んである。法に触れることを数多く請け負っていたようなので、正式な逮捕も時間の問題だろう。

藤澤のほうを警察沙汰にしないのも同じ理由である。だからといってただで済ますつもりはない。藤澤の会社を窮地に追い込むことも、藤澤を社会的に抹殺することも、剛三がその気になれば可能なのだ。

「僕も七海を守るから安心して」

「ありがと」

剛三も留意するだろうが、誰よりも近いところで守れるのは自分しかいない——その思いを胸に、隣の七海を見つめながら真摯に告げると、彼女は気恥ずかしげにはにかんで頷いてくれた。

そんな二人にじっと目を向けたまま、剛三は真剣な顔になる。

「七海……結婚のことだが、本当に遥と一緒になるということでもいいのかね。しっかりと考えたうえでの結論なのかね。もし場の雰囲気流されてしまっただけなら、撤回しても構わんのだぞ」

「撤回……」

七海はおぼろげにつぶやく。

おそらくあさっての方向に思考を飛ばしているのだろう。本当は撤回を望まれているのではないか、撤回しなければならぬのではないかと——剛三もおおよそのところを察したらしい。

「誤解させたのなら謝るが、私自身は七海が結婚相手であることに何の異存もない。まあ親戚連中にはこころよく思っていないものもいるだろうし、嫌味くらいは言われるかもしれんが、当主である私が認めているのだから堂々としていればいい」

諭すようにそう告げて息をつき、本題に入る。

「私が確認したかったのは、しっかりと自らの意思で結婚を決めたかどうかだよ。流されて何となく結婚して、後悔するようなことにはなってほしくない。七海を大切に思っているからこそ尋ねているのだ」

七海は身じろぎもせず聞いていた。

話が終わると、気持ちを落ち着けるように小さく息をつき、すっと静かに表情を引きしめた。そのまま目をそらさず、まっすぐ挑むように剛三を見据えて答える。

「僕は遥が好きだし、遥としか結婚する気になれないから」

迷いのない凜とした声だった。

息を詰めていた遥は、それを聞いて全身から力が抜けるくらいほっとし、同時に胸が焦がれるように熱くなるのを感じた。少なからず遥に流される形で結婚を了承したという経緯もあり、もしかしたらと心配していたのに、まさかこんなにも熱烈な言葉を聞かされることになるなんて。

「わかった。それでは結婚の話を進めることにしよう」

剛三も安堵をにじませていた。すっかり冷めているであろう紅茶に口をつけると、静かにティーカップを戻し、ソファの背もたれに身を預けてふうと息を吐き出す。

「これで幾分か肩の荷が下りたな」

「……ご面倒をおかけしました」

彼がずっと気にかけてくれていたことはわかっている。言葉こそ辛辣だったが、このこじらせまくった初恋が成就するよう願ってくれていた。それゆえ遥の不甲斐なさにあきれたことも一度や二度ではなかつたろう。

「七海を大切にするのだぞ」

「はい」

言われるまでもない。

だが、名目だけとはいえ里親である彼には言う権利があるし、言わずにはいられない気持ちも十分に理解しているので、居住まいを正して受け止める。すると――。

「僕も遥を大切にします」

隣で七海が力強く宣言した。

一瞬、遥は虚を突かれて目を見開いたものの、すぐにふっと表情をゆるめる。いつもの負けず嫌いを発揮しただけかもしれないが、それでも嬉しかった。きっと自分の発言には責任を持ってくれるだろう。

視線に気付いたのか七海がこちらに振り向いた。遥がにっこりと微笑みかけると、彼女はすこし照れたようにはにかむ。そんな二人を、剛三はいつになく優しい目をして見守っていた。

第31話 最後の秘密

「わざわざ武蔵に報告する必要あるのかなあ」

二人で武蔵の部屋に向かう途中、七海があからさまに気乗りしない様子でぼやいた。彼女にしてはめずらしく沈鬱な顔をしている。遥もできることなら部屋に帰してやりたいのだが、そうできない事情がある。

「じいさんの命令だから仕方ないよ」

「わかってるけど」

二人の結婚を認めるにあたり、遥は剛三からふたつのことを命じられていた。そのうちのひとつが武蔵に報告することである。それも七海と二人で。これを機に和解しなさいということだろう。

殴り合いの喧嘩をして以来、武蔵とは顔を合わせたら挨拶するくらいで、まともに話をしていなかった。七海もそうだろう。二人は武蔵に対し、武蔵は二人に対し、それぞれ複雑な思いを抱えている。

だからといって、ひとつ屋根の下にいながらこのままというのも気詰まりだ。昔と同じというわけにはいかないだろうが、自然に会話できるくらいの関係になればとは思っている。

もっとも七海にはそこまで求めない。報告の場に同席さえしてくれれば剛三の命令を遂行したことになる。それで十分だ。身勝手に自分を捨てた相手なんかと無理に仲良くする必要はない。

「終わったらケーキでも食べようか」

「イチゴショートがいいな」

七海は気を取り直したようにニコッと笑った。

やはり彼女を元気づけるには食べ物に限る。もちろん憂いの元凶がなくなったわけではないが、このあとに甘いご褒美が待っていると思えば、多少なりとも気持ちが軽くなるだろう。

「久しぶりだな」

扉を叩くと、武蔵自らが待ち構えていたかのように出迎えてくれた。

この時間に訪問することは執事の櫻井を通して伝えてあった。楽しみにしているという返事は社交辞令だと思っていたが、本当に歓迎してくれているように見えて、遥はすこし当惑した。

武蔵に促されて、扉付近で控えている護衛係二人のまえを通り過ぎ、奥のほうに置かれた応接用ソファに座る。武蔵の向かいに遥と七海が並ぶかたちだ。隣の彼女からは緊張が伝わってきた。

ちょうどそのとき執事の櫻井がワゴンを押してやってきた。一礼して手際よく紅茶とケーキを並べると、すぐにワゴンを押して出て行く。ケーキは七海が食べたがっていたイチゴショートだ。

「七海、きのう誕生日だっただろう」

「あ、うん……ありがとう」

七海は曖昧な笑みを浮かべた。

その横顔を窺いつつ、遥は表情を動かすことなく内心でひそかに嘆息した。意図的ではないにしても、武蔵はどうしてこういつも遥の邪魔をするのだろう。過去の出来事まで思い出してしまい苦い気持ちになる。

だからといって大人げない態度をとるつもりはない。武蔵に勧められると、遥は素直にフォークを手にとりケーキを口に運ぶ。それを見て、七海もほっとしたように表情をゆるめて食べ始めた。

「俺に話があるって聞いたけど」

武蔵は紅茶を飲み、ケーキにフォークを入れながら緊張ぎみに切り出した。

わだかまりのある相手から話があるなどと言われれば、気がかりなのは当然である。一瞬、もったいつけてやろうかと意地の悪い考えが頭をもたげたが、むしろ早く義務を果たして出て行くほうがいだろうと思直した。

「七海と結婚することになった」

いっそ投げやりなくらい端的に報告する。

武蔵は中途半端にケーキを切りかけたまま手を止めて、ゆっくりと顔を上げた。驚いているというより、どこか信じきれないような疑わしげな面持ちである。

「おまえらいつのまにより戻したんだ？」

「きのうだよ。同時に婚約したってこと」

「……………」

形のいい眉がますます怪訝にひそめられた。手にしていたフォークを皿に置き、七海に目を向ける。

「七海はちゃんと納得してるのか？ 流されてないか？ 無理強いされてないか？」

心配そうに問い詰めるさまは、まるで保護者だ。

実際、一時期は保護者に近い立場だったこともあるので、いまでもその気持ちが抜けきっていないのかもしれない。そういえば、七海と恋人関係を解消したのもそれが理由だったはずだ。

それまで紅茶を飲みながら心配そうになりゆきを見守っていた七海は、なぜか闘志に火がついたような面持ちになった。ティーカップを置き、すっと背筋を伸ばして武蔵と向かい合う。

「僕が自分の意思で決めたことだよ」

「ヤケを起こしてんじゃないよな？」

「遥が好きなんだ」

一点の曇りもない瞳で見つめ返し、そう断言した。

「武蔵にふられたからってヤケになったわけじゃない。だいたいそんなのもうとっくの昔にふっきてるし。まあ、ヤケとか妥協とか思われても仕方ない状況だけども……そうじゃないって証明もできないし……」

「信じるよ」

拗ねたような困ったような面持ちで口をとがらせていた七海は、その一言ではじかれたように顔を上げた。彼女の視線はうっすらと笑みを浮かべる武蔵を捉えている。

「おめでとう、七海」

「ありがとう」

ふわりと花がほころぶように破顔した。

この表情を見れば、無理強いでないことは疑う余地もないだろう。嘘や欺瞞でこんな笑顔ができる子ではない。武蔵もそれでようやく確信を得られたようで、そっと安堵の息をついた。

「これで俊輔の墓参りに行けそうだ」

「ん？ 行けなかったの？」

七海がきょとんとして尋ねると、彼はきまり悪そうに肩をすくめて苦笑する。

「この国に戻ってきたときは行くつもりでいたんだけどな、あー……その、七海といろいろあったせいで後ろめたくて……顔向けができなかったっていうか、会いに行く勇気がなかったっていうか」

「行ってあげて。お父さんきっと喜ぶよ」

七海はくすりと笑って応じた。

そこには彼女の父親を介した二人だけの絆があった。彼のことを知らない遥には立ち入ることができない——気持ちを落ち着けるように、ゆったりと背もたれに身を預けて紅茶を飲んだ。

「ついでだから俺も二人に報告しておく」

暫しの沈黙のあと、武蔵がひどく真面目な声でそう切り出した。

報告するようなことが何かあったらどうか。仕事関係の話とは思えないので、彼自身の今後についてだろうか。遥は心当たりを探りながら静かにティーカップを置き、武蔵を見つめる。隣の七海もくりくりした目でじっと見つめている。二人の視線に促されて、彼はめずらしく緊張を露わにしつつ口を開いた。

「恋人ができた」

「……は？」

思わず間の抜けた声を上げてしまったが、致し方ないだろう。あんなに追い込まれた顔をして何を言い出すのかと思えば——そこまで考えて、ふとあることに気がついて眉をひそめる。

武蔵は自由に出歩くことが許されていないのだ。

墓参りくらいなら護衛付きで許されるだろうが、決められた人間以外との交流は禁じられている。そのような状況でどうやって恋人を作るというのだろうか。いや、可能性があるとするれば。

「それって、誰？」

「メルローズだ」

やはり、と得心する。

武蔵が比較的自由に会える女性は二人だけである。七海でないのだからメルローズしかいないだろう。しかし、七海はそこまで考えが至っていなかったらしく、うそ、と微かな声でつぶやいたきり呆然としている。

「いつから付き合ってるわけ？」

「きのうからだな」

「じいさんには報告したの？」

「あー……まだ……」

きのうからなら、遥に伝わっていなかったのも理解できる。

それでも剛三ならすでに把握しているかもしれない。この家での出来事はほとんど彼に筒抜けなのだ。未成年であるメルローズの養父という立場上、賛成反対どちらにしても武蔵を呼び出すことになるだろう。

遥としては、このままメルローズと付き合い続けてくれたほうがありがたい。七海を信用していても、元恋人がひとつ屋根の下にいればやはり気になってしまう。しかし、彼に決まった相手がいるのなら幾分か安心できるはずだ。

「あれ、メルって武蔵の姪だったよね」

ふと七海が思い出したようにつぶやいた。

それはこの屋敷の人間なら誰もが知っている事実だ。答えを求めているわけではないだろうと思いつつ、そうだよと返事をすると、不安そうな顔をしてちらりと横目を向けてきた。

「叔父と姪ってダメじゃなかった？」

「日本の法律では結婚できないね」

七海が何を懸念しているかは察しがついていたので、補足しながら肯定した。あえてそうしたのは武蔵に聞かせるためでもある。

「そうなのか？」

案の定、彼は目をぱちくりさせて聞き返してきた。

おそらく武蔵の故郷では禁止されていないのだろう。日本も戦前までは近親婚を禁止する法律などなかった。こういう制度は国や時代によって異なるので、何も不思議なことではない。

「まあね。でも家族としか思えないとか言ってメルを捨てるかもしれないし、そのままにメルに愛想を尽かされて捨てられるかもしれないし、結婚のことを考えるのはまだ早いんじゃない？」

「おまえなあ」

武蔵は苦虫をかみつぶしたような顔をしているが、このくらいの嫌味を言わせてもらっても罰は当たらないだろう。別に本気で喧嘩をふっかけているわけではない。ただほんのすこし意趣返しをしたくなっただけである。

「安心して。書類上、メルローズとは他人ということになってるし、このままいけば問題なく結婚できると思うよ。まあ武蔵が日本国籍を取得してからの話だけど」

「ん……ああ……」

遥の肯定的な態度がよほど意外だったらしい。武蔵は戸惑いがちに真意を探るような視線をよこしたが、遥が素知らぬ顔をして紅茶を飲むと、あきらめたように苦笑して食べかけのケーキを口に運んだ。

「なあ、おまえら結婚式はするのか？」

フォークを置きながら、武蔵がふと思いついたように問いかけてきた。

そのあたりの話はまだ誰ともししていないが、橘財閥の次期後継者という立場上、結婚式と披露

宴をしないという選択肢はない。遥個人としても、披露宴はあまり気が進まないものの、結婚式はきちんとしたいと思っている。

「もちろんするつもりだよ」

「じゃあ、俺も呼んでくれよ」

「……………」

きっと悪気は微塵もない。そのくらい見ればわかる。ただ好奇心から行きたいと思っただけではないだろうか。七海を祝いたいという気持ちもあるのかもしれない。だからといって容認できるかは別問題だ。

「あのさ、自分が新婦の元カレだってわかってる？」

「一応、おまえの父親でもあるんだけどな」

武蔵は口をとがらせて文句を言った。

その瞬間、遥は静かに息をのんで表情を変えずに凍りつく。聞き逃してくれていればいいけど——おそるおそる隣に視線を向けると、七海は動きを止めてはたりと目を瞬かせていた。

「父親って……え……？」

武蔵と遥を交互に見やりながら当惑の声を上げる。混乱しているのか、瞳を揺らしておろおろしたまま二の句が継げないようだ。武蔵はそんな彼女の様子から何となく悟ったらしく、胡乱な目を遥に向ける。

「おまえ、もしかしてまだ話してなかったのか？」

「このあときちんと話すつもりだったよ」

「いや、結婚を決めるまえに話しておくべきだろう」

「それは、そうなんだけど」

家族以外には話すなど剛三に厳命されていたため、結婚が決まってからでないと話せなかった。せめて決まったらすぐに話すべきだったと思うが、きっかけがつかめずここまでできてしまった。

正直なところ、あまり言いたくないという気持ちはあった。それでもこのあときちんと話すつもりでいたのは本当である。それが、結婚を認めるにあたり剛三が命じたことのひとつなのだから。

「ねえ、遥の本当のお父さんって武蔵なの？」

「生物学的な意味ではね」

半信半疑な様子で問いかけてきた七海に、遥は肯定を返す。

「僕が研究の実験体として作られたって話はしたよね。武蔵は知らないうちにそれに利用されていたってわけ。いわゆる人工授精かな。利用されたっていう自覚さえなかったみたいだし、完全に被害者だよ」

内容が内容なだけに、当事者である武蔵をまえにして具体的な話をするのは憚られた。もちろん七海が求めるのであれば隠さずに答えるつもりでいる。しかし、彼女は実験のことより親子という事実ショックを受けたようだ。

「じゃあ、僕は遥のお父さんとも付き合ってたことになるんだ……うわぁ……知らなかったとは

いえ最悪なことしてたんだな、ごめん……ほんといたたまれない……」

「別に気にしなくていいよ」

耳まで赤くして両手で顔を覆った彼女に、遥は苦笑する。

確かに武蔵とは七海をめぐるいろいろなとあったが、親子だからどうこうということはない。少なくとも遥はそういう視点で考えていなかった。そもそも武蔵のことをあまり父親だと思っていないのだ。

しかし、七海の過剰なまでの動揺を見ていると、なんだかこちらまで気恥ずかしくなってくる。武蔵も同じような気持ちだったのかもしれない。ふと目が合うと、互いにうっすらときまり悪そうな笑みを浮かべた。

「あっ」

ふいに七海は何か気付いたような声を出して、パッと顔を上げる。まだ紅潮していて熱はあまり引いていないようだが、さきほどまでとは違い、その表情には抑えきれない嬉しさがあふれていた。

「じゃあ、武蔵は僕にとっても父親じゃん！」

「……は？」

またしても間の抜けた声を上げてしまった。

理屈としてはわかる。遥の父親なら、妻の七海にとっては義父ということになる。しかし、そもそも武蔵は書類上も事実上も他人である。遥の父親というべき存在はほかにいるのだ。

「それはちょっと違うんじゃないかな……」

「僕が勝手に思うだけなら別にいいだろ？」

「俺は構わないぜ」

向かいから投げかけられた面白がるような声。振り向くと、武蔵がにんまりと口元を上げてなりゆきを見守っていた。恨めしく思いながらも、これしきのことを反対するのも狭量な気はする。

「まあ、二人がそう言うなら……」

渋々ながら了承すると、七海は満足そうにニッコリと満面の笑みを浮かべた。

彼女がなぜこんなことを言い出したのかは定かでないが、もしかしたら二人の関係を上書きしたかったのかもしれない。元恋人から親子に。そうやって彼女なりに決着を付けようとしたとも考えられる。

ただ、武蔵が遥の父親であることは秘密にしなければならないので、七海の義父だということも公言できない。そのあたりはきちんと釘を刺しておく必要がある。七海はもちろん武蔵にも。

結局、結婚式に呼ぶことになりそうだな――。

楽しそうに冗談めかしたやりとりを始めた二人を見ながら、遥はぬるい紅茶に口をつける。面倒なことが増えたはずなのに、確かに面倒だとは思っているのに、それでも無意識のうちに口元が上がっていた。

あれは――。

むわりと熱がわだかまり、息苦しささえ感じる薄暮の雑踏の中、遥は行き交う人々のあいだからチラリと見えた人影に目をとめた。軽やかな足取りで縫うように進んでその背中を捉えると、飛びついて肩を抱く。

「おわっ！」

そんな声を上げて前につんのめったのは、富田だ。

彼は怪訝に振り向き、至近距離で遥と目が合うと小さく息をのんだ。その一瞬で傍目にもわかるくらい顔が紅潮するが、すぐに気持ちを静めるようにそっと呼吸をして、口をとがらせる。

「おまえな、こんなところで何するんだよ」

「富田の背中を見たら驚かせたくなって」

遥はふふっと笑う。

こんなふうに後ろから自然に富田の肩を抱くことなど、昔はできなかった。精神的な話ではなく物理的な話である。富田より背が低く、十センチほど差をつけられたときもあったのだ。

だが、あきらめかけた高校三年生のときに成長期が訪れた。男子にしては低めの身長をひそかに気にしていたので、富田はともかく、男子の平均身長を超えたことは率直に嬉しかった。

それまではずっと双子の妹である滯と同じくらいだった。男女の違いがあるのに、顔だけでなく背格好までよく似ていたのだ。富田がいまでも二人を重ねて見ているのはそのせいである。

「じゃ、行こうか」

遥はぼんと背中を叩いた。

まんまと驚かされてしまったことがくやしいのだろう。富田はじとりと恨めしげに横目で睨んでいたが、それでも遥に促されると素直に歩き出す。その頬はまだほんのりと熱を帯びているように見えた。

二人が向かう先は同じである。

仕事のあといつもの店で飲もうと約束していたのだ。予約時間ちょうどに着くと、落ち着いた雰囲気をもった壮年の男性店員に、あたりまえのようにいつもの個室へと案内された。

都心の夜景が見渡せる二人がけのソファに並んで座り、メニューに目を通す。この個室には間接照明しかないため、近づかないと読みづらく、必然的に寄り添うようなかたちになる。

「ねえ、シャンパンをボトルで頼んでいいかな。富田と一緒に飲みたいんだけど」

「俺は何でもいいぜ」

過去の経験上、聞くまでもなく彼がそう答えることはわかっていた。店員を呼び、先日ホテルで七海と飲んだシャンパンの銘柄を告げる。ついでに料理もいくつか適当に頼んでおいた。

「何かいいことあったのか？」

店員が出て行くと、富田が不思議そうに問いかけてきた。

シャンパンのボトルを頼んだことは何度かあるが、いずれも誕生日や就職祝いなど何かしらの

名目があったので、今回もそうだと考えたのだろう。まあね、と遥はふっと微笑を浮かべて肯定する。

「実は、七海と結婚することになったんだ」

「えっ？」

驚くのも当然である。数年にわたって七海にふられ続けたあげく、完全にあきらめざるを得ない状況に追い込まれたことを、彼は知っているのだ。我にかえると心配そうにおずおずと尋ねてくる。

「無理強いしたわけじゃないよな？」

「もちろんだよ」

先日、武蔵にもほとんど同じことを言われたなど、遥はひそかに苦笑する。この急転直下では疑われるのも仕方がないだろう。ただ、富田はその返事を聞くなり素直に信じたらしく、安堵の息をついていた。

「乾杯」

冷えたシャンパンを二つのグラスに注ぎ、富田と乾杯する。

芳醇で濃厚な香りを楽しみながらグラスを傾けると、喉の奥がカッと熱くなるのを感じた。今日は酔いつぶれるわけにはいかないのだから、飲み過ぎないように気をつけなければと思う。

「で、どうやって七海ちゃんを説得したんだ？」

「ああ……」

もともと隠す気はなかったので正直に話していく。もちろん拉致事件に関しては全面的に伏せたとし、七海を強引に抱いたことも割愛したが、話し合いの要点はおおまかに伝えたつもりだ。

聞き終わると、富田はゆっくりとソファにもたれて息をつく。

「お互いに言葉が足りなかったってことか」

「何年もすれ違ってたかと思うとくやしいよ」

「……でも、よかったな」

寄り添うような優しい声だった。

遥はきらめく都心の夜景に目を向けたまま、つられるように、安堵するように、ふっと表情を緩めてありがとうと応じた。そして一呼吸おくと、すこし真面目な顔になって言葉を継ぐ。

「富田には本当に感謝してる」

「俺は別に何もしてないけど」

「協力してくれただろう？」

掲げた左手の薬指には、すっかり馴染んだシンプルなプラチナリングが輝いていた。そして富田の左手にも——彼はそこに目を落とし、その存在を確かめるようにそっと右手の親指で触れた。

「俺はただ指輪をはめてただけでしかないけど、おまえが一途に想いつづけた相手と結婚できるなら、この八年が報われたような気がするよ」

そう、八年だ。

大学入学後、女子にまとりつかれてうんざりしていた遙に、漣が思いつきで突飛な提案したのが始まりである。それを聞いて、遙は嫌がる富田に面白半分で協力させてしまった。まさか八年も続けることになるとは夢にも思わずに。

「やっぱり本当はつらかったよね？」

「いや、そうじゃないけど……」

「人生のいい時期が台無しになったし」

「俺はそんなこと思ってないからな」

あわてて訴える彼に、遙は横目で淡く微笑んでシャンパンに口をつける。

自由恋愛する権利を奪われたうえ、同性愛者だと陰口をたたかれたり、遙と別れてほしいと詰め寄られたり、ときには不条理な暴力をふるわれたりと、偽装恋人など彼にはデメリットしかない。

だが、いくら終わりにしようと提案しても受け入れようとしなかった。それどころか逆に続けようと言ってくる始末である。遙はその自己犠牲的な優しさにただひたすら甘えてきたのだ。

「ほんと富田ってお人好しすぎるよね」

「別に、おまえが思うほどじゃない」

「八年も付き合ってくれたのに？」

「……俺がそうしたかったってだけだ」

「そういうことにしておく」

遙が軽く笑うと、富田はどこかきまり悪そうな面持ちで目をそらし、グラスに残っていたシャンパンを一気にあおった。遙はワインクーラーに冷やしてあったボトルを取り、空のグラスに注ぎながら言う。

「富田は何か困ってることない？」

「ん、今のところは特にないけど」

「何かあったら遠慮なく言って」

「ああ」

富田は曖昧にはにかんで答えた。

彼の捧げてくれた八年は決して安くない。本当は相応の対価を支払うべきだと思っているのだが、彼はどうしても受け取ろうとしない。友情を金で買われるようで抵抗があるのだろう。

だから彼と同じような方法で返すしかないのだ。頼まれたらどんなことでも可能な限りきくつもりでいる。ただ彼の性格上、あまり遙に迷惑をかけるようなことは望みそうにない。

彼の八年に見合うだけのものはなかなか返しきれないだろう。それでも親友としてのつきあい続けていくなかで、自己満足でしかないが、すこしずつでも返していけたらと思っている。

注ぎ終わると、ボトルをワインクーラーに戻してソファに座り直す。それを待ち構えていたかのようなタイミングで、富田は無造作にテーブルに手を置いたまま、ちらりと横目を向けて尋ねてきた。

「指輪、外さないといけないんだろ？」

「そうだね」

七海と婚約したからといって勝手に外すのも失礼なので、今日、富田に報告してから外そうと思っていた。当然ながら富田にも外してもらう必要があるのだが――。

「僕が外すよ」

「えっ？」

信用していないわけではない。

外してと頼むだけなどあまりにも薄情な気がしたのだ。自分のわがままで八年も嵌めさせた指輪を、自分のわがままで外してもらうのだから、自分が関わるのが筋だろうと結論づけた。

彼の左手を取り、様子を窺いながらそっと自分のほうへ引き寄せる。明らかに戸惑っているが抵抗する気はないようだ。薬指の指輪をつまみ、すこしずつずらしながら慎重に引き抜いていく。

外れた――関節で若干もたついたものの、さほど苦勞することなくきれいに抜くことができた。そのプラチナの指輪を夜景にかざすように眺めてから、シャンパングラスの足下に置く。

そうして一息つくと、今度は自らの左手をすっと彼のまえに差し出した。

その意図を理解したのだろう。彼はごくりと唾を飲み、壊れ物でも扱うかのように優しく手を添えると、プラチナの指輪を丁寧に引き抜いた。それをもうひとつの指輪にそっと寄りかからせる。

繊細な泡のはじけるシャンパンの下で、一对の指輪はろうそくの灯りを受けてやわらかく輝いた。とても偽装とは思えない雰囲気だ。説得力を求めてプラチナにしたことが功を奏している。

「ふたつとも富田にあげるよ」

「えっ？」

虚を突かれたように、彼は目をぱちくりさせて振り向いた。

遙はくすりと笑うと、当惑している彼の左手をもういちど掴み寄せて、外したばかりの二つの指輪をその手のひらに落とした。カチン、とプラチナがぶつかりあって硬質な音を立てる。

「持ってもいいし、捨ててもいいし、売ってもいいし、好きにしてくれて構わない。売ればお小遣いくらいにはなと思う」

「……………」

黙って話を聞いたあと、富田はゆっくりと手の中にある指輪に目を落とし、そのまま固まったように動かなくなってしまった。

「富田？」

怪訝に思い、声をかけて覗き込もうとする。

その動きを察知してか、彼は何でもないのでとアピールするかのよう、どことなくぎこちない笑みを浮かべて顔を上げた。手のひらに置かれていた二つの指輪を握り、その手を軽く掲げる。

「もらっとくな」

そう言い、ごそごとスラックスのポケットにしまった。

感傷的になってるのかな――遙はシャンパンに口をつけながら横目を向けて、思案をめぐら

せる。八年も続いたことが終わるのだからわからないでもない。片時も外さなかった指輪にも愛着を感じているように見えた。もしかしたら友情の証のように捉えているのだろうか。

「指輪がなくても僕たちは変わらないよ」

「……ああ」

目が合うと、富田はうっすらと笑みを浮かべて頷いた。

二人はあらためてシャンパングラスを掲げて乾杯する。いつまでも変わらない友情を誓って。そのどちらの手にもくっきりと残っている指輪の跡が、消えてなくなってしまっても。

第33話 二人で歩む道（最終話）

一年の婚約期間を経て、遥と七海は結婚する――。

今日の結婚式は身内と友人のみが参列する小さなものだ。式のあとにはささやかなガーデンパーティを催す予定である。幸い、空はどこまでも青く澄みわたっており雨の心配はない。

披露宴は、後日、親族や会社関係者を招いて盛大に行うことが決まっている。こちらは橘財閥の後継者としての義務でしかないが、七海は嫌がりもせずあたりまえのように受け入れてくれた。

ただ、大祖母はこの結婚に強く反対していた。七海の両親がともに出自不明である点がどうしても許容できないらしい。平たく言えば、どこの馬の骨ともわからない女を橘に嫁がせたくないということだ。

けれども剛三は取り合わなかった。他家に嫁いだ人間に口出しする権利はないと。そう言われたところで彼女が納得するはずもないが、理解はしているらしい。最近嫌味くらいにとどまっている。

もちろん一族の中にも異を唱えるものは少なからずいた。だが最終的にはみな剛三に説得されて受け入れることにしたようだ。表向き、一族の総意として賛成ということになっている。

遥も七海も自分の置かれた立場はよくわかっていた。この結婚を間違いだと言わせないためには、行動と結果で示していくしかない。少なくとも付け入る隙を与えるわけにはいかない。

面倒なものを背負わせてしまった七海には申し訳なく思うが、彼女はいつだって笑顔で頑張ろうと言ってくれる。そのたびに実感するのだ。彼女とならどんな道でも手を取り合って歩んでいけると――。

「はい、開いてるよー」

七海の支度が終わったとスタッフから聞いて控え室へ向かい、扉を叩くと、結婚式直前の新婦とは思えない緊張感のない声が返ってきた。あまりにもいつもどおりなので逆に不安になる。

扉を開くと、七海はウェディングドレスを身につけて椅子に座っていた。

ウエストラインからふんわりと流れるように広がるシルエット、デコルテと背中を覆った透け感のある繊細なレースなど、クラシカルで品がありつつ華やかさも感じられるデザインである。

ドレスに合わせて、メイクも上品でいて華やかな仕上がりになっていた。別人のように変わったわけではなく、素材の良さをうまく引き立てている感じだ。文句の付けようもない出来である。

ただ、傍らに立つブラックスーツの男性が気に入らなかつた。まるで新郎のような顔をして彼女に寄り添っている。そんな彼に挑発的なまなざしを向けながら腕を組み、冷やかに告げる。

「花嫁と密室で二人きりなんて感心しないな」

「ついさっきまでスタッフもいたからさ」

男性が答えるより早く、七海が肩をすくめて苦笑しながらそう弁明した。男性をかばうというより遥をなだめているのだろう。だが、男性のほうは不快感を隠しもせず睨み返している。

彼は二階堂——七海のたったひとりの友人といえる存在である。中学、高校、そして現在の大学に至るまで同じ学校に在籍し、学部は違うが、いまでも一緒にお昼を食べたりしているらしい。

ただ、彼には友情だけでなく下心もあったはずだ。中学のときから七海に恋愛感情を抱いていたのである。一度告白を断られたものの、友人の立場からひそかに狙いつづけていたに違いない。

もっとも七海のほうは友人としか見ていない。彼と付き合うのは無理とまで言い放ったのだ。それでも友人としては大切に思っているのだろう。遥との婚約を公表前に報告するくらいには。

友人だから自分の口から伝えておきたい、過去のことも正直に話したい——そう七海に懇願されて、いまさら何もかも暴露するのはどうかと思いつつも、最終的には彼女の意思を尊重して承諾した。

過去というのは、中学一年生のときに遥と付き合い始めたこと、二年半で別れて初恋の相手と付き合い合ったこと、けれど半年も経たずにふられてしまったこと、それから遥に何度も告白されたことなどだ。

案の定、二階堂はそれを聞いて遥を軽蔑したらしい。保護者という立場を利用して中学一年生の子に手を出すなど、男としてクズでしかないと。七海に結婚を思いとどまるよう何度も訴えたと聞いている。

もしかしたら、ここに来てはまだあきらめていないのかもしれない。すくなくとも祝福してはいないのだろう。七海の隣に立ったまま、あからさまに挑発するような口調で言い返してきた。

「随分と余裕がないみたいですね」

「常識の話をしているだけだ」

「あなたが常識を語るなんて驚きだ」

切れ味はなかなか鋭かった。

中学生の七海と恋人関係になったことが間違いだとは思わないが、常識的にはアウトだろう。それを自覚しているだけに分が悪かった。返す言葉もなくじとりと彼を睨むことしかできない。

「もう、二人ともやめろよ！」

七海は両手を広げて二人を押しとどめるような仕草をしながら、強めの声を上げた。そしてあらためて隣に立つ二階堂を見上げると、人差し指をまっすぐ彼の鼻先に突きつけつつ、口をとがらせる。

「結婚式をぶちこわしたら絶交だからな」

「わかってるよ……」

不服そうな顔をしながらも、叱られた子供のようにしゅんとおとなしくなる。この様子なら結婚式で暴挙に出るようなことはないだろう。そもそも彼にそこまでの度胸があるとも思えなかった。

「結婚おめでとー！」

ふいに能天気な声が聞こえて振り向くと、双子の妹である滯が、笑顔をふりまきながら控え室

に入ってきたところだった。綾乃、真子、富田がそのあとに続く。遥も含めたこの五人は初等部から高等部までの同級生である。

富田とはずっと親しくしているが、大学が分かれた綾乃や真子とは疎遠になり、会うのも久々である。もっとも濡はいまでも二人と交流があるので、彼女を通じて近況などは聞いていた。

「わー、七海ちゃんすごくきれい！」

「こんなにかわいい子だったんだね」

「遥にはもったいないよな」

遥には目もくれず、女性陣はやいのやいの言いながら七海を取り囲んだ。その勢いに圧倒されて、二階堂ははじかれるように一步二歩と後ずさり、ひとりぽつんと立ちつくす状態になった。それを見て遥はひそかに溜飲を下げる。

「いよいよ結婚だな」

「ようやくだよ」

富田だけが遥に声をかけてきた。

互いの左手薬指から指輪がなくなってもう一年だ。遥は今日から別の指輪をはめることになるが、富田にはまだそういう予定はないらしい。見合いも恋愛もあまり気乗りしないとっている。濡への未練をいまだに断ち切れていないのだろう。

「おまえやっぱそういう格好が似合うよな」

「そう？」

遥が着ているのは新郎用の白いタキシードである。いわゆるブラックタイとして着用するものとはかけ離れているが、日本の結婚式においては、こういうものを一般的にタキシードと呼称するらしい。

白を希望したのは七海である。遥は無難に黒かグレーがいいのではないかと思ったが、絶対に白がいいと彼女に力説されてそうしたのだ。色以外のデザインにも彼女の意見を取り入れている。

ファッションに疎いので、本当に似合っているのかどうかはよくわからない。富田にしてもお世辞で言っただけかもしれない。だが、七海が喜んでくれればそれでいいと開き直っている。

「富田もそれ似合ってるよ」

そう返すと、彼は反応に困ったように曖昧な笑みを浮かべた。

「しかし、まさかあの遥が恋愛結婚とはねえ」

七海を取り囲んでいた女性陣のひとりである綾乃が、腕を組みながらそう言うと、信じがたいものを見るような胡乱な目を遥に向けた。真子と濡もつられるように振り向いて小さく笑う。

「私もちょっとビックリしちゃった」

「あの変わりようには驚くよね」

昔から遥を知っているひとなら誰でもそう思うだろう。

かつて遥は、恋愛に興ずる妹や知人たちを冷めた目で見ている。きっと自分は一生誰も好きになれないと思っていた。橘の後継者として二十代で見合い結婚するのだと、当然のように考えて

いた。

「でもさ、遥が心から好きだと思える人と出会えて、その人と結ばれて、本当によかったなって思うよ……義務感だけで結婚するんじゃ寂しすぎるもん。私、遥にも幸せになってほしかったから」

そう言って、滯はうっすらと瞳を潤ませて微笑んだ。

昔から彼女はそうだった。中高生のころは遥が誰も好きにならないことを心配していたし、七海を好きになってからは一貫して応援してくれていた。正直、余計なお世話だと煩わしく感じることも少なくなかったが、それでも気持ちはありがたい。

「幸せになるよ」

「うん」

滯は嬉しそうに頷いた。

「ま、これで富田も報われるよな」

すこし湿っぽくなった空気を払拭するかのよう、綾乃は両手を腰に当ててからかいまじりにそう言い、いたずらっぽく笑う。名指しされた富田はなぜかうろたえていたので、遥が応じた。

「ペアリングの話だよ。滯から聞いた？」

「遥の婚約を教えてもらったときにね」

偽装ペアリングの件は、共通の友人である綾乃と真子にも秘密にしていた。滯はそのことを当初から心苦しいと言っていたので、解禁したらまず彼女たちに話すだろうと予想はしていた。

「大学のときに噂を聞いて心配してたんだよ」

「あのころは滯もわからないって言うしさあ」

「ほんとごめんね」

滯は申し訳なさそうに両手を合わせるが、真子も綾乃も別に責めるつもりはなかったのだろう。事情はわかってるよ、気にしてないからさ、と二人してあっけらかんと笑い飛ばした。

「それより、私、遥くんのプロポーズが気になるなあ」

「私も気になるなあ」

真子がキラキラと目を輝かせて夢見がちに言うと、綾乃もニヤニヤとして同調する。その様子から、ロマンチックなものを期待しているわけではなく、単に遥をからかいたいだけということは一目瞭然だ。

「こんなすました顔してるけど、七海ちゃんにはメロメロになってるって話だし、金にものを言わせてすごいことしたんじゃない？ 高級ホテルのスイートルームでシャンパン飲んでるときに、赤いバラの花束と指輪を渡して、キザったらしい情熱的な言葉でプロポーズ、とかさ」

「内緒だよ」

ところどころかすっていたのでドキリとしたものの、遥は素知らぬ顔でさらりと受け流した。それでも綾乃はあきらめようとしない。

「じゃ、七海ちゃん教えてよ」

「内緒です」

七海は困惑ぎみに愛想笑いを浮かべながら、そう答えた。

口止めはしていないが、さすがにこんなところで話すわけにはいかないだろう。無理やり抱かれたあと、ベッドの上で全裸のまま言いくるめられ、結婚を承諾してしまっただなんて——。

あれが間違いだとは思っていない。ただ、あんなプロポーズになってしまったことは申し訳なく思う。婚約指輪を贈るときにやり直せばよかったのかもしれない。いまごろ気付いてもあとの祭だが。

もしこのプロポーズのことを二階堂に知られたら、ますます軽蔑されるだろう。七海の後方にいるのをいいことに、思いきり仏頂面をしている彼を見ながら、遥はひっそりと苦笑した。

コンコン——。

開いたままの扉を軽く叩いて入ってきたのは、武蔵とメルローズだった。その後ろからは護衛が二人ついてきている。武蔵は軽く手を上げて遥に笑いかけたが、メルローズは一目散に七海のほうへ駆け寄っていく。

「七海ちゃん、おめでとう！」

「ありがとう」

メルローズは座ったままの七海と手を取り合い、はしゃいでいる。

一時期は気まずかった二人だが、もうすっかりわだかまりがなくなっているらしく、この一年はしょっちゅう一緒にお茶を飲んでいた。外見は似ていないものの仲睦まじい姉妹のようだ。

「すごくきれい……いいなあ……」

「メルだってそのうち着るんだろ？」

「ふふっ」

メルローズは白い肌をほんのりと染めて、幸せそうに笑った。

武蔵もそれを遠巻きに見ながらひどく甘い顔をしている。やっぱり家族としか思えないなどいつか言い出すのでは、と心配していたが、こんな顔を見せられては案ずるのもバカらしくなる。

「ん、何だ？」

「別に」

視線に気付いた彼に不思議そうに尋ねられたが、遥はそっけなく受け流す。自分の結婚式のまえにする話ではないだろう。表情を動かすことなく静かに腕を組むと、隣でふっと笑う気配がした。

「呼んでくれてありがとな」

「メルと外でデートできてよかったね」

「おまえたちを祝いたかったんだよ」

遥の憎まれ口に、彼は思いのほか優しい声で返してきた。

「嬉しいんだ。俺にとって家族みたいな二人が結ばれるんだからな。おまえには幸せになってほしいし、七海を幸せにしてやってほしい」

急にそんなことを言われて、気恥ずかしさと苛立ちがないまぜになり、次第に顔が熱を帯びていくのを自覚した。不自然にならない程度に顔をそむけつつ、非難めいた口調でぼそりと言う。

「こんなときだけ父親面するんだ」

「こんなときしかできないだろう」

そう応じた武蔵の声に、揶揄するような色は微塵も感じられなかった。反論の言葉が思い浮かばなかったわけではないが、遥は何も言わず、うつむき加減のまま口元だけをかすかに緩めた。

「そろそろ時間だよ？」

真子がそう告げると、滞たちも武蔵たちもそろって控え室をあとにした。二階堂もあからさまに未練がましい様子で出て行く。賑やかだったその部屋には遥と七海だけが残された。

「騒がしくて疲れたんじゃない？」

「ちょっとだけ」

座ったまま肩をすくめて苦笑する七海を見て、遥は軽く微笑み、空いていた椅子を彼女のそばに移動させて腰を下ろした。

彼女はあまり人付き合いが得意でない。さほど親しくないのに親しげに接してこられるのが苦手なのだ。たとえ相手に他意がなくても。一対一でもそうなのに複数のひとに囲まれたらなおさらである。

ただ、それでは本家の人間として差し障りがあるので、克服すべく努力していた。現にさきほども表情や態度に出すことはなかった。きっと、これからはもっとうまく振る舞えるようになるだろう。

彼女には強い意志と根性があるのだ。

ただ、悪く言い換えれば強情ということにもなる。間違っただけで突き進んでしまったときがやっかいだ。遥でさえ説得がままならない。これまでいったいどれだけ振り回されてきたことか――。

「ねえ、もしかして緊張してる？」

「そんなことはないよ」

遥は思わずふっと笑みをこぼす。

黙りこくっていたのでそう思われたのかもしれないが、単に過去に思いを馳せていただけである。楽しかったことも、嬉しかったことも、つらかったことも、苦しかったことも、いまとなってはどれも大切な思い出だ。

「そろそろお時間ですよ」

女性スタッフ数人が控え室に入ってきた。引きずるほど長いドレスの裾を丁寧にさばきながら七海を立たせ、軽くメイクやベールを整えて、不備がないか真剣な目つきでチェックしていく。

それが終わると、七海にいくつか確認をしてからせわしなく離れていく。ひとり残された七海は、気持ちを落ち着けるように呼吸をしたかと思うと、まぶしいくらいの笑顔でパッと遥に振り向いた。

「行こう」

純白の手が、まっすぐ目の前に差し出される。

遥は虚を突かれてきょとんとしたが、すぐ我にかえり、その手を取って椅子から腰を上げた。

そしてあらためてしっかりと手をつなぎ直すと、互いに目を見合わせてくすりと笑う。

「緊張はしてなさそうだね」

「これでも結構してるよ」

「そうは見えないけど」

「遥と一緒にいるからかな」

七海はいたずらっぽくそう言い、肩をすくめた。

キィ——両開きの扉がスタッフたちの手によって開かれていく。その音に反応して二人は前に向き直る。扉の向こうの回廊には、青空から降りそそぐ白い光があふれんばかりに満ちていた。